
らき すた オルタネイティブ ~震える時空

旭日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた オルタネイティブ へ 震える時空

【Nコード】

N7726F

【作者名】

旭日

【あらすじ】

らき すたの世界を舞台にした、もう一つの“らき すた”の物語。

第一回投稿分

輸送部隊が着いたのは、夜明けになってからだ。

「おっすー、こなたー」

「おお、ゆい姉さん。おっすー」

寄ってきたゆいに挨拶する。

「ひさしぶり。元気してたみたいだねー」

「姉さんこそ。きい兄さんにはもう会いに行っただの？」

「んーんー。これからー。んふふー、もう」この日のために一秒でも早くと思っただけ飛ばしてきたのよう、そりゃもう、たんのしみでねえ」

「うん。まあ、姉さんの場合、かつ飛ばしすぎて荷物落とさないかが心配なんだけど…」

「やあねえ、だーい丈夫、このわたしにかぎってそんなことあるわけないじゃーん。あ、みなみちゃーん、おっすー！」

ゆいが勢いよく駆けよっていくと、その先にいた岩崎が、気づいて敬礼をした。

「お久しぶりです、成実中尉」

「んもーっ、そんな堅苦しい呼び方しなーいでみなみちゃん。ど
うぞお姉さん、て呼んでちょうだい？」

「ええ…」

かるいのりで返され、微妙に困り顔だ。岩崎は優秀な小隊員だが、
こういう愛想には欠けるところがある。ゆいは構わず、笑顔でから
むとポケットから便せんを差し出した。

「はい。またゆたかからの手紙、預かってきてるから」

「いつもありがとうございます。…中尉」

「いいのいいの。みなみちゃんには、いつもお世話になってるん
だから」

岩崎は無表情のまま顔を伏せた。怒ったようだが、照れているの
だ。

「そんな…」

「本当よう。ゆたか、いつもみなみちゃんの手紙、楽しみにして
てねえ。ーほら、あの子もあいう生活してるでしょ？ 私も仕事
がこんなんだしさー。だからほんとに助かってるのよ、そういうところ」

「いえ…」

困った様子の岩崎に、泉は横から助け船を出した。

「姉さん。そろそろきい兄さんところ行かなくていいの？」

「あ、そだったー！　じゃーねー！　みなみちゃん、こつなたー！
またあとでねー！」

泉の一言で、ゆいはすっ飛ぶように駆けていった。

「元気な人だねえ」

「ええ…」

「みなみちゃんも大変だねー。毎度あの調子じゃー」

「いえ…成実中尉は、楽しい方ですから」

口元を緩める岩崎の顔を、泉はすすつとのぞきこんで言った。

「でも、まだお姉さん、て呼んであげないの？」

「え…いえ、その」

「喜ぶと思うよー。ほんと。ねえ。ほら、姉さんだし」

「…いえ」

「んんふ？　もしかっしてー。恥ずかしいとかあ？」

黙りこんで目をそらす岩崎の顔に、泉はたまらなそうにもだえて
見せた。

「んんーん。くああわいいねえ。もう、みなみちゃんはねーそうい

うとこがいい子お。っていうかもつ、たまらなくっ」

「ほら」

「いて」と、後ろからはたかれ、泉はかるくつんのめった。

「後輩からかってんじゃないわよ」

いつのまにかやってきていたかがみが、きつい目で睨む。

「べつにからかってたわけじゃないよー。ただ、新たな魅力の追求って言うかさ、要素の追求というかね？　なんというか？」

「わけわかんないこと言ってるじゃないで。困ってるでしょ？　ったく。――ねえー。ごめんね、岩崎さん、ほんと」

「いえ…その、…失礼します。泉先輩、柊先輩」

走り去る岩崎を見送って、かがみは片手でクリップボードの下に敷いた泉を、じろりとにらんだ。

「ほら。行っちゃったじゃない。怒ってるかもよ。アレは」

「ああ、違う違う。かがみね、あれは怒ってるんじゃないで、照れ喜んでるの。みなみちゃんはず段がやつんつんで、無口って感じでしょ？　なかなか心開きにくいって言うかさこういうところあるしね。ちなみにそのギャップが見ているほうとしては、なんかもうね…」

べん、ともう一度クリップボードを振り下ろされ、泉は黙った。

「いいからアホなこと言っでないで。なんかさっき、田村さんが探してたわよ。あんたんとこの。また黒井先生から呼び出しとかじゃないの？」

「……あ。そういえば」

「忘れてたわけ？」

「やつば！ 早く戻らないと！——じゃーねー！ かがみー。またあとでねー」

「はいはい。走ってそこらにぶつかるんじゃないわよ」

すたすたと廊下を早足に駆けていく。そうだった。今日は小隊全員が参加しての戦闘訓練プログラムが組まれていた。

早く行かないとまた黒井にどやされてしまう。廊下を急ぐ泉の耳には、突如として警報ブザーが鳴りひびくのが聞こえてくる。

……。

明滅する赤い光。

怒声が聞こえ、伝令が鳴り、ついで轟音が轟いてくる。
そして…。

…そして…。

……。

……。

……。

…目を覚ますと、部屋の中にいた。

…。

視界がぼんやりと開けてくる。泉は目の前のディスプレイを見た。右隅に表示されたデジタル数字の列は、ひっそりと朝の六時半を指している。

朝の、ろく、じ…？

「おお…やばい…朝じゃん…」

泉は目をこすりながら呟いた。朝の空気が苦々しい。低血圧だ。

「…うつわ、…寝落ちしてんじゃん。マジで…」

ディスプレイを見てげんなりと言う。

しかしもうやっている時間もない。今日は炊事の当番なのだ。

アプリケーションを終了して、表示を閉じる。すぐ制服に着替えて、洗面所へ。

「おう、おはよう。こなた」

「あ、おはよ…」

「なんだ、また昨夜遅かったのか？」

「うん…たぶん、二時間くらいは寝たと思うけど。起きたら寝落ちしててさ」。街中だからよかったんだけど」

「まあ、好きなのはわかるがほどにしとけよ。いくらなんでも

身体に悪いぞ。それにほら！ 寝る子は育つていうしな」

そこで父は顎に手を当て、

「いや、待て待て。あまり育つてもらうのも困るというか。お前はそのままのお前でいいというかーううん。父の心境というのは、なんというか複雑なものだなあ」

「先準備してるよー」

うるさい父を洗面所に置き去りにしつつ、台所へ。

エプロンを巻いて、朝ご飯の準備を始める。

前日からだいたい献立は決めてあるので、冷蔵庫の中身を探り、今日買ってくるものまでを決めておく。

（今日は夕方買い物して帰らないとな…）

ゲームーズに寄ろうかと思っていたが、たぶん無理だろう。ぼんやり考えつつ、包丁を叩き鍋の火加減を見る。

慣れていることなので手際がいい。ただ性格のせいか弁当はめつたに作らなかつた。今日も購買でコロネだろうが、まあ、あまり気にしない。

「あ、お姉ちゃん。おはよー」

「おー。ゆーちゃんおはよー。どうしたの今日。遅いね」

「目覚ましかけ忘れちゃってて……寝坊するところだったよー、朝弱いから、私」

「うっん、大丈夫だよー、ゆーちゃんはね。そういうところもがつり萌えるから」

「あ、お、おいしそーだねー今日のご飯。あ、食器並べておくね」

「うん。お願い」

「おーなんだ、ゆたかちゃん。座っててもいいぞー」

「あ。いいです、これぐらい。座っててください」

「そうか？ 悪いなーなんか」

「いえいえ」

朝食を済ませて、後片付けをすると、身支度にかかる。髪が長いので手入れが手間だ。面倒くさいときには、よくさぼる。

歯を磨いて、顔を洗い、服装をチェックして鞆を取る。

今日も見事にべったんこだ。あ、かがみに宿題頼んどかないと。

「いってきまーす」

家を出て、いつもの通学路をたどる。

電車に乗って次の駅へ。電車を降りると、構内をくぐり、駅の正面へ抜ける。

いつもならここがかがみ達と合流するのだが、今日は姿がない。あれ？ と思いつつも、反射的にポケットを探り、あ、ケータイ今日忘れてきたっけ、と今さら気づいた。

「かがみさんたち、いないね」

「うん。どうしたんだろうね、遅刻かな…」

見回してみても、やはり二人の姿はない。

「フツ、私らより先に来てるはずなんだけどね。うーん、しょうがないなあ。一応ぎりぎりまで待ってみようか。あ、ゆうちゃん先行っててもいいよ」

「あ、うん…」

そうして待つては見たが、二人がやってくる気配はない。

（休みかな…？　それか、たまたま早くに行ったとか…）

理由は思いつかないが、そんなところだろう。

一応、泉は公衆電話で連絡も取ってみた。が、返ってくるのは機械的な音声ばかりだった。

『ただいま、電波の届かないところにおられるか、…』

時間ぎりぎりまで待つてみたが、結局二人は現れない。

しかたなく、釈然としないながらも泉は先に行っていることにした。

（インフルエンザかなんかかなー、流行ってるって話も聞かないけど）

一本遅れてバスに乗り、校舎近くのバス停へ。校門を抜けて下駄箱をくぐり、階段をあがりかけて、そこで予鈴が鳴る。おっと、急

がないと。

三階までの気怠い道のりを、こころもち早足で終え、自分のクラスにすたこらと駆け入る。

(ん…?)

廊下を歩くときに違和感を感じた気がして、泉はなんだろう、と思ひ、辺りを見回した。

なんだか妙に静かというか、ぴりぴりしているというか…。

まあ、基本的にそういう空気を読まない泉は、のほほん顔でクラスに入り、自分の席に向かった。

「あー、泉さん…」

「あ、みゆきさん。おはよ…」

硬い表情をしたみゆきは、泉の挨拶もそこそこに立ち上がると、

「おはようございます。あの、つかさんは、今朝は？」

「え？ いや。会わなかったけど。なに。来てないの？」

「ええ。泉さん。今日は携帯はお持ちでしたか？」

「あ、ううん。ごめん。家に忘れてきててさ。駅でそれ気づいて。かがみたち来てないから、連絡しようと思ったんだけど。でも、電話してもつながらなかったよ？」

「ええ…」

「なに、二人とも今日どうかしたの？」

「ええ…泉さん。あの、落ちついて聞いてくださいね？」

いつもと違う、白くこわばった顔でみゆきは言った。

「かがみさんが…事故に遭われたそうです」

第二回投稿分

……基地を出るときだった。

「……こなた」

背後から呼び止められ、ぎくりと見ると、そこにかがみがいた。

「……あ、……か、」

とっさに言葉に詰まる。ひとしきり口を開いたり閉じたりし、

「……かがみ……」

やっとそれだけ言う。

かがみは何も言わない。ただ黙ったまま、きつい目でこちらを見ている。

（やばい。怒ってるってレベルじゃねーぞ、これ）

冷や汗混じりに思う。

できれば顔を見たくはなかった。

本当は会いたいとも思っていた。だが、だからこそだ。だからこそ、会いたくはなかった。

会って顔を見たら、妙な期待をしてしまう。弱々しく、情けなくすがりついてしまう。そんな気がしてならなかったのだ。

だから、何も言わず出てきたのに……いったいどこで知ったのだろうか。

そう思っていると、かがみは急に表情を和らげた。

「――ふふ」

「？」

笑い声を漏らす。

「――それで？」

と、笑顔のまま言った。

「……え？」

「『え？』 じゃないわよ！。あんだ、ここで何か私に言うことがあるでしょ？」

「え。……え、……ええ、っと」

「ん？」

思いつけずにいると、さらになつこり微笑まれた。

「な、なんで、ここに？」

いかん。なにか怖い。

「それ、なんでここにいいのかって意味？ やあねえ。お父さんに聞いてたのよ。あんだの異動の話。今日行くてこと聞いたのは、なぜだか昨日の夜だったけどね。ねえ、それより――こなた？ あんたそれ、ちよつと聞き方が違うってふうに思わない？」

「え？ え、えーと……」

「そこはね。正直に『何で分かったの？』って聞くべきだと思うのよ。そうすれば私も余計な寄り道しないで、はっきり言いたいことを言えるわけね。ただ、さっきみたいな聞き方されると、なんかまだなにか、ごまかしきれるんじゃないの？ 許してもらえないんじゃないの？？みたいなね、そういう風に思われてるみたいでね。なんだか無性に腹が立ってこない？ ねえ？」

「は、はい。す、すんっした、かがみさん。…で、で、な、何で分かったの？」

そう聞くと、かがみは笑っていない目にほんの少しだけ——ちらりと、失望の色を浮かべ、

「—そうねえ。今日行くってことはともかく、今日の、いつ、行くのかってことは誰にも言ってなかったもんねえ、あんた。おかげさまでこっちは見送りもできないとこだったけど」

「ご、ごめんなさい……」

「でもねえ、こなた？ 私がここにいるのってそんなに不思議なことかしら」

「え？」

そこで、苛立ちが頂点に達したようで、かがみは泉の鼻先をびしりと指で指した。

「私がここにいるのはね。あんたがどんなやつかったのを分かってるからよ。少なくとも、こういうことするだろってことぐらい、わかるぐらいにはね！！　そうでしょ！？」

急に険しい顔になって、真正面からにらみつけてくる。

近くににじり寄られすぎたうえ、鼻先に指突きつけられ、逃げることも出来ない。

泉は壁に張りつき、固まった。怒るネコのように激しいかがみの視線を、まっすぐに浴びる。

そうして威圧するように、何秒かにらみ続けた後、

「……まあ、あんたの立場ってものも分かるわよ」

はあ、という吐息が泉の顔にかかって感じられる。

「……あんたがどんな気持ちでいるかは知らないけどね。私には一度も相談してくれなかったもんね。結局。――どうせ、私に迷惑かかるとか。そんなふうにしたんでしょ？　周りの目ってものもあつただろうしね。」

すこし上目づかいに見ながら、かがみは淡々として言った。

「私もね。それとなく話は聞いてたのよ。あんたの様子がおかしいってことくらい、とくに気づいてたし。こう見えても、顔広いからね。聞けるかぎりの事情ならもう全部聞いてるわよ。…でね。その上で言わせてもらえば、あれはあんたの自業自得だろうってことも思ってるし、周りの反応も無理ないとは思ってるわ」

「……、」

泉は反射的に目を伏せた。

足もとがぐらりと揺れ、崩れそうになる。

「——当たり前でしょ。いい？ 聞いて。あんたが普段から周囲に信用得る態度取ってるなら誰もこんなふうにはんなウワサ立てたり、ああいうバカげた態度に出たりしないのよ。そこそこはつきり言っとく。そうじゃないとあんたのためにならないもの。今回のことは、あんたにも至らない点はあったわ。それが成実先生の言うことなのも、信用に値することだと私は思う。知ってるでしょ？ 私はあの人の生徒だったんだから。それを否定する気はないわ」

「……、」

泉はもうかがみを見ていなかった。胸が締めつけられる。

やっぱりだ。自分は心のどこかで期待していた。かがみならきつと優しくしてくれる。かがみならきつと慰めてくれる。

……ムシのいい話だった。

ずっと顔を上げない。そんな自分にかがみは何を感じただろう。

失望？ 怒り？ 諦め？ 呆れ。

どれだろうか。

なににせよ、力強い口調で後をつづけてきた。

「……がんばれなんて言わないわよ。言ってもあんた、きっとできないでしょ。あんたのことはね。私はよく分かってる。さつきも言ったけどね。どんだけダメなやつかってことぐらい私はよくわかってるわ。だからそんなこと言わないわよ。——けどね。聞いて。いい？ これだけでいいから。聞きなさいよ」

かがみは泉の肩に触れ、その頼りなさを支えてやるように、力をこめた。

「あのね。転属するからって、それが何？ どこまで行ったってあんたはあんたよ。そういう奴なのは変わらないわ。それともう仕方のないことよ。そうでしょ？」

「……、」

「……だからね。がんばってなにかやんなさいなんてこと言わないわ。精一杯やれなんてことも言わない。でもね、これだけは覚えといて。私はあんたのこと、信じられる奴だなんて思っただけ。でも、一つくらいなら信じてあげる。あんたのこと。――どうしようもなくロクでもなくてダメな奴だってこと分かっててもね。私はあんたのこと、一つくらいなら信じてあげるわ」

「……今のあんたに言えるのはそれだけ。ほかにはどう言いようもないわ。結局、あんた自身がなんとかしようとしないう限り、誰にもどうにもできないもの」

かがみはわずかに目を伏せ、その仕草がなぜか痛みをこらえているように見えた。

「……、」

「それを忘れないで。いい？ ……分かったわね？」

「……、」

「分かったの？ ほら！ 返事！」

「うん……、」

「……ありがと、かがみ……、」

早退したい、と泉が伝えると、はじめ黒井は
「なんや。具合でも悪いんか？」
と言い、理由を述べると

「はあ？」

と、いかにも好ましくなさそうに言った。

「……あんなあ。泉。お前、あんまアホなこといつとんな。いや。」

気持ちとは分からんでもないけどな。柊のことはウチも聞いとるからな。せやけど、今は我慢しいや」

「……いや、でも……」

「でもやないわ。ダメや、ダメ。悪いけどウチは許可やらへんぞ。いくら友達の見舞いに行く言ったかて、それで学校サボっていいゆう話はないんや。どうしても言うなら放課後になるまで待ちい。」

「……、」

「だいたいな。今お前が行ったかて、いらんことになるだけやで？ あんな。こういう事故いうんはな、いつ起きるかわからんもんやろ？ せやから身内のもんも、今の今は何やらようわからんことになつとるはずやで。そこに他人のお前が行ったかて、どうなる？ いったくけど、ただ迷惑かけるだけやぞ」

納得しない様子の泉に淡々と言い、

「今は我慢しいや。ウチなら職員室で話聞けるから、逐一それ教えてたつてもええ。ああ。先にゆつとくけど、高良連れてきたつても許可は出せへんからな。ちよつとのあいだやから、大人しくしとき。ええな？」

そう言つたつきり、黒井は取り合おうとしなかった。

「――黒井先生は立场上そうおっしゃってるんでしょう。ふだんはあ見えても、そういう区別のほうはしっかりつけられる方ですから」

みゆきは言つたが、泉は少なからずショックに思っていた。

たとえ立場上のこととはいえ、ああも冷たいことを言える人だとは思っていなかったからだ。

(……絶対、許可してくれると思ってたのに……)

がっかりしつつ、泉は放課後を待った。

放課後。みゆきと二人、連れだって病院に到着すると、指定された病室の前につかさが待っていた。

電話は事前にみゆきがしており、下のロビーで待っていたかがみの家族に挨拶し、二人は病室のある階へと上がっていった。

二人の姿を見るなり、つかさはみゆきに飛びついていった。

大声は上げずに肩を震わせ、みゆきは優しくそれに応じていた。

やっぱりこういう役はみゆきのほうが適している。

二人の姿を見ながら、泉は胸に暗いものが渦巻いていくのを感じた。自分には結局、何もできないのだろうか。

取り乱したつかさがいくら落ちついて、それを椅子に座らせる頃にも、泉は結局何がどうなったのかをまったく聞いていなかった。結局、かがみの容態はどうなのだろう。

“集中治療室”と書かれたプレートの下には、「面会謝絶」の札が、ドアノブから下げられているのが見える。

「……つかささん。……かがみさんは？」

「……えっとね……あのね……。お姉ちゃんはね……。……、お姉ちゃんは……」

つかさはまだすこし、しゃくり上げていた。

「車にね、くるまにひかれたの……わたし、その、すぐまえまで、フツーに話しててね……ぜんぜん、なんとも、そんなこと、考えてなくて……」

「横断歩道を渡るときにね……ちよつとだけ、お姉ちゃんが遅れたの……信号待ちしてるときに、なんか忘れ物したかもって……」

口元に手を当てたまま、細い声で言う。

「カバン開けて、探しててね……私、声かけたの……もう変わるよって……わたしが、先に渡ってて、それでお姉ちゃん、ちよつと、あわてたみたいにしてて……」

「もう来るかなと思って、私、ちよつと目をはなしたの……そしたら、後ろでなんか、すごい音がしてね……ふりむいたら……お姉ちゃんが倒れてて……血が、血が、いっぱい出て……手も、足とかも、何かヘンなの、ヘンな風に曲がって……すぐそばに、大きいトラックが止まって……人がいっぱい集まってきて……それで、私、わたし……」

つかさはしゃくりあげ、時折話に詰まりながら、続けた。

「……お医者さんはね、良くないって言ってた……一命はとりとめたけど、このままじゃ、いつどうなるかわからないって……、……手は尽くしたけど……、このまま、持ち直さないようだったら、もう、

ダメだろうって……、……今日の朝まで……ホントに、普通に話してたのに……今日、こなちゃんの、誕生日だからって……お姉ちゃん、あ、あんなに、うれしそうにしてたのに……」

口元に少しだけ笑みが浮かび、ひきつつてすぐに消える。

「……ねえ、ゆきちゃん……、……こなちゃん……、どうしよう、わたし……このまま、もし、お姉ちゃんが……おねえちゃんが……」

……ああ、そういえば今日、私の誕生日だっけ。言われて思いだし、ぼんやりと考える。

ほんとにどうでもいいことのように泉はぼんやりしていた。頭のどこかが遠くにある。

「し、しんじゃったら……、うう、うう……、」

憔悴した様子でも、まだ泣くことを止めようとしないつかさは、見るほどに痛々しい。

でも、泉の目には現実感がない。

みゆきはつかさの背に手を当てていた。気遣わしげに見えたが、その顔はいつも以上に白く、やはり自分自身も相当にショックなのだ。

面会も出来ず、つかさもこのぶんでは自分のことで手一杯だろう。泉たちは顔を見せただけで何も出来ず、結局、そのまま帰るしかなかった。

ほかに、なにが出来たわけでもない。

黒井の言うとおりだった。

帰り道、泉は思った。

みゆきがいたから、まだなんとかあったようなものだ。
自分だけではちょこまかして、おたおたして、ムダに面倒や失礼をかけるだけなのが落ちだったろう。

帰り道の途中、みゆきとは何も話さなかったように思う。
薄い雲が重くたれ込め、空は今の時間帯以上に暗く、うす寒かった。

「……かがみさんは……、」

レンズの奥に隠れて、口にしたみゆきの表情は読み取りにくかった。

「……いえ……」

ふり向いた泉に、みゆきは唇だけ動かして言った。
駅の構内にはもう着いていた。

「それでは、また、明日。……泉さんも、無理はなさらないようにしてくださいね」

「うん……みゆきさんこそ。大丈夫？」

「……、」

大丈夫です、と言うように無言で笑ってみせると、みゆきは明るいホームを歩いていった。

泉は今度こそ、一人で残された。
帰っても眠れそうにない。でも……とりあえず、帰らないと。

なにかやっっていないと、気が持ちそうになかった。だが何であれ、手につきそうにない。

ネットゲをやりかけて放り、マンガを読みかけてすぐに閉じ、あげくにはふだんなら開いて見もしない宿題にまで手をつけてすぐにやめ、泉はその日ひと晩中、ムダな時間を過ごしたあげくに、いつもより早く眠っていた。

目覚めたら全部夢でした。

そうなることを願わなかったか。そう言われれば、否定は出来ない。

なにせよ目が覚めてから、ほどなくして電話は鳴った。

…かがみがついさつき、病院で亡くなったという知らせだった。

…連絡を受けて、だいぶ時間は経っていたと思う。

泉が到着すると、うす暗い扉の前ではつかさが待っていた。
まともに残った医療施設があったのは幸いだった。

あの状況ではどこまで被害が広がっているかわかったものではない。
い。

電源だけは最後まで死守されたのだろうが、それ以外の被害箇所
はといえば、見る影もなくめちゃくちゃだった。

夜遅い時間帯に、ほとんどの灯りは落ちている。

必要最小限の明るさしかない通路には、他にも何人か、かがみと
親しい同期の日下部、峰岸、それに、みゆきらもう駆けつけてい
る。歩み寄ると、一様にこちらをうかがうのが見えた。無傷ではす
んでいない者もいる。包帯の白さが薄闇に映えている。

「こなちゃん……」

涙の混じる声で、つかさが言ってきた。

「……ごめんね……こなちゃん、……お姉ちゃん、がんばったんだけど
ね……」

自身も額と左手に包帯が巻かれている。右手がハンカチを握って
いた。

「……こなちゃんが来るまではって、思ってたんだけどね……、ダ
メだったよ……間に合わなくて……」

手術中のランプは静かに消えている。踏み出そうとして、泉は肩
に重みを感じた。

みゆきが無言で首を左右にふるのが見えた。

「ごめんね……。…お姉ちゃんね……。火傷がひどくて……。家族の人以外は、遠慮するように、って言われてて……」

うつむいたまま、つかさが言う。

泉はそれで自分がいきなり部屋に踏みこもうとしていたのに、ようやく気づいた。

「泉さん……」

横合いからみゆきが言う。

「私も、まだお会いしてないんですよ。……よかったら、一緒に行かれますか？」

「おい、高良……」

なにか言いたげに、日下部が言いかける。それを峰岸が止めていた。二人のあいだにはそれで通じるものがあつたのかもしれない。どうにか生還を果たした様子の日下部の腕には、分厚いギプスが巻かれ、左目は眼帯でふさがれている。

泉もまた寒気とともに、ぬるりとした嫌な感触がしていた。ああ、きつと、かがみは、とすんなり思う。

つまり、それほどまともな死に方が出来なかったのだ。と。

「……、」

扉を開けると、灯りの落とされた部屋の中に、ぼつんとひとつだ

け台が置いてあった。

先に入っていったみゆきが歩み寄り、確認を済ませると、泉の背中をうながした。

泉はふらつくような足どりで、その小さな台へと近寄った。

みゆきがのいた後に、もとの通りかけられた布を取る。

…すると、すこし変わり果てたようだが、見なれたかがみの目を閉じた顔が、そこにあった。

……顔の左半分に、汚れて黒ずんだような火傷がおおっている。無事な右側にも点々と小さな火傷が見てとれた。

眠っているように口を半開きにして、まぶたは閉じられている。息を引き取ったときの顔は、あまりおだやかなものではなかったらしい。なら、誰かがやってくれたのだろう。……あんなに長かった髪は、手術のために、綺麗に剃られてひとつもなくなっていた。

確認を終えて、布を戻す。

不思議と涙は出てこなかった。

薄情だと思われたかもしれない。そばで見ている人の目には、とくに。けれど、それからずっと後にも泉は泣けたことはない。

「もう一度」、かがみの顔を「見た」ときにも。

不思議と、涙がわいてくることはなかった。

曇りがちだが、晴れた空の日だった。

かがみの葬儀に出るために、制服で泉は電車に乗った。私服以外で家に行くのは、思えばこれが初めてだった。家に着くと、脇の境内の横あたりに記帳台があり、雨よけのテントの下でかがみのお姉さん―いのりさんだったか―が、受けつけ役をしていた。

それほど面識はないが、泉のことは知ってたらしく、すこし声をかけられた。

「… ゆっくりしていつてあげてね」そう言つて微笑む顔が綺麗な人だな、と泉は思った。…… ちょっとだけかがみに似ているな、とも泉は思った。

かがみのクラスメイトもかなりの数が来ていて、そのうち日下部や峰岸といった面子は、泉も見知っていた。

顔を合わせると、日下部は「おう」とわりあい軽く返し、けつこう意外だったのは、その横にいる峰岸のほうで、明らかにシヨック大きそうにしていることだった。「…、」

ふだんの感じからすると、その反応は逆になるような気もするが、分からないものだと思う。地元の社を管理する家だから、その関係でも、人は大勢来ていた。敷地の一番大きな建物でも、全部あわせると入りきらないほどだ。

そのなかで、泉は用意された座布団に座り、読経の様子を眺めることができた。先に来ていたみゆきが勧めてくれ、列のなかごろのほうに着くことができたのだ。

みゆきの横につかさが座り、泉はみゆきを挟んで、その反対側だ

った。

つかさのちょうど右隣に、かがみのもう一人のお姉さん——まつりさんといった、たしか——が座って、険しい表情で黙りこんでいる。

声をかけるのもためられるような横顔が、いかにも気の強そうな人だった。ただ、たれ目がちの目が柔らかかで、意固地になったつかさといった感じだろうか。

：そんなきつい顔でいたら、周りが気を遣うだろうに。横のつかさも落ち込んではいるが、むしろ年下のはずのこちらのほうが、立ち直りは早そうな様子だった。

かがみのご両親とは、座るときにちよつと挨拶したくらいだった。こちらはさすがに落ちついていて、今は後ろ姿しか見えていないが、泉ははじめ、なんとなく、たとえば声を荒げて怒るところかが想像しにくい人たちだな、と思った。

：その向こう、白木の棺、白い布、黒と白の幕が下げられた前にかがみの遺影が飾られている。写真の中のかがみは、笑うでもなく怒るでもない。ただ動かないだけだった。読経の声が続き、ひそひそした周りのざわめきが、部屋の中に満ちている。

参列者が入れ替わりに交わしていく会話の中で、泉は、身の置き所のなさを少しづつ感じはじめていた。……何してるんだろいうな、私。と。脈絡なくだが、そう思う。

お焼香が終わり、出棺のクラクションが鳴らされる。

かがみのお棺を乗せたバスが、敷地を出て、火葬場へと向かっていくのが上の道から見てとれた。

ここから先は、家族と身内の人たちだけで、泉たちの出番はない。最後まで見送って、もうやることもなく、家に帰ろうと思い、そ

の泉を、つかさが途中で呼び止めていた。

「こなちゃん！」

と、声を聞き、走り寄ってきたつかさを見て、泉は少なからず驚いていた。

「あれ？　つかさ……」

てつきり、バスに乗っていったものだと思っていたのだ。

「親戚のおばさんをお願いしてたの……あとで、あっちまで乗せてってくださいって、どうしてもやらなきゃいけないことがあったからって……」

言いながら、つかさはひとつ息を吞んで、持っていたものを差し出して、

「はい。これ……」

と、泉に手渡した。渡されたものを見ながら、泉ははじめ、それがなんだか分からなかった。丁寧にリボンが掛けられている、水玉模様地の袋。重みはなく、あっさりとした感触を手に伝えてきている。

「あの日ね、こなちゃんの誕生日だったでしょ……」

目を瞬かせる泉に、つかさは言った。

「誕生日のプレゼント、渡せなかったから。……それ、お姉ちゃん

から。――机の上に、置きっぱなしになってたから。勝手に持って来たら、悪いかなって思ったんだけど……」

「……、」

「お姉ちゃん、いつもはそんな大事なことを忘れたりしないのにね……どうしてあの日に限って、急に忘れちゃったりしたのかな。ホントにね、ヘンなの……」

「……、」

なんと言ったらいいいのか、わからなかった。つかさは何がしたかったのだろうか。

泣きはらした目はまだ赤い。いつもは健康的に白い肌も、さすがに少しくすんで見えた。やつれているのだ。

ただ、その中で笑うつかさの顔は、痛々しいが綺麗だと思った。それはけして器用でなくても、目の前のことを乗り越えようとしている。そういう人の目だとなんとなく思えた。

泉は黙って、袋に飾られた黄色のリボンを見下ろした。ぽつぽつと、ふる雨のように、目の前が静かに染まり、

「……、」

泉は指で視界をぬぐった。どうしてこんなに見えにくいんだろう。

「……こなちゃん？」

戸惑いがちなつかさの声が聞こえる。泉はその理由をいぶかしみながらも、もうこみあげるものが押さえきれないと知っていた。

「……、あれ？」

「こなちゃん……どうしたの？　ねえ……」

「あれ？……あれ……」

「……どうして、だろ……なんか……」

……涙が、あとからあとからあふれてくる。ぱたぱたと、押さえる手を伝い、地面に染みを作っていく。

「……あれ……どうして……、あれ……」

泉はわいてくる感情の先がわからず、ただ戸惑った声をあげた。
目頭が熱い。
顔を上げていられない。

……膝から力が抜けていく。立ってられないかと思うほどに、眩暈がひどい。肺からこみあげるものがこらえきれず、泉はついにしゃくりあげた。

「こなちゃん、どうしたの、ねえ……」

困ったような、慌てたような声をあげ、つかさは泉の体に両手を添えていた。

抱き寄せるのか、支えようとするのかわからない、中途半端な腕を引きよせ、泉はつかさにしがみついていた。

「ひっ……う、う、……」

息が出来ないくらいに、泉は悲しかった。つかさの細い体が、なにより頼もしい支えに感じる。

声をあげて、泉は泣いていた。

かがみが死んでから、はじめて涙を流して泣いた。

戸惑いながら、つかさが体を支えてくれているのが分かる。ぎこちない手つきだった。こういうことには慣れていないのがわかる。泉の髪をなでる手も、小さく震えている。

こなちゃん…、とかすれる声で呟くのを聞きながら、泉は泣きじやくっていた。

…かがみの赤いリボンがかさかさと揺れるのが、視界のはしに見えたような気がする。

第三回投稿分

部屋に行くと、つかさが一人でいた。

「あれ？ こなちゃん？」

戸口で出迎えて、つかさはちょっと驚いた顔をする。

この時刻に泉が自分から来るのは珍しい。

ちよつと話あるんだけど、いい？ というと、

「あ、うん。いいよ。あ、ちよつと今ちらかってるけど」

いいながら、ちら、と部屋の中を気にした。

ちよつど私物の整理をしてるところだったらしい。

つかさと同室の子のものだろう。

今回の戦闘で運悪く死んでしまったのだ、ということを泉は聞かされていた。

つかさは同室ということで、遺品の整理を任されていたらしかった。手鏡や文庫本に――制服はなかった。遺体と一緒に持って行かれたのだろうか。

その子のことを泉はよく知らなかった。部屋に来ると、たまに顔を見たような気もする。

仲良かったの？ と聞くと、そんなに、と笑って答え、

「あんまり話したことなかったんだ。ふだんからそんなに喋る子じゃなくてね」

あいまいな笑顔を見せて言うと、つかさは泉に椅子を勧めた。

「それで…なに？　話って…」

うん、

とか、そんなふうと言った気がする。

言ったきりなかなか切り出せずに、泉は黙りこんだ。

「……」

つかさは小さく瞳をまたたかせ、その様子を見守っていた。

そのうち、あまり何も言わないので、心配になってきたらしい、

「なにか…話しにくいこと？」

「うん…」

「あ…なにか、って……この時間じゃ自販機もう落ちてるよね…このまえお茶分けてもらってきたんだけどね、ちょうど今、水も切らしちゃってるし……」

「うん……」

「……」

えと…と、ちいさな仕草でつかさが困る。言うことがなくなったのだろうが、泉はまだためらっていた。

「…こなちゃん…だいじょうぶ?」

きい、と椅子の鳴る音がして、ぺたりと額に冷たい感触が触れる。

「もしかして調子悪い?…ちょっと、顔色悪いよ? 熱は…?」

「……うん……」

前髪をおしのける感触に、すこしくすぐったい思いにかられ、ゆるみかけた口元に力を入れ、

「…あのさ。つかさ。」

泉は言った。

ちようと手を離していたつかさは、き、と椅子に座り直して、うん?と、聞く体勢になった。

「もしもさ、もしもの話でいいんだけど」

「うん」

「もしもさ——もしも、今の現実って言うのが嫌になって、嫌で嫌でたまらなくて…そうだったとしてさ」

「…うん」

「これから先も、その状況が良くなる望みなんて、いつこつに持てないってことが分かったとしてさ。…そのときに、それを好きなようにやり直せるとしたら、どうする?」

「え？」

「たとえばさ、それはほんとに時間をさかのぼって、またやり直すとかじゃなくてさ。まったく別の―辛いことや嫌なこともないもないような世界でもいいんだ。そういう世界にずっといられるようにすることもできるの、そしたら、どうする？」

「やり直せるって……」

つかさは、すこし困ったように眉尻を下げた。

「えっと、自分の―好きなように？ ごめん、その、なんかよくわかんないんだけど……」

「うん……ごめん。私もね、あんまりうまく説明できる気しないんだけど……」

「……」

「ごめん……こんなときに、いきなりこんなヘンなこと言って。でも……」

泉は膝の上で拳をにぎりなおした。たいして力はこめていないが、汗ばんでいるのが分かる。つかさはどうするべきか、ちょっと考えあぐねている様子だった。

「うん……そうだね。困る、と思うかな。私は」

「……困る？」

「うん。……だって、なんか想像がつかないもん。私は、その、私のいる、今のこの世界で育ってきたんだし。嫌なこととか、辛いことがなくなるっていわれても、なんだか、そういう世界のこと、うまく考えつかないと思うの。…結局、こういう世界に戻って来ちゃうんじゃないかな。たとえ、そういうことができたとしても…」

えへへ、と照れた笑いを浮かべ、

「ほら、私ってあんまりそういうの考えるのとか苦手だし……でも、そんなところが本当にあつたらいいな、とは思うな。——私や、ゆきちゃんや、こなちゃんに、……お姉ちゃんも、みんながいて、毎日こんなこともしないで済んで、そういう、フツーに暮らしているような世界があつたら、いいなって思うよ。ああ、行ってみないなあ、なんて思うし……」

泉は乾いた口を開いた。

舌が熱を帯びているようにも感じる。

「……じゃあさ、」

つかさが、え？ と聞きかえしてくる。

そして……。

……。

… 7月4日。

旧武蔵野台地

（現・太平洋東部戦線・第060防衛線以南地内）

甲21号・武蔵野台地殲滅作戦

（以後通称・甲21号作戦）

作戦区域域内。

以下、戦闘記録簿より抜粋）

戦闘開始より二時間あまりが経過時点における現状。

現時点においての人類側（連合・極東同盟軍）、および異種生命体側の損耗率等報告、統計を記録し、全部隊に到達。

現時点で連合・極東同盟軍を総計しての損耗率は36%を記録。

予測最大戦闘時間は残り46分を経過。残弾率統計値は37%、敵異種生命体側残存総数、推計約156万體（予測損耗率総計約27%）この時点において、本作戦における予測戦力比は100000対1を算出する。

作戦予定地点へ兵装α1six・通称「かぐつち」の到達を確認。各照射ユニット設置地点へのポイント接続確認を完了。

最終シークエンス準備段階へ移行を開始。完全移行まで残り13分を経過。照射予測範囲圏内における残存部隊への撤退命令伝達開

始。同時、第一阻止圏内において残留中の連合軍第三陸幕部隊、壊滅を確認。

最終シーケンス完全移行まで残り7分。第二、第三阻止圏内まで全部隊の撤退を確認。

第1阻止圏内において残留中の3小隊はこの時点までにあいついで壊滅を確認。撤退中の極東陸軍第二歩兵師団部隊、敵群体・アフアより強襲を受け被害甚大。

第三機甲歩兵大隊、撤退支援のため、第二阻止圏内へ侵攻開始。

最終シーケンス移行まで残り2分を経過。

新たに敵群体・サージュー・ベルダ・ルシュタン総数計約32万体の出現を確認。

同時に兵装α1six、最終シーケンスへ完全移行を完了。第二阻止圏内において交戦中の連合軍第二陸幕部隊、ならびに残存中の二小隊壊滅を確認。

第四、第一機甲歩兵大隊最終阻止圏内へ後退を開始。

敵3群体・アフア・キルズ・マケイン総数計約54万、第三阻止圏内へ侵攻。連合軍・極東同盟軍全隊は第二阻止圏内におけるすべての制圧権と戦線を破棄する。

なお中規模程度の損耗を出しながら、第三阻止圏内に最終防衛線を構築。

最終シーケンス移行からは32秒が経過。この時点において照射予測圏内よりもれた敵群体の総数約52万。兵装α1six照射を開始。照射開始から約22秒後、機関最大出力に到達。

（以降は戦闘終了後に実施された現場調査、ならびに被害統計に

よるものとする)

泉が一度起きたところに、つかさが様子を見に来た。一緒に帰らない？ と誘いに来たようだったが、ごめん、ちょっと用事あるから、と泉は曖昧に笑い返した。

そう…、とつかさは心配そうにしながらも、何も言わずに帰っていった。気を遣って放っておいてくれたのか、たんに構う余裕がなかったのか、それはわからないが。

……刻々と時間が過ぎた。

泉は机に伏したまま、まだ起き上がることが出来ないでいた。ゆったりと日が傾いていく。チャイムの音が妙に遠くに聞こえる。

窓の外をぼんやり見つめると、時刻はもう夕方になっていた。そよそよとした風がカーテンを揺らしている。「おら」

そうやってぼんやりしていると、やってきた黒井に、教室で居眠りこくなドアホ、と頭をはたかれた。

そのまま教室を追いだされ、泉はぼつねんと、人気の絶えた校舎を歩いた。

「いつまでも湿気ったツラしとなよ。周りが氣い遣うんやで、そういうのは」

泉にぎゃんぎゃんと喝を入れ、帰れ早う、と廊下に追いやるとき

に、黒井は言った。

黒井なりに気を遣ってくれたのだと思う。

たしかにいつまでもへたれて、へこんでいたりするのでは、まわりにいる人が迷惑する。泉とてそれはわかっていたのだが、だからといって、この張り合いのない気持ちはどうにかなるわけでもない。

(……)

けしてつきあいが長かったわけでもないし、仲が良くて、はなれることも出来ないくらいだったか。そう言われればそうでもない。そういうことを言うなら、つかさのほうがはるかにショックは大きいだろう。

生まれてからずっと過ごしてきて、一緒に育った人が突然目の前からいなくなってしまう。

その気持ちは泉には想像できない。それはたぶん、幸せなことなのだろうけど。

それでも、友達だったのだ。

目の前からいなくなるよりは、そうでないほうがいい。

二度と会えないよりは、毎日顔を合わせていたかった。

こんな終わり方は唐突すぎるし、納得できない。だから、あきらめることもできない。

気がつくと、自然とその扉に足が向いていた。

どこをどう歩いたか、物思いしていた泉は気づかなかった。顔を上げるとそこに、その部屋を示す、プレートが下げられている。…

…どうしてここにたどりついたのか、泉はしかしそのことを不思議には思っていなかった。

たぶん、自分はずっと考えていたのだろう。ただ、ふんぎりがつかなかっただけだ。でも、それも、もう終わりにしないといけない。扉の前で立ち止まっている気配に気づいたか、あら、とばたばたと中でスリッパを滑らせる物音がして、近づいてきて、引き戸を開けた。

「あら？」

立っていた人物に、泉は小さく頭を下げた。

「…こんにちは」

下げられたほうはにっこりと笑い、

「…あらあら。こんにちは。——どうかしたの？」

泉はためらうような口ぶりで言った。

「いえ、その…ちょっと、話したいことがあって……」

「本当に……その世界にいけるとしたらどうする？」

「……………こなちゃん？ えっと……」

「聞いて。つかさ。冗談とかそういうのじゃないんだ。もしもの話

とかでもなくて。」

泉の真剣な顔に、つかさは口を閉じていた。こちらをうかがう目に、困惑の色が見てとれる。仕方がない、と泉は思った。

自分でも自分の言ってることが、どう考えてもおかしい、という自覚はある。しかし、他にどう言いようもない。

「冗談なんかじゃないんだよ……ホントにそういう世界はあって、そこに行く方法も私は知ってるの。そこに行けば、つかさの言ってたようなフツの暮らしているのもできるようになるし、そこには、みゆきさんやかがみもある。なにもかも上手くいく保証はないけど……でも、私はいまのこの世界よりは、あの世界の方がいい。」

つかさはなにかに気づいた様子で言った。

『もしかして』、と。

「こなちゃん、それって……」

第四回投稿分

「はい、どうぞ」

ことり、とカップをテーブルに置き、涼しい声が言った。

「あ、どうも…」

安物のカップにぎこちなくお礼を言つて、泉はちらと目の前の女性を観察した。

ぎ、と軽く椅子をならして座り、ちょうど今、こちらを向いていない。ピンク色のかかったショートヘア。すらりとした足。あとぱりつとした白いシャツに、しわ一つない綺麗な白衣。とりあえず、若かった。とても18の娘がいるとは思えない。

どんなに少なく見積もったつてもう40近いはずなのだが、そんな雰囲気はみじんも感じられない。その実の娘からして、年より大人びているというのもあるが、お姉さんはなくとも、「ちよつと年上の従姉妹」とでも言えば、たぶん通じてしまふんではないか。そうも思える。

「それで？ 話つて何？」

いつも微笑んでいるような目のまま言う。

そんなに見知っているわけではないが、泉の知るかぎり、この高良ゆかり、と言う人は、いまいち表情にとぼしい人だった。無表情というわけではなく、なんとなく、つねに何を考へてゐるかわからないところがあるのだ。顔は笑つていても、目が笑つていないというか。何も考へていない、ということはないと思うが。たぶん。

「はあ、あの……」

泉は曖昧に返しつつ、そういえばなんでこの人は保健の先生なんかやってるんだろうな、とぼんやり思った。少し前にちょっと聞いたら、「一度やってみたかったのよね、保健の先生」と答えていたが、ひよっとしたら本気だったんだらうか、アレ。

「なにか聞きにくいこと？ いいのよ、そんな遠慮しなくても。私とこなたちゃんの仲じゃないの」

スリッパをぶらぶらさせつつ軽い調子で言い、

「何でも聴いてちょうだい。あ、この際だから、おばさんのスリーサイズでも、ついでに教えちゃう？ 驚くわよー」

すらりとした指を頬にあてながら、そんな冗談を放ってくる。「あ、いえ。遠慮します」

可愛い人である。苦々しく思いながら、泉は調子が狂ってくるのも感じた。これだから天然は。この実の娘にしてもはげしく似たりよつたりだが、この人のは、そのうえさらに磨きがかかっている感じだ。

話がはぐらかされる前に、泉はさっさと話を切り出すことにした。

「あの……」

うん？ とゆかりが小首をかしげる。

泉はためらいがちに、何から切り出すべきか一瞬迷いながら言い、それからこう言った。

「その…なんて言えばいいのか…。こんなの、私の勘違いかもしれないんですけど…」

「ああ、もしかしてかがみちゃんのこと？」

すらつと言い当てられ、泉はすこし面くらい、

「ええ。そりゃあね。みゆきのお友達なんてそんなに多くないもの。学校でも付き合ってるのってあなたたちくらいだから。あれだけ落ち込んだりしてればわかるわよ。…うーん。ほんと、あの子もねえ。もうちょつとそういうのに興味とかもってくれればいいんだけど。けっこうそういうの、気にならないところとかあるものねえ」

その泉を前にゆかりはきれいな眉根をよせ、

「それにほら、なんていうのかしらあの子ちよつと天然？ ていうの？ そういうところあるし、周りのペースに合わせづらいところあるからって。つきあうほうも時々疲れたりしちゃうのよねー。もう、ほんとはねえ。思いどおりに行かないことあるとストレス感じちゃうところとかあるのに、そういうの周りから隠しちゃったりするでしょ？ こなたちゃんたちも付き合っていると分らない？ なんかわかりにくいなあっていうか。いっつもなあんかニコニコしててねえ。」

「はあ……えつと、まあ」

頷いた覚えはないのだが、ゆかりは頷き返して続けた。あまりこ

こちらがどう答えようと構っていないようにも思える。

「ああいうところがけっこう周りとしてはイラッときたりするんだけど、あの子ってそういうのニブいとこあるから気がつかないのよねえ。あ、でもねえ。ちよっと困った感じでニコニコってしてるときとか、困ったみたいな顔してるときっていうのはけっこうイライラきてる証拠だから、あんまり追いつめたりしちゃダメよ。私も経験あるけど、昔はけっこうそれでかんしゃく起こされてねえ。」

なつかしいわー、とおつとりと頬に手を当て、

「けど、あの子ってねえ。ああいうところが可愛いところあるからねえ。知ってるう？ 困っておろおろしてる感じの顔ってあの子つつごく可愛いのお。昔はね。ついそれでやりすぎちゃって泣かれちゃったりとか、途中ですねられたりとかもしたんだけどねえ。懐かしいわあ。いまはねえ、ちよっとからかおうとしても上手かわされちゃったりするから、なかなか難しくなっちゃったのよね」

完全に懐かしむ表情で頬に触れ、

「でも子供の時から変わってないとかあるから、そこをつつくとまだ反応しちゃうのがまた可愛くてねえ。あら。ところで何の話してたんだったかしら。ま、いつか、あ、そうそう。それより、それについてのとおきのエピソードってのがあるんだけどねえ、こなたちゃんそれ聴きたくない？ 時間あるでしょ？」

「はい、えつと、あの。いえ。そうじゃなくてですね」

「あら、聴きたくないの？ 残念ねえ。それじゃとっておきはやめて、二番目にとっておきぐらいのにしときましょっか、あれはね

え。遠足の当日だったと思うんだけど、あの子がまだ小学生の頃ね？ 私が当日の朝に寝坊してねえ―」

「いえ。そうでもなくてですね。話は聴きたいんですけど―いえ、違くて！」

勢いでさえぎって、泉は思わず椅子から少し立ち上がっている自分に気づいた。

しぶしぶと恥じ入りつつ、座り直す。

なんで話聞かせるためだけに、こんな苦労するんだろう。

「あら、ごめんなさいねえ。おばさん、ついはいしゃぎすぎちゃってだつて、ここつて思つてたよりだあれも来なくてねえ。ヒマだったから、つい」

「いえ、いいですけど、もう……」

「それでなんだったかしら。―そうそう、かがみちゃんのことね。なに、どうかしたの？ こなたちゃん。私に聞きたいことなんて。」

すこし口調を改めて、ゆかりは言った。

「聞くのはいいけど、あれはただの事故よ？ほんとにただの偶然だわ。可哀想とは思うけど、私に答えられることつていつてもほとんどないんじゃないかしら」

言いながら、ちらりとちいさく目配せをしてくる。

ひょっとして、と泉は思う。この人は何もかも知ってるんじゃないだろうか、自分がこれから何を聞こうとしてるのか、ということも。

なにか言いたげに、じつと眉をひそめて黙りこんだ泉に、ふっと笑って、

「…ごめんなさいね。そういう答えを聞きたいんじゃないか、思っ
てね」

「…じゃあ、やっぱり…」

「こなたちゃん、私に話があつて来たんでしょう？　じゃあ、つまりはそういうことよ。これは、こなたちゃんが思ってるのとおりのこと。もうとっくに気づいてると思つてたけど？」

「……、」

「私の口からそれを聞きたい？　じゃあ言っけどね」

ゆかりは持ち上げたカップに口をつけると、さらりとした口調で言つた。

「かがみちゃんが死んだのは、こなたちゃんのせいよ」

一瞬のこと、だつたと思う。

それは、本当に一瞬で、たとえばまばたき一つできるかどうかと

いうぐらいに、あっという間のことだった。

その瞬間、泉の機体を衝撃が襲って、泉自身も自分が大きく宙に投げ出されるような心地がしていた。

レシーバーの向こう側からは、黒井の絶叫が聞こえてくる。

視界が一瞬暗転して消える。どくん、どくん、と脈打つ自分の鼓動がやけに近くに聞こえ、頭痛のような不快感がうす寒い。

思うように体を動かすことが出来ない……ちりちりと明滅する意識の中、泉はそんなことを考えた。…まぶたが、鉛のように重たいがし、がしり、とドアを叩くような音がどこからしている。

あれはいつのことだっただろう、とふと思いだして泉は思う。ちようど三歳くらいの、まだものも分らないころだったと思う。母を見舞いに病院に来てた父と、それに連れられて、自分は病室にひとりでいた。

母と二人だけで父はいない。最初はいたのだろうが、なにかの用事で廊下に出ていった。またお仕事の電話かなにかだろう。父はなんでも出来る人だったから、そのころからもう周りには頼られていて、とても忙しかった。

母は白い顔で眠っていた。あちこちから管の伸びた体で、さつきまで少しは話も出来ていたけど、今は息の根も良く聞こえてこない。そもそも母がベッドからおりた姿を、泉はいままで一度も見たことが無かった。ドアを叩く音はやまない。

外からは声がしている。なにかを大声で叫んでいるようにも聞こえる。

泉は足をぶらぶらさせて、ただじっと待っていた。父が戻ってくるのを、面白いことなんてなにもない狭い病室の中で、ただひとり

きりで。

ドアの外から呼ぶ声は、自分を呼んでいるようにも聞こえたが、泉はその声が誰のものなのか分からなかった。だんだんまぶたが重たくなってくる。眠っちゃダメだ……と泉は自分に言い聞かせた。お父さんが戻ってくるまで、ちゃんと起きてないと。帰ってきたときに自分が起きていないと、父がさみしい思いをしてしまう……暗がりにももされた居間、一人で座っている父の背中が、泉の目に焼きついている。そこで急に、視界が戻ってきた。

ぴ、ぴー、ぴー、という音に混じって、くぐもった音が外から聞こえる。

病室も何も無い。白い壁も、せまい灯りのともす家も。コクピットの中は暗かった。

泉はモニターでなにかを確認しようとしたが、自分でも何がしたいのか分からなかった。

ぼんやりとモニターから計器類に視線を巡らせ、右手のすぐ前にあったレバーに手を掛けようと思う。手をのばそうとして、できなかった。自分が座るシートに、身体がまるで杭で打ち付けられているようにも感じる。

「……………」

うめき声を上げ、泉は痛むこめかみに力を入れた。全身が麻痺したようにしびれ、身体中に走る痛みがこらえきれない。弱々しい咳をしたら、口のなかに血の味を含んだつばがにじむ。

出血は……どのくらいだろう、と泉は思った。頭と背中の中——どうも致命的ばい箇所、なにかを引っかけたような感触があった。通信は、どうだろう。

そうは思ったが、体は動かない。あたりは静かすぎて、耳が痛くなるようだった。

誰の声も聞こえない。

ノイズさえ入ってこない。

ひよっとすると……と泉は思った。通信関係になにか損傷がおこったのだろうか。機体がどんな状況にあるのかはわからないが、わからないならすぐに確認しないといけない……そうでないと自分は、……。

（ええと、なんだっけ……。）

がつん、がつん、とうちつけるような音はやまない。

一体何の音だろうか、と泉はざわざわした不安を覚えた。ここは……ここはどこだろう。重要なことを思い出せないことに、苛立ちがつる。いま、自分はどこにいるんだろう……さっきまで自分はどこにいたんだろう。

何をしていて、何と戦っていた？ 視界のはしに黒いものが蠢いている。モニターいっぱい映る、褐色や土気色や、とても気色の悪い形をした体……わさわさと動く手足のようなもの。それはとても恐ろしいものだったはずだ……だから思いだせ、思いだせ、しきりに警告が鳴っている。泉は敵の接近を示すレーダーが、どうして最大頻度で鳴りやまないのかにかな、と疑問を覚え、自分がどういう状況に置かれているのか、寝起きめいた頭で考え、

そして、ようやく気づいた。

「……あ——、」

そのとたん、風が飛ぶように意識も弾けていた。

「——う、」

けいれんする手で操縦桿を握り、

「——うあああああああああつ——！」

がこん！ と腕が壊れる勢いでそれを操作する。

一気に出力の引き上げられる音がして、機体のはね上がる勢いで上体を起こす。

上に群がっていた小型種が数体、力まかせにはねとばされるのが見える。泉は機体背部の硬化刃刀に手をのばし、立ち上がると同時にそれを構えた。跳ね飛んできた小型種の一体を、一刀両断に切り捨てる。金属質の体液が吹き出し、しぶきが上がった。うす暗く天井も低い空間だった。おかげで小型種以上の大型種はろくに入ってこられないようだったが、そこら中をくまなく埋めつくすようにして、二対の目が光り蠢いている。そう簡単に突破はできそうにない。

「……こちら03、黒井先生——01、応答願います、こちら——」

興奮して飛びかかってきた兵士級にはばまれ、通信が途絶する。

数体が次々と襲いかかるのをさばき、強引に斬り倒す。

「こちら03、01 応答願います。こちら03……」

狭いせいか、足さばきがとりにくい。いつまで保つんだらうか。泉はちらりと考え、それを打ち消そうとした。さっきからなにか嫌な予感が消えない。

レシーバからの応答はない。
相変わらず、ノイズもとぎれたままだ。

通信機器にどんな異常が発生したのか、すばやくコンソールを叩き、モニターの表示を切り替える。

警告音がうるさい。これでは音が混じりすぎ、区別もつかない。

（うるさい……！）

罵りながら、泉は焦りを感じていた。額から鼻の頭にかけて熱いものが流れ、それが急速に冷えていく。

早くここから脱け出さないと、

このままでは間に合わない。

（間に合わないって何が？）

ここにいたら巻きこまれる。

（巻きこまれるって何に？）

内容を理解しない声が頭のなかを駆けめぐっている。泉はモニターに映る影が蠢くのをとらえ、わけのわからない恐怖にかられ、意味の分からない言葉を叫び、無数の暗い光を目がけてひたすら斬りかかった。

（実戦ではなあ。倒れたら終わりなんやぞ）

モニターに周辺図の表示がなされる。マーカーは地図のあるところからかなり離れたところに光っていた。まだ探索も完了しないようなところに、自分の機体は落ちてしまったのだらう。

（まーたあんたはそんなこと言つて。知らないわよ）

戻る方法はあるだろうか。ないとして、自分はどうする？ あきらめるか？ すべて放り出して、大人しく待つか？ それだけは嫌だと泉は思った。こんなところで死にたくない。わけのわからない化け物みたいなものに囲まれて、そんな死に方はしたくないと泉は思った。気が狂うほどに嫌だ。

あいつらに手足を食いちぎられて、芋虫みたいになった人や、苦悶の表情を残した仲間の顔半分を、泉も何度か目にしたことがある。痛いだろう。苦しいだろう。そんなものは泉にはわからない。わからないから、はてしなくそれが怖い。

手足がしびれ、鼓膜が破れ、視界がにじんでくるほどに、頭のがかが冷たくしびれ、痛みも感じなくなってしまうほどになっても、それが怖い。

気がつくと、目の前に大きな褐色の腕が迫っていた。

激しく機体が振動し、頭の骨が揺すぶられる。みしい、という体の奥にひびくような音がした。

モニターにひびが走り、おそらくカメラのレンズをやられたのだろう。画像も乱れて不鮮明になる。

（あっ……）

みし、ぎぎ、と機体が不快な音を立てている。一瞬意識が飛びかけるなかで、泉は聞いた。ばきん、とすぐ近くで音がして、どうやら損傷がコクピットの内部にまで伝わっているらしい。凄まじい握力が外部装甲を徐々に押し下げている。

「ぐっ……っ、のお……」

痛む胸を押さえ込みながら、泉は我知らず、叫んでいた。

「おまえらなんかに、なあ……！」

締めつけられる機体の右腕に刀を握り、目の前の体躯に突き立てる。

ぎり、と歯ぎしりの音がして、衝撃にこらえる体を揺らす。

「…な、めん、なあっ……！」

ぎ、ぎぎぎ、と操縦桿を通して、肉をえぐる感触が伝わる。

さらに激しく暴れる敵の中型種の体をそのまま引き切って、泉は機体からひきはがした。

この狭い空間に入ってくる敵はもう小型種ばかりでなく、その体躯をむりやりにねじこんで、中型種も入ってきているようだった。もう……、と思う。ダメか、ともそうも思う。でも許せなかった。このままあきらめることだけは。それだけは絶対に出来ないと思っていた。

（あのね……）

そして、そのときだった。

（あのね……お姉ちゃんね……）

光が指した。どこからか音もなく。

泉は思わず頭上をあおぎかけ、
そして、どこを見たらいいかわからずに、固まっていた。光は、
四方から自分と機体を包み込んでいる。

(……うつん。なんでもない……)

光はそこら中に満ちていた。白い光だ。上も下も。一瞬、右と左
もわからなくなるような、大きい光が、辺り一面に満ちていた。

(「 「……」)

その大きな光は、なんのまえぶれも無くあたりに現れていて、こ
こにやってくるなにかの気配をはらんでいた。そしてそれが来た、
と感じたとき、泉は思わず振り返っていた。

(「 「 「……」)

白い壁のようなもの。轟音。爆風。
すさまじい熱量の塊。圧倒的な衝撃の渦。

体が灼き尽くされて消える瞬間に、泉はたしかにその人の名を呼
んでいた。

(……お母、さん?)

風のような微笑が、灼熱のなかに消える。たしかにその顔がほほ
えんでいるのが、見えた気がした。

第五回投稿分

……。

……気がつく、部屋の中にいた。

頭をもたげて泉は思う。ジー…と動かない視線のように、パソコンのディスプレイが、頭上で沈黙をたもっているのが分かる。

「……」

泉は顔を上げ、ゆっくりと視線を正面にやった。画面に表示されただどこか中欧風をモチーフにしたらしい町並みが始めに目に入り、そこにぽつんとたたすんでいる人影に、ぼんやりと重い目をこらす。映っているのは自分のキャラだった。どうも寝たままに放置していたらしく、開かれたメッセージウインドのなかごろ、なにもない空白がカーソルとなって点滅している。

泉は無言のまま、あたりを見回した。

「……」

壁に貼られたポスター。積み上げられた大量の本。収納しきれず無念そうに佇む本棚。そして自分が突っ伏していたらしい机。

スチール机特有の感触がほほのあたりに現実感を伝えている。べつとりとした寝起きの跡もそのままに、泉は無言を通していた。

一分？ 二分？ どれくらい経っただろうか。

じわじわと復帰してくる思考にハードディスクドライブの面影を重ね、泉はやがて、声にはださないほどにひそかに、ぽつり、と呟いていた。

「……………どこ？ ここ」

どこか人の部屋だった。それは分かる。だが肝心の誰の部屋か、
というとそれがまるで分からない。

少なくとも泉はここに来たことがない。親戚の家とも違う。知り
合いの家でもない。

本当にどこだ、ここ？

まったく身に覚えがなかった。

…そもそも、どうして自分はこんなところにいるんだろう。

「最後に」見たはずの光景を思い、まったくわけのわからない思
いに駆られる。

（え。なんで？ いや、ちょ……なんで？ え？）

なぜだ。

泉はもう一度四方を見渡し、そのどれにも見覚えがないことを確
認した。

どこかなつかしいと感じたのも確かだった。いや、それどころで
はない、とも。

懐かしいどころの話ではない、ここは自分の部屋ではないか。

この部屋のことを泉は知っていたし、自分が今まで何をしていて、
これから何をしようとしていたのかも知っていた。

どうしてこうなったのかもわかる。

きょうはいつものように学校引けて帰ってきて、夕飯のあとに後
片付け済ませて、早速ネットゲを立ち上げて今の今までプレイしてい

た。

やっている途中、急に眠気がさしてきて、我慢しこらえつつもやつていたのだが、ついこらえきらず眠ってしまったらしく、しまったー、寝落ちかよ、ちくしょー、またやったー、でも街んなかでよかったよーもー、と、次々思考が浮かび上がってくる。

「う、ちょ、……ちょっと、なに、これ……」

眩暈を感じ、頭を抱える。

自分の知らないことがつぎつぎと頭に浮かんでくる。
むりくり記憶をこじあけられているような感じだ。
なんだ、いったい何が起こってる？

ここがどこかということも、今の泉には簡単に答えられた。ここは自分の家で、ここは自分の部屋で、ここは自分の机の上だ。

目に入るあれもこれもそれも、どれも自分のものだ。自分にはしつかりとその記憶があるのだから、間違いはない。間違いようもない。

そんな馬鹿な。

がた、と小さい音がして、がだん、とより大きくて派手な音が響いた。

視界が回転し、椅子のキャスターの回る音がからからと聞こえてくる。

泉は椅子から立ち上がろうとして盛大にコケていた。

どう考えてもまともに打った顎を押さえ、痛みにうめくまでの数秒ほど、なぜか今までの自分の記憶が走馬燈のようによみがえって

くる。

かがみたちのこと、ゆいのこと、ゆたかのこと母のこと、そして父のこと、機体のこと、黒井のこと、訓練所の風景、せま苦しいコクピットの無機質なモニターの輝き、ヘッドギアの頭をしめつけるようなそっけない感触、操縦桿をにぎる手応えとうなる駆動音。

そのすべての記憶が泉にはあった。いまこうして思いだしてるあいだにも、そのことは感じられる。

おかしいのは自分ではない。だが、なら、この世界はいつたいなんだ？ 自分はこうしてここにいます。そして、自分の身にはいつたい何が起こったというのか？

頭のなかを記憶が駆けめぐっている。誰のものだかわからない、けど確かに自分の記憶が。

わたしは誰だ？

どうしてここにいます？

会ったのは久しぶりだった。

「あ——、お姉ちゃん！」

ぱあっと笑顔になって出迎える従妹に手をふって泉は、

「ちわー、元気してたー？」

「うん、あーうん、まあ、見ての通りなのは、あいかわらずだけど。いちおう元気だよ」

「うん。顔色も良さそうだね、今日は。調子いいの？」

「うん。今日は」

手みやげを持って、泉は適当な椅子を引きよせると、

「はいこれ。おみやげ」

「あ。うわあ、ありがとう！」

包みを受け取って、ゆたかは無邪気な笑顔を返す。

「うーん、大丈夫かなーとか思ってたんだけどね。」

「これ、何？」

「わたしの友達にこういうの得意な子がいてね。その子で作ったお菓子。開けてみて」

「うわあ。——おいしそう！ いいの？ こんなのもらって」

「んーん、いいのいいの。ゆーちゃんめったにこういうの食べられないでしょ。それに見舞いに行くってこと話したらね、じゃあ、せっかくだからって、その子わざわざ作ってきてくれたんだし」

「そうなんだ……じゃあ、その人にお礼言わないといけないね。こっちには来ないの？ 私も会いたいな、お姉ちゃんの友達」

「うーん。まあね。ちょっと難しいかもね。なかなか休みだつて取れないだろうし。」

泉はちよつと困り顔で言い、

「それに、まあ……休み取っても、みんなそれぞれしたいことあるだろうしね」

付け加えて言うのに、はつとしたように少し眉尻を下げ、

「そつか。そうだよ。うん……ごめん。ちょっと無理言っちゃったみたいだね、私」

「そんなの気にしないでいいよ。あ、それにその子、けっこう地元近いしさ、言ってみればけっこう来てくれるかもしれないし。一回ぐらいはさ」

「そんな。悪いよ、わざわざ」

「んーんー、いいんだよ。私もゆーちゃんにその子会わせたいなつて思うし。べつに無理なんかしてないって。ね。」

「うん……。あ、もしかして、その人ってお姉ちゃんがまえ話してた人？　かがみさんだっけ」

「んーん。お菓子作ったのはその妹の方。つかさっていうの。双子なんだけど、これがぜんぜん似てなくてね。かがみは不器用で料理とか全然出来ないけど、つかさはそういうの得意なんだよね」

「へえー」

「顔も似てないんだけど、性格もぜんぜんちがくてねー。かがみは基本しつかりでーきびきびしてて、つかさもそんなくーたらってほどじゃないんだけど、どっかどんくさくってぼんやりなんだよね」

ひとしきり挨拶を済ませ、泉は花瓶の水を変えに行った。

今日はゆいも来られないそうだし、持ってきた花を生けたら、早めに帰るつもりだった。

今日は体調がいいようだが、ゆたかは基本的に、長く話が出来ない。そんなささいな刺激でも、けして体には良くないそうだ。

「しばらく来れそうにないんだよね」

ふと、花瓶に向いていた泉に言った。

「うん。近くに大きい作戦があるらしくってさ。あ、これ他の人には内緒ね。一応機密だから」

「あ。うん……でも、それ、もうお姉ちゃんから聞いてて…」

「あ。あー。そう」

まあ姉さんだしね、とこっさりかげで納得する。

「また危ないことしに行くんだね」

「ん？ うん。そうだね……」

「あのね……」

と、呟いたのが最初、泉には聞きとれなかった。

「あのね、……お姉ちゃん？」

「ん？」

「……ううん。何でもない」

泉はちよつと苦い笑みを浮かべて聞きかえした。

「なに？ ゆーちゃん」

「え？」

「いや。なんかヘンに遠慮してるみたいでさ。なに。どうかしたの？」

「うん。……、ううん。」

椅子に座り直した泉に、首をふって、

「……やっぱり、なんでもない」

うん？ と泉はすこし首をかしげて見せた。

それをあいまいに笑って返すのが見える。

「うん……なんでもないの。ただね。お姉ちゃんも、無理はしない
でって。私も、がんばるからって。それだけ。……ほんとに、それだ

けだから」

泉はすこし意表を突かれたように感じた。目を瞬かせて、自分の小さい従妹を見る。

「ん。んー。うん。まあね。そこらへんはなんともだけど、一応分かった。ありがとね。氣い遣ってくれて」

うん、と微笑む顔を見ながら、笑い返す。そのときふと違和感のようなものを感じ、しかし、氣のせいかな、とすぐ打ち消した。

「まあ、ただね。あれだけど。ゆーちゃんががんばるって言うのはどうかだよ。がんばりすぎちゃって、疲れちゃうとまた体調崩れた、とかなっちゃうからね。ゆーちゃんこそ無理はダメだよ。私もそうだろうけど」

「うん。ありがと……お姉ちゃん」

泉は廊下に出た。灯りは落ちていて真っ暗だった。開け放した部屋の明かりが、頼りなく先を照らす。

(……、)

うちつけた顔がひりひり痛む。

(台所は……)

泉は思い浮かべ、また記憶がよじ登ってくるのを感じた。わかる。

この家の間取りも。どこに何があるかも。狭い家だ。ここにいまは自分と父と従妹と、その三人しか住んでいない。それでも一人増えるだけでだいぶ違く、最近手狭に感じていたところだった。

なんで自分はそんなことを知っているんだろう。

ここはじめて来た場所で、はじめて見たところのはずなのに。

「あれ……お姉ちゃん」

声に振り返ると、ゆたかが立っていた。

トイレにでも起きてきたのだろう。パジャマ姿で眠そうに目をこすっている。

「ああ……ゆーちゃん……」

ぼんやりと言いかけ、思わずぎよっとして、

「ゆっゆーちゃんっ!!?」

泉はすつとんきょうな声をあげていた。

「えっな、なんで？ えっ？ なんで？ え？」

泉は一人でまくしたてた。

完全に混乱した頭で、目の前に立つ従妹を見やる。思わず駆けよって両肩をがっしりつかんだのも、無意識のうちにだった。

（なっなんで？）

「え、なんでって…なにが…?」

寝ぼけ半分に聞きかえしてくる。

「いや、なにがって！ なにがもなにも、だって」

興奮を抑えきれず、泉は口走った。

「だってゆーちゃんは！ ほら、今年ウチの高校に進学したから、家が遠くてそれでウチに下宿しててそこから通ってて、だから」

ふとそこまで言って、気づく。

ってあれ？ ……あれ？

(……あれ?)

泉は完全に固まっていた。口をつぐんだまま、たぶん頭と体の両方ともがそうだった。え。何いってんだろう、私。

「お姉ちゃん……どうしたの?」

ゆたかが聞いてくる。

気がつくのと、どうも心配されているようだった。長いあいだ固まりすぎていたらしい。気遣いそのままのいたいけな視線を浴びて、うつと良心をうずかせつつ、はたと気づいて手をはなす。なんだ？ 自分は今何を口走った？ どんくどんく嫌な鼓動が鳴る。

(なに？ 今の……)

その反面分かっている自分もいた。さっきと同じだ。誰かが囁いたのだ。頭のなかで。

「…お姉ちゃん、大丈夫？　なんか、顔色悪いよ…？」

少し眠気の覚めたらしい目で、ゆたかが言う。

泉ははたと我に変えりつつ、

「……あ、あ、ご、ごめん。」

とつさにごまかしを口にする。

「なっなんか、寝ぼけてたみたい。ごっごめんね、ほんと、驚かしちゃって」

言いながらも、泉は口元がひきつっていた。

暗いなかで気づかれないことを祈りつつ、「じゃ、じゃあ、ほんとごめんね」

「う、うん……」

というゆたかの返事もそこそこに、その場をそそくさと離れる。変に思われないと良かったと思うが、たぶん無理だろう。

逃げ込むように、泉は台所にやってきた。

水道の蛇口を捻り、コップに注ぐ。一気に飲み干そう——として不味い。口をつけた瞬間に、そう思う。生温い苦みとカルキ臭さが、同時にふわりと広がる感じた。

冷蔵庫に冷やしてある麦茶があったはずだ……思いだして冷蔵庫の

扉を開ける。

つぎ直して、一気に飲み干すとコップを置く。ようやく泉は一息ついた。

そしてあらためて考える。

なんなんだろうか、コレ。

考えても分からなかった。思考が堂々めぐりにおちいつているのを感じる。

すこし冷静に言ってみようとする。ようは自分は何がなんだかわからないのだ。わからないのだが、どうやらなにもかも分かっているようだった。そしてそれが一番分からない。だから、何がなんだか分からない。

……ああ、やっぱり訳が分からない。ずぶずぶと底なし沼に足をつつこんだ心地で、泉は台所のステンに手をついた。

なんなんだろうか、コレ。

まったく無意味に繰り返す。

その後ろから声がかかった。

「ん？ おお、こなたか？」

ふり向いてみると、父が立っていた。寝巻き姿で戸口から入ってくるところだ。

「なんだ、ひょっとしてまだ起きてたのか？」

「……あ、う、うん」

「明日学校だろ？ 熱中するのもいいけど、ほどほどにしとけよ」

「……うん」

すこし小声で答えながら、泉はどこか惚けた面持ちで父の姿を見た。父は気づいたタ様子もなく、鼻歌まじりに冷蔵庫の扉を開けている。こんな人だったっけ、と泉は思い、思わず不思議な目をむけていた。

「ん？ どうした？」

「あ、う、うん。なんでもない。それじゃ。おやすみ」

「おお、おやすみ」

ぎこちない挨拶を返した泉をどう思ったか、普通に言った父から遠ざかるように、泉は戸口を出た。自分の部屋——というより、そうであるらしい部屋に戻り、ふらふらとベッドに座り込む。

つけっぱなしのPCが机で放置されている。

こうこうと照っている部屋の明かり。かかりっぱなしにしていたエアコン。目に入るかぎり、どれもこれもが自分の知っているものだったが、そのなにひとつとして自分は知らなかった。

「……、

どうなってんの、コレ」

それとも、と泉は思った。おかしいのはやはり、と。

自分なのか？

第五回投稿分（後書き）

（…ん？ もしかしてここから入った方がわかりやすかったのか？
まいいか。今さら今さら）

第六回投稿分

7月4日

旧武蔵野台地

（現・太平洋東部戦線・第060防衛線以南地内）

甲21号・武蔵野台地殲滅作戦

（以後通称・甲21号作戦）
作戦区域内

第一次防衛戦以北地内

敵・HIVE 第十四層

A - 14、B - 13区画近辺

追いつめられた心地で、黒井はただひたすらに機体を駆っていた。限界まで張りつめた息が、鼓動になって後ろに過ぎていく。ぎりぎりまで充血した目。蒼白に染まった顔。思わず食いしばった歯の向こうに、レシーバーの振動が伝わってくる。

『――黒井隊長！』

『く、黒井隊長！ もう時間ありません！』

追いつがるように発される通信を、黒井は意図的に無視していた。

『た、隊長！ も、もう、これ以上はっ……！』

落下した部下の機体はどこにも見あたらない。識別信号にさえその反応は返らなかった。

探すこと自体が徒労かもしれない。敵の巢の中で、しかも単独ではぐれたのだ。

敵の姿は文字通り、そこら中から這いだしていてキリがなかった。幾度も喰らう足止めに、焦燥だけが募っていく。

『黒井隊長！ 無理ですよ！ これ以上先行したら、援護が……』

『隊長！ 戻りまシヨウ！ ―隊長！―！』

嵐のような掃射の中で、後方の部下たちの声が聞こえてくる。黒井は答えなかった。

自分一人でも前に進むという意固地な意思が、どうしても頭から離れない。

『黒井大尉。ラムダ2の成実だ。状況は聞いた』

ラムダ2リーダーの成実からの通信が入った。

『ここは我々が食い止める。今のうちに貴官の小隊は後退しろ。間もなく『かぐつち』の照射が始まる。今なら脱出も間に合うだろう』

「我が隊の小隊機が一機、敵HIVE内へ落下！ 機体は深刻な損傷の恐れあり。単体での脱出は困難と見られ、現在搜索を続行して

いる！」

黒井は吠えるようにレシーバーに答えた。

『黒井大尉。話はすべて聞いている。貴官は小隊を連れ、後退しろ。間もなく『かぐづち』の照射が始まる。今ならまだ照射圏外への待避は可能だ。これ以上の逗留を行うならば、貴官らの安否を優先することは認められない』

「見捨てろつちゅうんか……！」

成実の冷静な声に、苛立ちを隠そうとせずに毒づく。

『よく周りの状況を考える。今の行動が、より最悪の結果を招くことになるとは予測がつかないか？ 今の貴官には、悪いが正確な状況判断能力が欠けている。感情的になるな、大尉！』

「まだ予定時刻までは間がある！ 搜索を続行する！」

黒井は理不尽な怒りに駆られていた。

「隊員の生死が不明である以上、撤退行動は取れない！――旗下の小隊各機を連れ、貴官は先に離脱されたし。搜索続行が不能となれば、本機は貴官らの後を追ひ、離脱を行う」

『馬鹿野郎……！』

成実のはげしい檄が飛んだ。

黒井は操縦桿を倒す手を止めていた。

『…黒井大尉！ 冷静になれ』

感情を抑えた声で続ける。

『一人のために、引き連れた他の隊員も巻き添えにする気か！ たった一人を救うことに固執すれば、全員を犠牲にすることになるぞ』

（……っ！！）

黒井は一瞬、動きが止まるほどの衝撃を受け、目を見開いた。頭を殴られたようにも感じる。理屈では分かっているのだ。成実の言っていることが、正論だと言っことぐらい。

（っ……けどっ……！）

握る操縦桿のあいだ、手袋がこすれる音が響く。

なにかに堪えるように、強く歯を食いしばる。

（ねーえ。黒井先生？）

（ええ、まっマジですか！）

（すいませーん。昨日はちょっと…）

『……アルファ3、リーダーより、全機。撤退を開始する。…全機、撤退用意』

逡巡したのは一瞬だった。

「あれ？」

泉は立ち止まると、脇の扉に目をとめた。

「ねえ先生。もしかしてこれって、例の新型の？」

横に並んだ黒井は同じく足を止め、

「そうや？　―ほれ、成実んとこの小隊あてで配備が予定されとるからな。それでやる？」

「はあ。いいなあ。…うちの隊なんか先生でもまだひとつ旧型のに乗ってるくらいなのに」

「じゃかあしいな。しゃあないやろ。より戦績がのぞめる連中にどんどんいい装備回して効率アップちゅうのは、きわめて合理的な判断やろが」

そろー、と部屋に顔をのぞかせようとする泉を頭からわしづかみ、

「そもそもお前が言うなよな。うちの隊の水準下げとる張本人が。なにしとんやまったく」

「う、うおあ」と頭を振り回されつつ、泉が言う。

「いやあ、ちょっとくらいなら乗ってみてもいいかなと……」

「アホ。ええからさつさと来いや。あんなあ。お前がそうやってぐずぐずしとるとウチの時間がだんだん圧迫されていくんやぞ。それともウチのこまーごました書類仕事ちゅうのを肩代わりしてくれるんか、おお？」

頭をわしづかみにしたまま黒井は歩きだす。「おお、ちょ、」と引きずられてよたりながら、泉はそれにならんだ。

「ったく、シミュレータではあんだけいい成績上げとるくせに、実戦になるとぼかすかしょうもないミスやらかしよつて。元担当官としては泣けてくることしきりやぞ、ほんま」

「いやあ、まあ……」

「いやーまーやないわドアホ。もうちょいしやきつとせんかい。まったく。ほないなことやったら、そのうち田村やパティにも抜かれるようになるぞ。あいつらお前の一個下やぞ？ わかつとるんか？ 少しは柁のことでも見習ったらどないやねんな。なっさけない」

「いやーまーそのー、と、とりあえず、かがみと私をくらべられてもなあ。と」

「誰がくらべとるねん。誰もそんなアホなことせえへんわい。ただほんのちこーと0,001ミリくらいでもええからあのしやきつとぶりがお前にもあつたらなあいう話をしとるんや」

「う、うう」

ぱつと手をはなして、その「ちこつと」ぶりを表現してみせる黒井に、泉は縮こまった。黒井はその鼻先で手をふり、

「お前と柊じゃもとから出来がちごとるわ。誰もそこまで期待しとらん。そんなことよりお前は、もっと自分にできることをやれるようにせえや」

その後さんざんに絞られて夜中ごろ、ようやく泉は部屋に戻ってきた。

「ふひー」と息を漏らす泉に、

「あ。お帰りネ、こなた」

「うん、ただいまー」

同室のパーティが、笑顔で迎える。

「だいぶ絞られましたネ？」

「うーん、もーなかなか解放してくれなくてねー。あーしんどいー」

ばふつとだらしなく寝ころがる泉を横目に、パーティはすでに寝る用意に入っているようだった。

フロあがりらしく、首のタオルで短い金髪を拭き、

「いまシャワー空いてるみたいですよ？ 行ってきたらどうネ、こなた？」

「うーん」とくぐもった返事を返しつつ、泉は枕元のスポーツバッグにうだりと手をのばした。

基地の廊下は基本的に狭く、節電のために、夜はいつもところどころうす暗い。

入浴室へ向かう途中、休憩所を通りすぎたが、もう明かりも落ちていて人気はない。

うつすらと明るい自販機も、九時をすぎると電源が落ちる。その前でジュースを買っている田村に会って「おーす」と声をかけた。

「あ、先輩。どーもッス。終わったんスか？」

「うん。さっき。これからお風呂。なに、これから寝るところ？」

「あ。ええ。そういえば、明日のミーティングの時間聞いてました？」

「うん。聞いた聞いた。明日の朝九時ね。んじゃ、おやすみ」

「はいッス。じゃあ、お疲れさまッス」

手をふって別れ、入浴室の扉をくぐる。中途半端な時間が良かったのか、人の姿はちらほらとあるくらいだった。

鏡の前でドライヤーを使っている人の後ろを通り、脱衣スペースの前には一人がいるだけだった。服を脱いでシャワー室に入る。入浴室、とはいってもそれなりの広さの空間に間仕切りをして、そこにシャワーが据えつけられている。さっさと仕切りの一つに入ると、泉は全裸になってきききこと取っ手をひねった。

「ふー」

ほどよい温度のお湯が、肌をすべって流れ落ちる。穏やかな気持ちになりながら、泉は乳房や腹を念入りに洗った。水の量は制限されていて、そう長くは使えないので手早くすます。

シャワーを終えて、脱衣スペースまで出てくると、ちょうどよくかがみがやってきていた。

「おー。おっすーかがみ」

「お。おーす」

ちょうど下を脱ぎ終えたところで、シャツに手をかけながら言うてくる。

「なに？ 今日、遅いのね？」

「うん。まーね、さっきようやく終わったところでさ」

「ああ、また黒井先生とこで絞られてたの？ よくやるわねー、あんたも」

「べつに好きでやってるんじゃないんだけどね…。あれ、かがみそれ新しいの？」

「ん？ ああ。うん。今日届いたやつ。いいでしょ」

「うん。…ひょっとして、ちょっと高かったとか」

「あーまあね…」

声をひそめて聞くと、やや半目になって目をそらす。

「あー、わたしも古くなってきたから新しいの買わないとなー。そういうのとか似合うかな？」

「あんたの場合、似合うとかよりサイズのほうが問題じゃないの？
…ていうかつける必要あるの？ それ以前に」

「失礼しちゃうな。それくらいはあるよ」

ブラジャーをかけながら、むくれつつ言う。横で髪をほどこながらかがみは疑わしげだが。普段は両脇でくくっているが、ほどくとかがみの髪は腰のあたりまでであった。

これだと手入れが大変だろーなと思いつつ、鏡の前に行つて短い髪にドライヤーを当てる。泉も前は長くしていたが、訓練所に入る頃に、だいぶ短くしていた。

長くてまつすぐな髪を見ると、いいな、とはぼんやり思うが今のところは伸ばす気もない。

「それじゃね、かがみ。お先」

「あ、うん。ああ。あんた、もう寝るの？」

「ん？ うん。そうだけど。どうかした？」

「いや。久しぶりに話でもしようかなって思ってたんだけど」

「ああ、いいよ別に。じゃあ、先に自販機のとこ行って待ってるから」

「うん。なるべく早く行くわ」

先に脱衣スペースを出て、人気のない廊下を歩く。休憩所に行く
と、自販機でジュースを買って、うす暗い椅子に腰掛ける。通路の
先から照らす光と、自販機の明かりで、休憩所のなかは薄く明るか
った。

一息にジュースに口をつけて、泉は息をついた。ふー、と後ろ手
に椅子に手をつけて、体の力をぬく。消灯時間まではまだ間がある
が、この時間にはここを通る人はいなくなる。

なにか所用がなければ、ほとんど入浴は早くにすませてしまうも
のだし、泉も普通はそうだった。

消灯時間が近づくと、基地内では行動範囲も制限されて、むやみ
に出歩いてるだけでも厳しく見とがめられる。基地での生活は厳密
な規則に則っておこなわれているから、自然と行動も制限されたも
のになるのだ。

「よっ。お待たせ」

少し待っていると横合いからかがみの声がした。

泉は自分が少しのあいだ、うとうととしていたことに気づいた。

顔を上げて、自販機の明かりに照らされるかがみの顔を見上げる。

……。

…。

目覚ましを叩いて止めると、泉は枕にへたばった。

「……、……」

朝の光がまぶしい。

昨夜からやけに寝苦しいとは思っていたが、今はどうやら真夏のようだった。

窓からさしこむ光が熱く、じりじりと今日の真昼の暑さを予感させる。

(ふつづ　　う　　……)

泉はうだりながら起き上がった。

寝不足の頭が、まるで地蔵のように重たい。

洗面所に行つてなんだこりゃ、と今さらながらに気づいた。

髪が恐ろしいほどの規模で伸びている。これでは背中どころか、ぺたんと尻座りしたら床につきそうだ。

頭が重かったのはこのせいだ。簡単に梳いてなんとか整えようとしつつ、泉は思った。たかが髪とはいえ、これだけ一気に増えるとバランスが狂うのもうなずける。

ていうか、気づかなかったとはどんだけだろう。どうやら昨晩は、自分で思った以上に動転していたらしい。

結局整えきれず、泉はちょっとあちこちがびこびこはねた状態の

まま、居間に向かった。

テーブルの前ではすでにテレビが付いており、アナウンサーの音声と安っぽいテロップ音を背景に、おいしそうな音がじゅー、と鳴っている。

テーブルの上には食器がそろっていて、全部で三人分あった。

「ーおお、こなたか？ おはよう。なんだ。今日ちよっと遅いな。どうかしたか？」

台所に父の背中が見えた。手際よくはないが、よく手慣れている調子で、フライパンを小さく振っている。

「あ、うん。おはよう。」

ほどよく焦げついた匂いから、目玉焼きかな、と泉は思った。

「なんだ、元気ないなあ。そういや、昨日なんか遅くに起きてたよな。あれからまたずつとか？」

「あー。うん、まあね……」

凶星だったので、泉は歯切れ悪く答えた。あのあとのことだが、事態に呆然としたままだった泉は、気がつけばなぜか自然にふらっとネットゲに手をのばしており、そのまま夜中の二時になるまで、ずっとひたすらプレイを続けていたのだ。

やりたくてやったわけではない。なんというかこう、体が勝手に反応したのだ。

え、え。なんで？ これ、なんぞ？ と、そう思う間もなく、す

るするとなめらかに手と頭が動き、チャットをしたり、みんなでパーティー組んで狩りに行ったり、勢い込んで高レベルクエ乗り込んで玉砕してみたり。

もちろん泉は、それを少しも楽しいとは思わなかった。…だが、「こっちの泉」はそれを楽しんでいるらしい。

（あんなことやって、何が楽しいんだろ…）

思いだすと、今になっても泉は首を捻っていた。

「まあ、好きなのはわかるがほどにしとけよ。いくらなんでも体に悪いのはいかんぞー？ 昨夜気づいたんだけどな、あんどきお前、そうとう顔色悪かったぞ」

「え、そ、そだった…？」

泉は意表を突かれて、動揺を隠しつつ言った。

「ああ。なんていうかな。まるで幽霊でも見たような顔だったぞ。お父さん、あれはびっくりしたな！。一瞬、ほんとどうしたんだと思ったぞ」

そこでちよつとフライパンから目を離して、泉を見た。

「な。夜更かしもいいけどな。もうちよつと体をいたわれよ？ お父さん心配するからな？」

（あ……）

「う……、うん……」

泉はなぜか胸のうずきを覚えて、頬が熱くなるのを感じた。

「……ありがと。気をつけるよ……お父さん……」

恥じらいを含んだ表情で、自然とゆるむ口もとを隠すように、顔をうつむける。

なぜか父の顔がまともに見えていられなかった。その笑顔があまりに眩しくて、胸のうずきや、うるんだ瞳が隠せそうになくて――。
――？

がん、と言う唐突な音を聞いて、泉はふと顔を上げた。見ると父が立ちつくしている。絶句、といったほうがいいだろうか。固まった両手を体の前で震わせて、そんな表情でこちらを見ている。フライパンも放りっぱなしにしていた。さっきの音は、コンロの上に放り出してぶつけた音か。

あまりの様相の変化に、泉は自分もぎょっとして固まるのを感じていた。

「か……」

がくん、と落ちていた顎がかく、かく、と言う感じで動く。

か？

「か、……」

その瞬間、父の後ろから火の手が上がるのが見えた気がした。

「くっ、くわあいいいいいいぞおおつつつつ、くおなたあああああああ！！！！！」

炎をまとうかのごとき―イメージだもちろん。一瞬本気でコンロの火が燃え移ったのかと思った―勢いでもって、父は吠え猛った。

「どっどっどっどっどっしたあ一体！！どこでそんな光学兵器じみた技を覚えてきたんだあああああ！？　おおお父さん今本気で萌えええええ死にするところだったぞおおおおおおおくおなたあああああ！！！」

「おおおお……おお……」

ぐりぐりぐりぐりと抱きつかれたあげく、かいぐりかいぐりと頬ずりされ、いやヒゲ痛い、ヒゲ痛いからと泉は声に出すことすらできずにもがいた。

え。誰？　誰？　これ。と、自分の記憶が大いに戸惑っているのが感じられる。

泉の知る父は、明らかにこんな人ではなかった。もっと厳格で、厳肅で、立派で、生真面目で、周りにも自分にもいつも厳しくて、自分の娘にも……いや、マジないってこれ。つかちよっとキャラ壊れすぎじゃね？　いや、普通に。ほんとに。

「おはようございま……て、え、ふえっ！？」

戸口のほうから可愛い驚き声がして、泉はそこに立っていたゆたかに目をやった。

「え、えと、あの……」

もじもじと戸惑っている。

「お、お邪魔でしたか？ わたし、あの……」

複雑そうな顔で、頬を赤らめて困っている。

そりゃそうだろうな、と泉は思った。朝っぱらから制服姿の娘にひつしと抱きつく父親と、必死でもがきつつもなされるがままの実際の娘。

こんな光景を起きつぱなに見せつけられたらどうなるというのか。しかも抱きついているのは、あの泉そうじろうである。

誤解とかいう以前にさぞかし精神的ショックがでかいだろうな、と泉は思ったが、父はといえばそうでもなかったらしく、

「おお、ゆーちゃん、おはよう」

と、あっさりと泉から離れ、にこやかに挨拶し、

「朝飯出来てるぞー。ま、座って座って」

「あ、は、はいっ」

ゆたかも気にするそぶりを（あまり）見せず、素直に席に着いた。

「おっ、とっ、と！ あちゃー。目玉焼きちょっと焦げちゃったな
ー。おい、こなた。すまん、皿並べてくれ」

「あ、うん」

言われて泉は席を立った。

「あ、お姉ちゃん。わたしやるっか？」

と、ゆたかが言ってくるのを「あ、いいい、いい」と座らせておいて、泉は手際よく食器を用意した。…「皿」と言われただけで、とくに指定されずともそれがどれであるのか、一瞬で分かっていたのが、すこしうす気味わるく感じられた。

玄関を出て、学校へ向かう。

泉はゆたかと並んで歩きながら、いつもの通学路をまるで初めて見るかのように、珍しげに眺めていた。

…『学校』。

そもそも、その単語自体が、泉にとってはひどく久々に聞く言葉だった。

また例の、脳によじ登ってくるような感覚と共に、それが何であるのか、記憶が教えてくれている。…ここだという学校、とはどうやら泉たちが言うところの、「高等学部」のことを言っているものらしい。

今のゆたかくらいの年齢になると、だいたいの子供が通い出すものらしい。だから十四、五才から通うということになるだろうか。

泉たちの世界、というより、泉の記憶では、先に言うとおり高等学科というのがそれに当たるが、中等学部を修了したあと、9年制のなかの8年生の段階で進級を希望していると、訓練所ではなくそちらに通うことになる。

（そっか、この歳でも学校通う子っているんだよね…）

泉はぼんやり思った。

泉は進級ではなく兵練科を希望していたから通うことはなかったが、たしか知り合いにも何人かいたはずだ。

訓練所も『学校』と言えば、そういう雰囲気がなくもなかったが、少なくともこっちの泉がイメージする学校とはかけ離れたもののように入る。

一応、指導を受ける側として自分は生徒だったし―正確には「訓練生」だが―、指導してくれる側として「先生」とも呼んでいたが、その本質のところはやはり軍の一部だったし、規律に従って行動するのは下手なごまかしのきかない必須事項だった。

こちらの「泉」がイメージするようないい加減なやりかたが通用するような学校など、泉には考えがつかない。

そんなことを考えていると、いつのまにか駅に着いていた。

こういうところは便利だと思う。電車やバスの乗り方を知らないわけではなかったが、道順なんてそもそも知っているわけがないのだ。

体と頭が自然に動いて、乗り継ぎやら改札やらをやってくれているのだ―本当に「やってくれている」という感じではあるが。

駅の出口に向かうと、「いつものように」泉はつかさとかがみの姿を探し、

「あ、こなちゃん」

先に見つけたつかさが「いつもの」場所に立ってこちらに声をかけてくるのを聞いた。

「ゆたかちゃんも。おはよー」

「おはようございます、」と挨拶するゆたかの横で「おはよー」といつものように気のゆるんだ挨拶を返す。

「おーす」といつものちよつと愛想に欠けた感じの表情で、かがみがその横から言ってくる。「おはよー」と自分はそれにも挨拶を返す。

「いつもの」風景だ。なんもおかしいところはない。

……。

合流してからは、四人で学校に向かうのが最近の習慣になっている。

他愛のない話をしながら、ここからバスに乗り、学校近くの停留所に向かう。

それほど時間はかからずにバス停に着き、校門の前までやってくる。車窓から流れる景色や、徒歩で歩くあたりの様子を見ながら、なぜか泉は既視感のようなものがぬぐえなかったが、それもそのはずだった。

ここの風景は泉が通っていた訓練所近くの様子に、やたらとよく似ていた。道の順路、電信柱の配置、軒を連ねる家々の塀まで。

それに気づくと同時に泉の顔は、しだいに青ざめていった。それもそのはずだ。泉の記憶にあるこれらのものは、全て崩れかけ、町並みとしての原型をかるうじて止めているくらいのものであったのだから。

この町はすでに集団疎開が終わっており、そっくりそのまま演習

場として使われ、軍部指定の立ち入り禁止指定区域内となっていた。
…そのはずだった。

（なんていうかな、まるで幽霊でも見たような顔だったぞ）

「……お姉ちゃん？」

泉は横のゆたかが言ってくるのに、一瞬答える余裕が持てなかった。あたりには泉たちと同じ学生服の少年少女が歩き、よけいに泉の既視感を強いものにした。「こなちゃん、…どうしたの？ 大丈夫？」

泉の顔はそうとうに青白くなっていたのだろう。完全に気づいた表情のつかさが、むしろ自分のほうこそ驚いた顔で言ってくる。―いや、違々と泉は反射的に思った。この「つかさ」はつかさではない。「泉」の友人の「柊つかさ」だ。「泉」とは高校に来てから知り合った仲で、趣味がぜんぜん合わない割に不思議と気が合うのか、今の今まで付き合いが続いている。

「…ちよつと、こなた、どうしたの？ あんた。」

きつめの目を、端をゆるめるようにしてかがみ言う。これはすこし余裕がないときの癖だ。緊張よりも心配のほうに感情が傾きやすいという気持ちのあらわれらしい。つまりそれほど自分はシャレにならない顔をしているのだろう。―いや、違う。泉はまた思った。この「かがみ」はかがみではない。「泉」の友人の「柊かがみ」だ。つかさとは双子の姉妹で顔と性格はぜんぜん似ていなくて、かくれてゲームやらラノベやら、ちょいおたっぴい趣味にはまっているところがあつて…

「お姉ちゃん、大丈夫なの？　なんか―」

ゆたかが大きい瞳を心配そうに向けてくる。自分のことには鈍感なのに、他人の体調とか微妙な感情の変化には目ざとくて敏感なところがある。―違う、と泉はまた思った。この「ゆたか」はゆたかではない。「泉」の従妹にあたる、下級生の「小早川ゆたか」だ。

「…う（る、さい）…」

「え？」　「え？」

うるさい、と完全に口にだしかけて泉は踏みとどまった。おかげで語尾のほうは、かすれてよく聞きとれなかったはずだ…はずだ、と思う。

そう願いたい、と思ったのは否定できない。「ん、な、なんでもない。…ちょ、ちょっとぼーっとしちゃってさ。うん。寝不足気味なのかな…ほら、昨日遅かったから…」

どうにかごまかせた…とはとても思えないが、一応ゆたかとつかさは納得したフリをしてくれるのが見えた。かがみも、納得はしていないようでいながら、「…まったく、驚かさないでよね。何事かと思ったわよ」と、ぶつぶつと口にして、場をまとめようとしてくれている。

ふたたび四人が歩きだして、校門の前にさしかかり、校舎の全体像が見える位置に来る。

（……）

今度こそ、泉はカバンの取っ手を強く握りしめた。一瞬、力がぬけて取り落としそうになるのが分かったからだ。

間違いない。そう思うのが分かる。

基地を象徴する通信用の巨大アンテナがない。防護用の無骨なフェンスは貼られておらず、入管用の開閉式ゲートは安っぽい校門に
とって変わられている。

そもそもこの建物には軍事施設としての用途がかけらも見いだせない。せいぜい災害時の避難所がいいところだろうか。それでもそうだとわかる。それほどにここは、泉の記憶にある姿と酷似していた。

（どう、して…）

続く言葉は思い浮かばない。その代わりに一つの単語が浮かんできて、立ちつくしながら泉は心の中で呟いた。

（…第、107、埼玉訓練所…）

第七回投稿分

「泉中佐」

声に振り返ると、基地司令の柊が手をあげていた。
泉はすかさず正対すると、姿勢を正して敬礼の形を取った。

「柊司令。ご苦労様です」

「うむ。君こそ。ご苦労だったね」

柊は敬礼を返し、

「あいかわらずの見事な手際だった。
君の的確な指揮のおかげで、我が軍は損害を最小限度にとどめて
いられる。今後も、よろしく頼みたいと思う」

「そのようなことは。恐れ入ります」

「うん。ところで、中佐。このあとはどうかね？ 時間は空いてい
るか？

よかったらひさしぶりに、と思っていたんだが」

「は。」と、泉は少し生真面目気味に答え、

「お誘いは嬉しいのですが、このあと、少々後始末も残っていますので…」

柊はそれに鷹揚に笑い、言った。

「なに、それほど時間は取らせんよ。酒もなしにしておこう。実は、君に少々、話しておきたいことがあってね」

「そういうことでしたら―では、所用を片づけてからお伺いします」

「うむ」

「では」

司令室に行くと、柊はコーヒーを淹れて迎えた。

「すまんね。忙しいときに」

「いえ。いただきます」

泉はややうち解けた表情になって白いマグカップを受け取った。礼儀として、軽く口をつけて一口する。

「最近、娘さんはどうかね？」

「よくやっているとは思いますが、兵士としては、まだまだ至らな

いの一言に尽きますか。あれでは今のところ、苦勞するのは周りにいる人間でしょう」

「なかなか手厳しいね」

「もう何年とこの職に就いている身ですので。公平な判断は可能な限り持つようにしています」

うん、と柊は一拍置いて、

「まあ、こんな世の中とはいえ、自分の娘を軍人になどするものじゃないな」

ぼつりとそう言った。

「それで、お話というのは…」

「うん。…最近、小笠原の近況については聞いているかね？」

「いえ。ただ、あまり芳しくないということは前々から」

「うん。―2週間ばかり前だから、つい先日のことなんだが」

柊はうなずき返しながら言った。

「今までにない規模の襲撃があったそうだ。今度の定例報告でそのことが取り上げられてね」

泉ははっとして、口にしかけていたカップを止め、静かに置いた。

「襲撃の規模自体は、さほど大きくなくてね。幸い既存の戦力でどうにか防ぎきることはできたらしい。」

事態の深刻さをしめすように柊は目を細め、

「だが、小笠原の司令はこの事態をだいぶ気にかけていてね。襲撃後すぐに、東京の大本営にこの調査のほうを具申したそうだ」

「まさか、新しい巢が…？」

泉は緊張を覚えながら、柊に言った。

「明確な事実はない。だが、その可能性は高いそうだ。君には言うまでもないことだろうが、異種知性体の襲撃が一定量を超えということは、彼らの行動になんらかの異変があることを示している」

「彼らは我々よりはるかに高度な知性体であり、その行動には何らかの意味があり理由がある。ーいや、これは、女房の受け売りなんだがね。ともかく、結論自体は調査待ちの状態だが、これを受けてある議論が持ち上がっているんだ」

「と、言いますと？」

「君も耳にしたことはあるかもしれん。泉中佐、『かぐづち』という名前に聞き覚えはあるかね？」

「かぐづち…ですか。いえ」

「今度持ち上がっている議論の肝というのが、まさにそれでね。具体的に言えば、今検討の最中にあるのは、とある作戦の立案につい

てのものなんだ。…立案してきたのは、埼玉の中央総部・第三研究課」

「…中央総部？」

泉は不可解そうに呟いた。

「第三研究課といえば、技術屋の集団ではないですか。それが、軍の戦略行動に介入すると…？」

「ここで先ほど言った『かぐつち』の話が、出てくることになるんだがね。…もう三年前になるか、当時立案されながらも、検討の末に実現には及ばなかった作戦があった。それは覚えているかね？」

「…武蔵野侵攻のことでしょうか」

言いながら、泉はふと気づいた顔になり、

「ではまさか、今検討の最中にあるというのは…。」

柊は頷いた。

「三年前の雪辱戦と言ったところだろう。軍部の中央でも士気は高いようだね。一度失敗を見ていないというのもあるんだろうが…。君は、どう思う？」

「…率直な意見で構わないのでしたら、同調はしかねます。しかし軍部がその方針で決定を下すのならば、とくに異議は唱えません」

「模範的な意見だな。私も人のことは言えないがね」

柊はひと口カップに口をつけると、苦い笑いをこぼした。

「前線基地とはいえ、軍部の支持を無くしては、装備の導入もままならない身だからね。いや、それ自体はさがないことだろうが、おかげで余計な苦勞をかけるようですね」

いえ、と泉はそれに応じつつ、

「しかし、勝算はあるのでしょうか？ さきほど仰っていた『かぐづち』というのに、それが関係すると？」

「うん、いや。率直に言ってしまうと、正直私も詳細を把握しているとは言い難いんだ。理論などの説明は受けたんだがね、どうにも畑違いというか、わかりかねるところがあつたものだから――だが、概要だけを言ってしまうえば、つまり『かぐづち』というのは、非常に強力かつ広範囲な威力を持つ、対異種知性体戦用の殲滅兵器、ということ、だそうだ」

「殲滅、兵器、ですか？」

「中央総部のお歴々が、満を持して武蔵野侵攻を立案するのも、このことが根拠にあつてのことだそうだ。その真偽のほどがどれほどのものかはわからないが…」

第八回投稿分

「よし。では次。」

「はい。」

泉は起立して答えた。

「訓練生番号116、泉こなたです。出身中学は埼玉第三中等学部。」

訓練所に入ったのは、中等学部を卒業した年だから十六のときだった。

その前から、泉は基礎的な訓練はひととおりおこなっており、これは中等学部の途中から兵練科を選択すると、訓練科目に基礎教練が加えられるためだった。

国家法で、兵役制は十七才からと決まっている。軍役を希望するのなら、それまでに体作り、基本訓練、技術習得と、自然、ハイペースに進んでこなければならない。

そうして、だいたいの軍役志望者は訓練所に入ったところではじめて、必要な技術の取得を行うことになる。

終つかさという子に出会ったのはちょうどそのころで、泉が最初につかさを見たときの印象は、ああ、なんかとろっちそうな子がい

るな、ということだった。

「ふわっ！」

「止めっ！」

「訓練生番号126！ 氏名と所属を述べる！」

「はいっだ、第三通信技術科のひ、柊つかさです！」

「気概が足りん！ 貴様には任務を遂行しようという意思があるのか！！ もう一度、やり直しだ！」

泉が選んでいたのは、「機体乗り」、いわゆる「低空航行式戦術戦闘機」（通称を『戦術機』）の操縦者だった。

これには一種の特殊な才能が必要とされるために、自然、訓練所に上がったところから、中学時代からの顔なじみは、ほぼ周りにはいなくなっていた。

このころから、泉はやや内向的なところが見られるようになって、表情にもとぼしく、なかなか、新しい周りの環境になじめなかった。

他人とフツーに話が出来ないわけではなく、なんというか人への興味自体が薄く、自ら積極的に人の輪に入っていこうとしなかった。

人付き合いにはとことん無精なところがあったし、そのために友達もできなかったのだが、本人もたいしてそれを気にしていなかった。

た。こうなるともう、性格というよりは性質の問題もあったのだらう。

基礎的な訓練科目は、選ぶ学科を問わず全員に義務づけられている。

そのなかでもつかさという子は最初から目立っていた。若干違う意味においてだったが。

「訓練生番号126!!」

「はっはい！ す、すみません！」

なんせ運動全般において、人並みにできるものがないうえに、全体的に動きがのろくさく、もたもたとしていて、しかもいちいちぶきつちよだった。

失敗するたびに檄を飛ばす教官のほうで、むしろ苦勞しているように見え、ひどいときなどは露骨に隅っこに追いやられているときもある。

「うわ、またあ？」

「ねー、とろいよねーあの子」

「いちいち訓練とどこおるし、邪魔じゃない？ いないほういいって」

できない奴の宿命として、そういうときは、いちいち嘲笑と非難の眼差しを集めることになるのだが、泉はというと、それを見てもさして気にしなかった。氣遣いとか関係なく、どうでもいいやという意味においてだった。

運動のできない子がそう言われるのも仕方ない。実際、その子が檄を受けるたびにいちいち他の人の時間も無駄になるのだし……まあ、できればいいほうがよく、邪魔だというのも本当といえば本当だった。

べつにどうでもいいや、といういつもどおりの無関心で不干渉の構えである。泉が無頓着なのは、こういうことに限らず人間関係全般においてそうだった。

「ふわっ!？」

ばささ、と不吉な音がして振り返ると、そこには予想どおりの光景があった。

「うたあゝ……」

転んだ女子生徒が痛そうに膝をさすっており、床には大量の書類がばらけていた。

(うつわー)

あーあ、と泉は思いつつ、見ないふりもどうか、と思いとたと

たと近寄っていった。

「だいじょぶ？」

「あ。うん…」

本当にたいしたこともなさそうで、女性徒は立ち上がるとすぐに書類を拾い始めた。

なりゆき上、そのまま見ていることもできず、泉は自分も手伝い始めた。

「あ。ありがと…」

ん、と軽く返して手伝ってやりながら、泉はちら、とその女生徒の顔に目をやり、おや、とふと見覚えがあることに気づいた。

（たしか…あれ、なんてったっけ…）

それだけで、じつは名前も思い出せなかったのだが、まあいいか、とすぐに思いなおした。やがて落ちた分は全部拾い終えて、泉はまとめた書類を女生徒に手渡した。

「ありがとっ」

受け取って、女生徒はにへ、と笑って礼を言った。
瞳の大きいのがよく目につく子だった。

ふとこっちの顔を見て、その大きな目を瞬かせる。

「…あれ？」

首をかしげて指を上げかけ、

「えっと…」

やがて思いついたらしく、屈託無く笑って言う。

「ああ。そっか」

「よく一緒になるよね。その、外の訓練で」

そっぴやそだっけ、と思いだしながら、泉は話を合わせた。

「ああ。うん、そっぴえばそうだね」

つかさはうん、と頷きながら、大きい目をくるくると向け、

「えっと…」

「ああ、わたし泉。泉こなた」

「こなたちゃんかあ…あ、ごめん…」

「いいよ。べつに。なんなら呼び捨てでもいいし」

「それはちよつと…あ、私、つかさ。柊つかさっていうの。もしかして知ってたかな」

と、ちよつと困り気味に笑い、つかさ—というらしい—は言った。

「うん。知らなかったけど。つかさちゃんていうんだ。うん。よろしく」

「呼び捨てでいいよ。―えっと、こなたちゃん、だっけ。今日のお昼ってどうするの?」

「どうって、普通に食堂行くけど? ―ああ、わたしあそこのコロネが好きなんだよねー。ふんわりしてて美味しくてさー」

「そ、そうなんだ。あ。じゃあ、今日、お昼一緒にどう? ちゃんとさっきのお礼もしたいし…」

「うん、べつにいいよ? まあお礼とかはべつにいらないけど」

「あ、そう…」

つかさはちよつと微妙な表情になりつつも、よっこいしょ、と装備品を持ち直し、

「じゃあ、お昼にまたね」

「うん。また」

泉も手をふって背中を向けた。

とはいえ、まだこのときは泉のつかさへの興味は薄く、この日食堂で会ったときには、約束したことも、すっかり忘れていたのだっ

たが。

ともかくそんな感じで、二人は出会った。

一日があつという間に終わった。

帰ってくるなり、夕飯すませて後片付けをして、部屋にこもると、泉はまたもネットゲに手を出していた。べつに、やりたくてやっているわけではない。

それどころか、泉はネットゲ（と略すらしい）に手を出したいなどと、これっぽっちも思っていなかった。

だが、体は勝手に動くのだ。

そのネットゲ、だけではない。その他各種ゲームに、アニメにマンガに、フィギュアにとこちらの「泉」の思考は、各方面にめまぐるしく変わるようだ。

まったく無駄なこととして過ごしているようにしか泉には感じられないのだが、そんなことは「泉」はお構いなしだ。

（はあ〜）

自室のテレビの前に座りこみ、泉は心底むなしくため息をついた。目の前にはステージクリアを告げる画面が、各種スコアとともに

表示されており、歴代の最高記録値を示している。ハイスコア、というやつ（らしい）だ。

（おおー、やったあ、わたしすんげー）

しらじらしい賞賛の言葉とともにため息がもれる。

「…なんだかなあ……」

ちら、と脇に積まれたソフトの山に目をやりつつ、ついさっきまでの様子が頭に浮かぶ。

アニメというのにもマンガとかいうのにもついて行けない泉だったが、正直ゲームにはちょっとだけ興味引かれるものがあつた。

機体乗りの訓練用操縦プログラムには、いわゆる3Dシューティングや操作シュミレーション系、のゲームにも通じるところがあつたからだ。

…あれはないと思つた。たしか、美少女ゲー…とかいったか。あの、なんだかわからない、へんてこな絵と文だけのゲーム。

正直言つて、あれはないと思うが。泉は自動で記録が更新されるのを待つて、のろのろと（実際にはそうでもないが）ハードの電源を落とした。

パソコンの前に移動して、再びやりかけだつたネットゲを画面に表示する。

晴れない顔の表情とは裏腹に、手と思考だけはすらすら動いてまるで自分のもののような気がしない。

というか今日は課題を出されているがやらなくていいんだろうか。歴史は担任の黒井が担当してる教科ではないか。

（いいじゃん。べつに。明日みゆきさんからノート借りればいいんだから。

いいから遊んじゃえ）

「てかどんだけダメ人間だよ、わたし…」

また頭を抱えつつ、人のことは言えないかと思いなおす。そうだよダメ人間じゃん。私。いままで黒井や数々の人から喰らったダメ出しが、光の速度で頭をよぎる。はあ、とまた似たようなため息をつきつつ、泉は、あ、予約忘れてたと思いつつ、一時中断すると、ずるずると重たい体を引きずって茶の間へと行った。

（あーうつとおしい）

五日目ともなると、だいぶ慣れていたので、泉は構わず黙殺した。実はかまう余裕がなかった、というのが正しかったが。

予約をすませて、泉は部屋に戻った。今日はネトゲのほうも特に進めるべき箇所が無く、過疎っていたので終わることにした。

一日は本当にこれで終わり。

またとくにやることもなく、このまま寝てしまえば、また同じように明日になって学校へ行く。そしてつかさやみゆきたちと会って、また同じような一日を過ごす。その繰り返し。

チャットを一段落させて、泉は背もたれをぎいぎい言わせつつ、

斜め上の虚空を見た。

…何もしなくてもいい世界。こうして遊んでればいい世界。勉強や技能の習得なんか二の次にしても、こうしてのんびりぐだぐだと日々を過ごしてれば、どうにでもなる世界。戦争もなく、気楽でいられる世界。

いま、自分がいるのはどこかわからないが、そんな世界らしい。ようやくそれが理解できつつある。

泉の知っている世界はずっと戦いばかりだった。ずっとそれが普通だった。明日をも知れない世界だし、いつ自分が死んでしまってもおかしくない世界だ。その毎日に嫌気が差さなかったわけではないし、逃げ出したいと思わなかったわけではない。

…こんな世界があればいい、と思わなかったわけではない。

けれど、本当にそれを望んでいたわけでもない。

（私は、なにしてんだろ…）

逃げ出そうなんて思ったことは、ない。

（私は反対だ）

…かたかたと勝手に指がキーボードを打ち込んでいく。

（だがお前がそう決めたのならそうするといい）

思いたしたくもない記憶が頭にしみこみ、急に冷えこんだ夜のようになんか萎えるのを感じた。途方もない疲れを感じ、泉は体がどんどん沈み込んでいくような錯覚を覚えた。

(……ここは、どこなんだろう……。)

ここはどこなんだろう？

……わたしは、何をしてるんだろう。

第九回投稿分

翌日。

鉛のような体にムチ打って、いつもどおりに登校し、泉はへばりつくように席についた。

もちろん宿題は白紙のままだ。

友人の―つかさはあてにならないので、またいつものようにみゆきをお願いしてノートを書させてもらう。そういえばみゆきに会うのも、ひさしぶりのはずだったが、懐かしいとはあまり感じなかった。それというのも、この「みゆき」はみゆきではなく、「泉」の友人の…とまた例の声が頭に浮かんでくる。

（あーうつとおしい）

数日目ともなるとだいぶ慣れていたので、泉は構わず黙殺した。実はかまう余裕がなかった、というのが正しかったが。がやがやとした教室の雰囲気は、泉にもなじみが深いものだ。

何気ないいつもの風景。

そのなかで、自分はなにやらのほんとした顔をして、寄ってくるつかさや、ときおり会話に加わってくるつかさやみゆきと、とくになんでもないように話している。…どうやら体が重たい、などと感じているのは自分だけのようで、こちらの「泉」にはなんともないようだった。

ゆったりと時間が流れ、休み時間が、授業時間が刻々と過ぎていく。

シャーペンを握りながら、泉は乱雑に文字の並んだノートを眺めた。

相変わらずの悪筆ぶりだ。いつこうに身にならない授業が終わり、昼休みになると、やってきたかがみを加えて、机を合わせ、昼食を取った。

(…)

さらに時間が過ぎて放課後になり、今日もみゆきを加え、つかさたやかがみちと四人で帰ることになっていた。こうして四人で下校するのは珍しいことではない。

…そつか。普通に帰る家があるんだよね、とひとごとのように泉は思った。訓練所に入った頃には専用の寮から通うようになっていて、帰り道が一緒になるのは同じだったが、帰るところは一緒だった。

帰宅して、今日一日外でやることは終わり、エプロンを巻いて、夕食の準備を始める。

父やゆたかがやってきて、とくに話すべきこともない今日のことをいろいろ話す。いつもの決まりごとのようなもので、また三人そろって夕飯を食べる。

(…)

後片付けをすませて、泉は部屋に戻った。

一日は本当にこれで終わり。

またとくにやることもなく、このまま寝てしまえば、また同じように明日になつて学校へ行くのだらう。そしてつかさやみゆきたちと会つて、また同じような一日を過ごす。その繰り返し。

(…)

「こなちゃん」

一度顔を合わせてから、つかさは声をかけてくることが多くなつた。

もともと顔を合わせる機会が多かったから、自然と付き合いつきっかけも多かった。

最初のうちは昼食と一緒にする程度で、そのうち休憩時間に他愛ない話をし合うようになった。話してみてなんとなく分かったのだが、つかさという子は、基本はとても真面目で、常識的な考え方をする子であった。

話の内容がやたらと平凡で、ことによると少しも面白くないものになりがちなところからもそれは見受けられ、しかも見たところ、頭の中身もだいぶ呑気であり、自分でもそのことには気づいていないらしい。が、なぜか泉とは気があった。

波長というのだろうか。

話は合わなかったり続かなかつたりするのだが、一緒にいても苦痛でない、という、あの奇妙なアレだ。まあ、そもそもがマイペースで気まぐれで常識知らずでしかもいちいち唐突で人のことなど少しも考えず、言動も一般人の理解と感覚からすれば度しがたいとき

のある泉と、まともに会話を成立させ、友人関係を成立させているのだから、つかさもちよつと普通でないと言えば、なかったのだらう。

どうしてこの二人が友達関係になれたのか、実姉のかがみでさえ、のちには不思議がつっていたほどだった。

泉が保健室に直行したのは、それから三日後のことだった。

その日の途中から、起きているのがどうしても辛くなり、昼休みになってから黒井に断りを入れたのだ。出席に関しては、黒井も口やかましく言うほうだが、このときは、さすがに無理してでも出るとは言わなかった。

無理もない。

「まあ、なんや…ええから、とりあえずふゆき先生んとこ行ってこい。ひどい顔やぞ、お前」

黒井からしかめ面でそう言われるほどに、自分はどうも、よっぽどひどい顔をしていたらしい。

「こなちゃん…だいじょうぶ？」

教室で青い顔をしていると、「つかさ」がおずおずと声をかけてくる。

心配そうな目で見られると、余計に辛い。

「あの、泉さん。体調が悪いようでしたら、無理せず保健室に行か

れたほうが…」

心の底から心配そうに、「みゆき」にも言われ、泉はさすがに不味いと思い、おとなしくその言葉に従った。あの呑気な二人組を心配そうにさせていると、なにかこらえようのない罪悪感に襲われる。そろそろシャレにならないのは自分でもわかっていたがどうにもならない。

…こんなことなら、無理して学校なんか来るんじゃないかった。

「ちょっと。大丈夫なの？」

みゆきたちから聞いたらしく、ちょっとしてから「かがみ」も保健室にやってきた。

いつものごとく目をとんがらせて怒り気味だったが、若干眉尻が下がりぎみになっている。

どうやらかなり心配はしてくれていたようだ。泉は申し訳なく思った。

「あんたねえ、んとに、まったく…」

かがみはやや声を低めにして、静かに言った。

「学校来てぶったおれるくらいなら、休みなさいよ。ほんとに。…まったく、いつもはしょうもない理由つけてでもさぼろうとするくせに、こういうときに限ってムリしてどうすんのよ」

「…うん。まあ…」

「最近、夜ちゃんと寝てる？ またゲームかなんかで夜更かし三昧

じゃないんでしょうね。…つか、そうだったら、ちょっと覚悟しただけど」

「…うん、まあ、当たらずとも遠からずってとこだけど…」

曖昧に言う泉に、かがみは若干惑っているようだったが、根がまっすぐなほうなので、あくまで遠慮はしない。擦れてるよう、醒めてるように見えても強情なのだ。

「あんたねえ。ったく。バツカじゃないの？」

眉をつり上げながら、かがみはきつい眼差しを向けてくる。病床の身にはこたえる眼差しだ。いや、まあべつに病氣、というわけでもないのだが。

（でも…まあ、どうなのかな…）

本当のところは分からない。これを病氣と言えば「病氣」とは言えるのかもしれない。

ともかく、その調子でさんざ小言を繰り延べた後で、かがみは今日こそはムリせずに、しっかりと早めに休むよう、嚴重に注意を言い渡して戻っていった。

かがみと最初にかわした会話を、泉はよく覚えていない。

ただ、自分に対する呼称が「こなたちゃんは」（今思いだすと笑

ける）から、「あんたさ」「こなた」あるいは、「お前な」と、なぜか急激に変わったのは、良く覚えている。

泉の記憶によれば、そのかがみとの初対面ときには、特別なことはなかった。

訓練所が一緒に、つかさとかがみは同い年の姉妹だというのだ。なぜか、かがみは、訓練所内ではあまりつかさに近寄ってこなかったが、たまに昼食と一緒にすることがあったので、そのうち顔を合わせるのは、自然なことだった。

はじめ会って話したとき、泉のかがみに対する印象は、とにかくときばきとしていて、目線や身体の動きなんかも、とにかくきつくりとして速そうだと言った。要領がそれほどこいということでは実はないのだが、とにかく努力家で、真面目で、なにことに毅然としている。

きっと周囲の尊敬やら、近寄りがたい印象を与えたりするのは、こういうタイプなのだろう。そのせいだか親しく友達づきあいの出来る人間が、逆に周囲には少なかったようだ。泉のようなタイプとは、そもそも、かなり縁遠い感じの人間だったように思う。

本当にそのとおり、ゆっくり休んだくらいでどうにかなると思えなかった。

かがみには申し訳ないが、この調子だと、明日は休むしかないだろう。

ぼんやりと天井の模様を見つめ、泉は何度か、浅い眠りを繰り返

した。保健室のふゆきという先生は、ときどきは出払っており、ときどきは泉の様子を見にきていたようだ。物静かであっさりとした、人当たりのいい口調で喋る女性で、泉はひそかに好感に思った。それほど見も知らないひとだったと言うこともあるのだろう。泉は話していて、どこか心が安らぐのを感じていた。

三度目くらいに目を覚ましたときは、出払っていていなかった。開いた窓からそよぐ風が、生温くカーテンを揺らした。今日がそれほど暑くなくて、よかったと泉は思う。

誰とも話さずに、何も見る事がなく、すますることが出来る今が、何より心が安らいだ。

それはよくない兆候なのだろう。あのとき、母と過ごしていた病室、一人きりで廊下の音を聞いていた病室が、なぜか思いだされる。季節も違うが、消毒液とクーラーの匂いのせいだったのだろうか。

(…)

泉はまた眠りに落ちていった。そして、また短い夢を見た。

それから少しして、みゆきと知り合ったのは、かがみを通じてのことだった。

驚くことにだが、泉もつかさも、とっくにみゆきの顔は知っていた。なぜなら、同じクラスとして、基礎訓練に参加する訓練生の中でも、みゆきはとくに目立つ存在だったからだ。

そもそも、基礎訓練どころでなく、みゆきは訓練所内でも超有望

の新人生だった。

容姿端麗、頭脳明晰、文武両道、才色兼備。

まさしく種々貫徹を地でいくような品行方正の優等生で、ずるずるべったりと地を這うような泉やつかさとは、対極に位置するところの超優良な人材候補生だった。これで性格がいいならけっこうな人気者になっていそうだったが、実際にはどうやら、そういうこともないようだった。

けして性格が悪いわけではないのだが、実際には親しく付き合っているのは、ごくわずかな人間だけで、訓練所内での交友関係は非常に狭い。これは、付き合ってみてわかったことだったが、どうも性格の問題があるらしく、言うなればみゆきは、基本的に一人だけでうとみんなでいようと、どちらでも苦にならないたちのようだった。たんにマイペースだったと言えば、そうも言える。一人でなんでもこなせる人間特有の性、とでもいうのだろうか。

たとえば、隅っこで本読んでいようが、みんなで楽しく喋っているが、実は反応があんまり変わらない。他人への興味が薄く、人との間に、ごく自然と笑顔で「壁」を作ってしまう感じだろうか。そういう点では、泉やつかさ、ちよつとだけ似たもの同士、と言えたかもしれない。

このちよつと変わった友人同士の関係は始まってからそのまま続き、訓練所で過ごした一年半の間は、いつのまにか、この面子でいるのが、四人の定番となった。訓練所での過程を修了したあと、偶然にも、四人ともが同じ基地へ配属され、この関係は続くことになった。長い付き合いである。偶然がそうさせたとはいえ、うまが合わないところはあっても、別れるのが寂しく思えるほどには、お互いを認め合えるまでにはなっていたと思う。

配属からちよつと三ヶ月が過ぎたところに、みゆきだけが遠方の基

地に転属されることになり、四人が揃うことはなくなった。もう少し別れを素直に惜しめるような関係になっていたら、なにか違っていたかも知れない。あの頃から、寂しさがしこりとなって心に残ったような、言いしれぬ感じを泉は抱いていたふうに思う。

「……ちゃん」

「……なちゃん」

……。

「……なん……だろう……」。

「こなちゃん、……こなちゃん……！」

「……誰か……よん……でる？」

「こなちゃん、しっかりして……こなちゃん……」

『ねえ、こなちゃん、あのねー？』

つかさ……？

泉は、心の中で小さく呟きながら、うつすらとまぶたを開いた。

「こなちゃん…こなちゃん！ 大丈夫？」

張りつめた声が、急に大きさを増して聞こえてくる。

すぐ目の前には、間近からこちらを覗き込む、つかさの顔があった。

（いや…違う…）

また頭のなかで声が囁いた。

違う。

この「つかさ」は、つかさではない。

「よかった、目が覚めたんだね、待ってて、いまふゆき先生呼んでくるから…」

いつもの緊迫しているときの癖で、少し早口に言いながら、

「—大丈夫？ すごい汗だよ…熱は…」

そう言って、額にのびしかけたつかさの手を、泉は反射的に手で払っていた。

「……。え……」

「る、さい……」

気がつくと、泉は叫んでいた。

「うるさい、うるさい、——うるさい！」

「——こな、ちゃ……」

「わたしに、わたしに触るな！　つかさじゃないくせに、つかさみたいなふりしてるだけなくせに！　つかさみたいにして、わたしに触るな！　触るな！！」

啞然とした様子でつかさが言いかけるが、泉は無視した。何も聞きたくない。つかさじゃないのに、つかさみたいな声で呼びかけられたくない。その一心で叫んでいた。自分でも怖くなるほど大きな声で。

「……触るな……」

最後は悲鳴のようになった。

両手で強く顔を押さえて、泉は自分が泣いていることに気づいた。頬がぐっしょりと濡れている。

頭がくらくらする。視界がにじむ。

体がびっしょりとぬれて熱い。全身に汗を掻いているらしかった。気持ちが悪い。

(…触るな…)

顔を上げられなかった。

こみ上げるものが押さえきれない。

すっかりするとしゃくりあげてしまいそうだった。こらえようとすると、呼吸が荒くなる。

叫んでしまつてから、泉は急に頭が冷静になるのを感じた。

目の前で、「つかさ」が息を呑んでいる気配が、ぬれた前髪の間から伝わってくる。

自分がいったい何をしたのか、そこでもうわかつていたが、もうどうにもならない。「つかさ」は自分を心配してくれただけなのに、ひどいことをしてしまった。

（何やってんだ、わたし…）

重たい後悔と自責の念が、胸をぬりつづいていく。つかさは怒っているだろうか。傷ついているかもしれない。つかさの手を、殴りつけた手が痛い。この優しい「泉」の友人は、目の前の馬鹿な友人の姿を見て、哀れんでいるだろうか。真面目で心根の優しい子だから、泉を恨むなんてことは考えつかないのかもしれない。ひよつとすると、あまり考えたくはない、でも、もしかすると、「病気だ」とさえ思われたかもしれない。

それくらい今の自分は普通ではなかった。いや、違う。人にどう思われるかなんて関係ない。今の自分の状態は、完全に「病人」だった。誰が見たって納得するくらいに。

（この子、病気なんだ…）

つかさに——いくらつかさではないといつても、——「つかさ」にそう思われたのかと思うと、たまらない気分になってくる。

そこで、泉はなんとなく気づいた。自分は、結局「つかさを傷つけたかもしれないこと」が悲しいのではなく、「つかさに嫌われたかもしれないこと」が怖くて、泣いているのだ。自分のことしか考えずに、涙を流す自分が、なによりもみじめで醜いと思った。こんな自分は嫌いだと思った。

（もう、いい…）

もうどうでもいい。そんな言葉までが、頭に浮かぶ。どうしてもんなことになったのかわからない。どうしてなんだろう。

帰りたい。

あの世界に。

みんなのいる、あの世界に。帰りたい。

（もう、いいよお…）

ここには、自分の知っている人が誰もいない。

自分は、一人ぼっちだ。

（…）

「……こなちゃん……」

つかさの呼びかけにも、泉は沈黙しか返せなかった。

その声の中に気遣いと、まるで腫れ物に触るような響きを感じとれた気がして、自然と心がすくむ気がした。

謝るべきなのは、分かっていた。

悪いのは自分だ。勝手にわけのわからないかんしゃくを起こして、事情も知らないつかさに自分勝手な苛立ちをぶつけてしまった。

（ごめん…つかさ…）

その一言が、言い出せない。

言ったらなにか認めたくないものを認めてしまっ、そんな恐ろしい予感があった。

（…言えないよ…つかさ…）

「…こなちゃん」

つかさが椅子に座り直す音が聞こえた。

ふと気がつくと、つかさの声の調子が、少し変わって聞こえてくる。

「こなちゃん。あのね……、」

そこにはなにか、意を決したような、妙に張りつめたものが感じられた。

「…こなちゃん…あのね？」

おびえて泣き続ける友人を、なだめるよりはしっかり横から支えるような、そんな声音だった。

「あのね？ わたしね？ わたし、…これから、とっても変なこと
言うかもしれないの。」

つかさは続けて言った。

「それは―もしかすると、ホントにとってもヘンなことで、なんの
ことなのか、こなちゃんにもわからないかもしれないの。でも、聞
いて。たぶん、とっても大事なことから…」

つかさはそう言っすこしうつむき、落ちつきなく視線をさまよ
わせた。まるでこれから言うことが、けして言うてはいけないこと
であるかのように。

「あのね、…こなちゃんはね。…」

「…こなちゃんは、…ほんとに、「こなちゃん」なの？」

第十回投稿分

泉は、ゆつくりと顔を上げた。

人形のような仕草でつかさに顔を向ける。涙にぬれてかすんだ目の先に、決然としたつかさの瞳が見える。

……つかさ？

「……こなちゃんは……『あつちの世界』のこなちゃんじゃないの？
それとも……こつちの世界の、「こなちゃん」なの？ どつちななの？
どつちの、「こなちゃん」なの？」

大きな瞳が見すえてくる。真剣な色をたたえていて、普段の「つかさ」からは考えられないほどに、相手にたいしてはつきりとした答えを求めていた。震えだしそんな不安と恐怖が入り交じって、少しの期待をそこに生み出しているように見える。

「……。私のことも……忘れちゃったの？ ゆきちゃんや……お姉ちゃんや、みんなのことも？ みんな……覚えてないの？ みんな？」

つかさの声には、なにか追いつめられた必死さがにじんでいた。まるで別人のようにも思われた。どこかほうけたような泉の表情に、やや苛立ちさえ感じているようにも思われる。

「覚えてる？ みんなで、海行ったことあったよね……一回だけだけ……たまたま、休暇が取れたからって言って……」

だんだんと落ちしぼむように、声音がとぎれがちになる。少し泣

いているらしい、というのに、泉はふと気がついた。つかさの人よりも大きな目には、うつすらと涙が溜まっている。

「みんなで、買い物して…街に出て…アイスクリーム食べたこともあったっけ…映画見に行ったり、ゲームセンター行ったり…いろいろしたよね…みんな…忘れちゃった…？ …覚えてない…？」

膝の上の手をにぎりしめて、つかさはまっすぐな目を泉に向けてきている。

「わたしね？ ……わたし……」

「…武蔵野が終わったあとね。現地の調査があつて…私もそれに同行したの。…本当は、いける予定じゃなかったんだけどね、…ゆきちゃんが、便宜してくれたっていうことで、特別にね…」

こなちゃんが…あれから、…あれから、こなちゃんが、帰ってこなくて…HIVEのなかで落ちて、行方不明になったって聞いてて…私、信じられなかった。こなちゃんが、その…死んじやったなんてこと。頭では、わかってたんだけど…ああ、助かるはずないんだってね。わたし、あの場にはいたんだし…黒井先生たちが、基地に帰ってきてからも、こなちゃんは、どこにもいなくて…それでもね…まだ、信じられなくて…」

…実際に見に行つてね、驚いたの。こなちゃんは、見てないから、わからないだろうけど、あそこはね、いますごく大きい穴みたいになつてて。もう何も残ってないの。地面ごとえぐれてて、みんな消えちゃって…」

あそこで、あんなにひどい戦闘があつたなんてこともわからないくらいで…これじゃ、誰も助からないんだって、…たぶん、ゆきちゃんはあるが見せたくて、わたしをあそこに連れていってくれたんだと思うの…そうでもないかと、私、きつと納得できなかっただろうから…」

言葉の合間に、き、と軽く椅子が鳴った。

「…こなちゃん。わたしね…わたし…」

泉の背に腕を回したまま、つかさは言った。

「…わたしね。こなちゃんは、死んじゃったんだって思ってたの。こなちゃんがなくなってからね、お姉ちゃんが元気ないの。みんなというときには笑ったり、普通に話したりするんだけどね。ムリしてるの。お姉ちゃんだけじゃないよ、こなちゃんのお父さんや、黒井先生や…私だってね…ほんととは…」

泉を抱え込む手に、少し力がこもる。

「こなちゃんが、どこにもいなくなつて…こなちゃんが、ほんとに死んじゃったんだってことが、だんだんわかってきて、わたし…」

続ける声が、徐々に湿り気を帯びて聞こえる。

「…こなちゃんに…もう会えないんだってことが、わかってきて、わたし…」

「……つかさ……？」

泉は、ようやくそれだけを呟いた。

信じられない思いで、つかさの背に震える手を伸ばす。

そっと触れると、そこもまた同じように震えているのが分かる。

「うつ……ひつ……こなちゃん、…こなちゃん…」

「つかさ……本当に……」「本当に」…つかさ、なの？」

つかさの大きい目から、涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。

制服の薄い生地を伝って、それが泉の肩をぬらしていくのがわかる。

「こなちゃん、…こなちゃんあん………」

つかさが涙声で言うのが聞こえる。

「こなちゃん…こなちゃんなんだね…やっぱり……本当に……」「本当の」…こなちゃんなんだね…」

声をふり絞るように言いながら、つかさは服を握る手に力をこめた。

もう離すまいとするような、強いが、なにかに弱々しくすがろうとするような力だった。

（つかさ……？）

泉はすこし戸惑いながら、ぎこちなくつかさの髪を梳いた。

細く糸のように揺れる髪が、指に心地いい。つかさが震えるたびに、さらさら揺れるのが少しくすぐったかった。夢や幻ではない、

と思う。

(でも…)

ようやく浮かんでくる現実感に、泉は視界がぼやけていくのを感じていた。

(どうして…?)

一方では、驚きのあまり、呆然とするのも隠せなかった。

この「つかさ」は、つかさなのだ。

…なら、ここは、「どこ」だ？

『よし、後退や！ 小隊全機、後退用意！』

黒井からの指示が、レシーバーを通して小隊員に伝わる。

『―泉機！ 田村機の脇についたれ。白石機、パティ機の後方から、二機で援護射撃を行うんや。前衛から、順次後退を行うで。フォーメーションはb - b - a！』

『了解』

『了解！』

黒井機の指示に従い、小隊各機が駆動音を上げ、すみやかにポジシヨンの確保に走る。

各機の連射するライフルが乾いた音を上げ、目の前の敵の体軀を、次々と吹き飛ばしていく。眼前の光景は凄まじく、劣化ウラン弾の掃射を浴びた小型種や中型種が、つぎつぎと手足や体の各部をちぎれさせ、苦悶の叫びを上げて、のたうつている。

まるで人間の体部が昆虫のような形を取った異様な姿をしているが、異種知性体はあくまで生物である。機銃類の射撃を生身で受けては痛いどころの騒ぎではないだろう。もっとも、まるで痛覚を知らないかのように体液を吹きださせたままの体で前進してくる様子は、見るものの想像を絶していた。

『アルファ3へ、現在、ラムダーが合流予定ポイントへ向かっています。戦線を後退させ、予定ポイントへ向かってください』

「アルファ3、了解！——よし、タイミングはピシヤリやな」

力強く言う黒井に、白石機からの通信が飛んだ。

『——てっ敵群体、十時の方向に戦車級数体の姿を確認、小規模のグループを作っています！』

『よし。各機同方向に射撃を集中！』

後退を続けつつ、黒井は指示を飛ばした。

『氣い抜いたら突破されるで。弾幕緩めるな！ 泉機は隊長機のカ

バーに付け。周りのフォーマンセル級の連中を吹きとばすんや！」

「了解っ」

泉が答えるとすぐに、田村からの通信が入る。

『―敵群体から数フォーマンセルが離脱、じゅ十二時方向から前進してきます！―』

『ちゃんと面倒みとけアホ！ 泉！ 三時方向を警戒、掃射をかけるで。足を狙って敵集団の前進をくい止める！』

黒井は部下を叱咤しつつ、素早く指示を飛ばしてそれに対応していた。

「了解！」

泉は射撃を続けつつ、照準を横に開いた。

『――！！！！』

『！！！！！！』

その先にいた歩兵級の群れが、横薙ぎに足もとを掃射され、怨嗟のような声を上げて倒れていく。痛覚での足止めは効果が薄い、さすがに脚部を失っては物理的に侵攻が難しくなる。異種知性体の戦闘では、頭部の次に脚部への集中射撃が有効な手段とされている。

『よし。もうひとふんばりや。しっかり持ちこたええや』

『ラムダ1よりアルファ3。予定ポイントへ到着した。連携を取って射撃を開始したい。敵群体と麾下の小隊各機との正確な位置情報の伝達を乞う』

一歩後攻して到着したラムダ1の通信に、黒井は落ちついた仕草で了解を返した。

『アルファ3、了解。泉。位置情報の算出頼む』

「了解」

泉は答えて、コンソールパネルを操作した。サブモニターに「リンク中」の文字が表示される。

『ラムダ2より本部、作戦予定地点への移動を開始した—』

『こちらアルファ1、補給を完了した。行動の支持を願う』

『—こちらアルファ2！ 敵群体の前進を確認。現在後退を継続中—！』

「アルファ1は、ポイントD2Aへ進行。敵群体と交戦中のラムダ1と合流し、戦線の維持に当たってください」

「ラムダ2が作戦予定地点へ移動を開始。到達予測時間は約十分後です」

「敵群体左翼部分において交戦中のラムダ3が補給を求めています！ アルファ3、戦線を離れます。補給ポイントへ向け、移動を開始」

作戦本部内では、各小隊からの通信がひっきりなしに飛び交い、各担当オペレーターがそのやり取りを仲介していた。

「アルファ2の後退進路を左翼側に2度修正。位置を区域内左翼側にずらせ。ラムダ3には後退を指示。補給は待つように伝える。アルファ3が完了したら、ラムダ3を補給ポイントへ」

「了解。」

「了解」

作戦指揮官の泉が飛ばす指示に、オペレーターの面々が答えを返す。メインオペレータをつとめる峰岸に向かい、泉は付け加えて言った。

「ラムダ2の進行はそのまま継続。作戦予定地点には修正なし。到達後、作戦行動を開始するよう伝達」

「了解。―本部よりラムダ2、作戦予定地点に変更はありません、移動を継続してください」

『ラムダ2了解、変更なく移動を継続する』

「―なお、到着予定時刻は8分後に修正。以上、ラムダ2」

本部との通信行動をいったん終わると、成実はレシーバーを切り替えて、小隊各機への通信を送った。

『日下部、岩崎。まもなくだ。用意はいいか?』

『了解。準備完了です』

『了解! 同じく準備完了です。いつでもいけます!』

部下の力強い返答に、成実は頼もしさをこめて応答を返した。

「中央の連中が待ちくたびれている。一撃で決めるぞ」

丘陵の間をぬって、ラムダ2小隊は現在静かに進行中だった。作戦予定地点となる小高い岩山付近にたどり着けば、そこから炸薬弾頭による敵群体中枢への砲撃行動が開始される。中央の部隊はそのための陽動だった。

『予定到達ポイント通過。作戦予定地点まで残り約3分』

「よし。本部に再度通信を行う。各機、装備、弾薬等の再チェックを怠るな。」

「敵群体右翼部において、要撃級数フォーマンセルの出現が確認されました。交戦中のアルファ2、ならびにラムダ1が大きく後退し

ています。」

「アルファ3の補給はまだか？」

時計の文字盤を確認し、泉は尋ねた。

サブオペレーターで、アルファ3担当の柊つかさが、答えてよこす。

「間もなく終了します。残り約20秒です」

「補給が完了次第、アルファ3に右翼部の援護に向かうよう通達。ラムダ2の到達予定時刻は？」

「約2分後です」

「よし。ラムダ1、アルファ2の後退進路を2度修正。中央部に寄るようには後退するよう通達。アルファ1は左翼部側に進路を変更し、側方から前進して、敵側面に狙撃を加えるよう指示を送れ。アルファ3が復帰するまで、戦線を崩させるな」

少々苦しい思いをませつつ泉は指示を飛ばした。異種知性体との戦闘はつねに人類側にとって個体数において圧倒的不利で経過するため、その指揮官として役職につく者は、いつも冷や汗のにじむ思いを味わうことになる。

今回の侵攻は突発的だが、各地区数力所ではほぼ同時に起こったものだった。そのため、人手不足は否めず、後方から支援砲火に当たる第7陸幕部隊が配置に就くのにも、まだ時間が要った。そのあいだは、既存の自機戦力のみで、侵攻を防がなければならぬことに

なる。

「ラムダ2、作戦予定地点に到達。砲撃を開始しました」

「司令本部より入電！ 第七陸幕部隊まもなく作戦予定地点に到達、配置を開始します。」

（どうにか間に合ったな…）

かすかに安堵の色をまぜつつ、泉は小さく呟いた。

「各小隊機的位置情報を算出。砲撃予測範囲内からの退去を、全部隊に通達。」

支援砲火のない状態で、戦線の維持に努めるのは自殺行為にひとしい。

今回の侵攻が、さほど大規模なものではなく、厄介な敵大型種や中型光線狙撃種の数も少ないとはいえ、それでも、劣勢を強いられるのが今の連合軍太平洋方面部隊の現状である。指揮に当たる立場としては、泉は出撃のたびに危機感を募らせずにはいられなかった。

『よっしゃ、敵さんは混乱しとるで、今のうちにたたみかけえや！』

支援砲火の開始によって、あたりには凄まじい轟音がひっきりなしに飛び交っていた。各小隊機は、そのあいだをぬうようにして、統制の乱れた敵群体を次々に叩いていく。大威力の砲撃群が加わることによって戦況は一転し、各機の個体撃破率は加速度的に上がった。

ていった。

『！ 泉！』

黒井のするどい通信を聞きつけ、泉は反射的に周囲に目を配った。十時方向、すぐにいるパティ機の後ろから、要撃級の一体が迫るのが見えた。パティは自機前方の戦車級に気を取られて、背後の死角には気がついていない。泉はちょうど同方向に立ちふさがった戦車級をぶちかまして強引にどかすと、地を蹴って、まっすぐにパティ機の後方に踏みこんだ。

『――！！！！！！』

今にも片腕を振り上げんとしていた要撃級の側面を回りこみ、深い踏みこみと同時、低い姿勢から一気に刀を振り上げる。

袈裟がけに斬り上がる形で、刃と体液の煌めきが吹き上がった。

泉はそこから半歩距離を取り、要撃級の強固な腕を切り落とし、続いて頭部を貫いて一気にとどめを刺した。上げていた奇声を止ませ、要撃級の巨体が倒れ、吹きだした体液が跳ね散る。

『…オウ……こなーた、スミマセン……』

驚きを含んだパティの通信を聞きつつ、泉は軽く返信した。

「いいっていいって。前もいいけど、後ろも気をつけてね」

軽微な損害を出しつつも、各隊には幸運とも呼べるほどの人的損害は記録されず、戦闘が終結したのは、その一時間後のことだった。

現地での事後警戒が解かれて、数十分後には、撤収作業がはじまっていた。連合軍全部隊が全作戦の終了を通達されたのは、翌朝方近く。侵攻した異種知性体群は、ほぼ壊滅を記録し、残存した部隊が合流し近隣の拠点HIVEへと退却していくのがすでに確認されていた。

泉の所属する埼玉第107部隊が基地に帰還したのは、完全にその日の朝が明けてからのことだった。

「あ。こなちゃん」

基地に帰ったところには、すっかり夜も明けて明るかった。シャワーから上がってさっぱりしてきた泉の後ろから、つかさが声をかけて近寄ってきた。

「お帰りー。いまお風呂行ってきたの？」

「うん。さっき帰ってきたばかりでさー。もう汗べったべたで」

泉は答えながら、ちらりとつかさの格好を眺めた。すでにぱりつとした仕官用の制服に着替えていて、書類を挟んだクリップボードを胸元に抱えている。

「これからちよつと寝るところだけど。あ。そのまえにミーティングあったつけ。はー面倒くさいなー」

「わたしたちはさっきミーティング終わってきたとこ。こなちゃんたちより早く帰ってきたから。」

くすくすと笑って見せながら、つかさが言う。

「なに、これからもう通常作業？」

「うん、まあ出撃あった後だし。ていっても、わたしはそんなにやることないんだけど。あ、でもお姉ちゃんとかは大変かなー」

「あー。かがみは、なんかやたらとやること多いもんねー。ていうかさ。たのまれたらなんでもほいほい引き受けちゃってる感じだしね。少しは断ればいいのに」

泉の言葉につかさは困ったような笑いを浮かべて、応じた。

「お姉ちゃんは何でも出来るし…それにがんばり屋さんだから。たいていのことはしっかりやっちゃうしね」

「うーん、たしかにそうだけどねー。でもそうやってさー、なんでかんでこなしちゃうから、周りから余計に頼られすぎたりすんじゃないの？ あんまがんばりすぎて息切れしなきゃいいんだけど、つてときどき思っちゃうよね」

「うーん、たしかにそれはあるかも…」

つかさは考えこむ仕草で同意しつつ、ふと泉の後ろのほうに目をとめた。「あ」とほんわりした仕草で口が開かれる。

「だいたいさー。作業だのなんだのいろいろこなせるようになる前

に、もうちょつと料理とか縫い物の一つも出来るようになった方がいいよね。」

泉はつかさの反応に気づかず、ずけずけと言った。

「いやー、わたしもそんなに得意ってほうじゃないけど、かがみのあれは、なんか天性のものを感ぜさせるよね。根本的にああいうことには不器用に生まれついてるっていうか…あれじゃ、ケツコンとかしたら困るよねー。あ、ていうかあの性格だと、まず嫁のもらい手がつくかどうか…」

「あ」「え、えと…」と、つかさがなぜか焦った様子でそれを止めようとしていたのだが、泉はまったく気がつかなかった。

「でもまあ、かがみならわりと一人でもやっていけそうだよな。あ、ていうかそのうちほんとになんでも出来るようになってさ。鋼鉄の女、なんて言われちゃうようになってっちゃうかも。いいよね、鋼鉄の女、」いかにもかがみ様ツッてカンジで。かつこいー」

そのときふと泉は首が重たくなった。

ずし、と頭のうえに重みが乗るのを感じつつ「おう」とつんのめった。なんだろう。骨格っぽい、かたい感触が頭頂に当たっているのだ、誰かに腕でも乗せられているらしいと分かる。

誰だろうか。シャンプーっぽい匂いと服の生地を感じと、後頭部に当たっているかすかな胸の感触で、女性仕官らしいと言うことはわかるのだが。

「なるほど。鋼鉄の女ね。カッコイイ響きじゃない。いいわねえそれ」

ふってくる声で誰かわかり、泉は上目づかいで見上げつつその誰かに言った。

「あ。かがみ。ただいまー」

「お帰り。お疲れさん」

やけに温かみのこもらない声でかがみは返してきた。何を怒っているのだろうか。微妙に不機嫌のようだったが、泉には理由がよく分からない。

ふうん、と顎に手を当てて泉は首をかしげた。

「やっぱりアレだね」

「なによ。アレって」

「かがみのは、いまいちこう弾力性に乏しいって言うか、こう量感に欠けるカンジがするんだよね。形自体はね、すごく悪くないと思うんだけど」

「なんの評価をしてんのよ……」

ため息混じりの声が、腕を通して頭のうえに伝わってくる。

「どっちかっていうとね、この体勢だと肘が痛い方が勝ってるよね。ほらかがみって見た目よりも重量感あるからさ……」

ぐりりり、と急にこめられる力が増して、泉はあわてて首を踏ん張った。

「なに、かがみ？　いたい、痛いって」

すぐそばでは、つかさが止めるべきかどうかであたふたしている。

「おーう。お疲れさん」

後ろから響いた声で、頭のうえのかがみが慌てて離れるのが見えた。

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ様です、黒井大尉」

二人の敬礼に返礼して、とりあえず黒井は近づいて、解放された泉の頭をこすところづいた。

「上官の前では敬礼やろうが、ドアホ。どつくぞ、ホンマ」

「はっし、失礼しました」

びつといまいちたるんだ顔で敬礼する泉におざなりな感じで返礼し、

「仲良いのもええけどな、そういうけじめはきちっとつけえや。おう、柊。二人とも、お疲れさんやったな。」

それから黒井は、横にいた二人に快活な笑顔を向けて労をねぎらった。

「あんたらがうまいことやってくれたおかげで、こっちも動きやすかったで。またこの調子でよろしく頼むわ」

「はい、ありがとうございます」

「大尉こそ、お疲れさまです」

「あーあとな、泉。先にいつとくけど、お前あとから個別訓練な」

「げっ！ な、なんでですか、なんで私ばかり!？」

不平をのべる泉の頭をがしつと黒井は手のひらで押さえ込んだ。

「べつにじっくり理由を説明したつてもいいけどな。そうすると、ミーティングとか朝飯の時間がまるっと無くなってまうやろ？ せやから後にしたろ、とそうゆうとんのやけどな。なんか文句でもあるんか？ それとお前、上官に言われたら、まず了解して復唱やろうが。」

「りよ、了解です、黒井大尉。」

「おーし、ほんじゃミーティングでな」

「黒井先生、ちょっと怒ってたっばいね…」

「どうせあんた、またなにかしでかしたんでしょ。いつものことじゃないの。」

黒井が行った後で、つかさとかがみが二人して言う。

「うう、そんな…今日は上手くやれたと思ったんだけどな…」

第十一回投稿分

「じゃあ、後でね」

軽く挨拶してかがみたちと別れ、泉は、重たい足を引きずって、ミーティングの行われる部屋に向かった。作戦後のミーティングは、義務づけられているわけではないが、だいたいの小隊が行っている。おもに、各隊の隊長が進行に切り、作戦中のお互いの行動や疑問点について、意見を述べ合うのである。充分に休息を取ってからやるのが相応しいようにも思われるが、実際には、それより優先してより記憶の新しい時を選んで行われる。

「おら。泉。ぼけつとしとらんと、人の話聞くときは起きといたらんかい！」

まだ記憶の鮮明な段階でやらないと、十分に身に入らないというのが、小隊活動における基本方針のようだったが、根気にとぼしい泉は、よく眠気に負けてしまうことも多い。額に見舞われた、黒井のクリップボードの痛みを感じつつ、泉はミーティングを終えると、その足で食堂に向かった。本当なら、すぐにでも居眠りたいのだが、空腹では眠りにくい、と育ち盛りの体のほうが頭に訴えかけている。まあ、作戦後に現地で口にした、簡易携帯食料の不味さにはつくづく閉口していたし、ちょーどいいや、と思いつつ、寝ばけ眼でトレイを手取る。顔なじみの食堂のおばちゃんから注文したB定食のセットを受け取り（なんでかいっつも大盛りにされる）、泉は食堂のなかに見覚えのあるかがみたちの顔を見かけて、そちらによつていった。

「おっすー」

「おー、おつすー」「あ、こなちゃん」

挨拶して寄っていくと、つかさとかがみが挨拶を返してきた。その横には、同じく知り合いである峰岸と日下部の姿もあり、それぞれに声をかけてくる。

「よーす」「おはよう、泉ちゃん」

「おつはよー」と、それにかかるく挨拶を返しながら、泉はつかさの横に座った。

「寝る前だつてのに、ずいぶん食べるわねーあんだ」

トレイの上の内容を見てちらりとかがみに言われるが、好きでやっているわけではないので放っておいてほしいものだった。何回か言っても止めてもらえないのだ。

「泉はちっこいし、ちょうどいいんじゃないの」

(むっ)

からかい気味に、日下部にも言われる。日下部みさおは、おもにラムダ2、と呼ばれる成実大尉の小隊に属する機体乗りで、泉とは同期にあたる。同じく機体乗りであり、同期の中ではかなり優秀な成績を誇っている。かがみとは中等学部からの付き合いで、泉と知り合ったのもその縁だったが、表面的には割と仲が良く、意気投合するところも多い。が、実はひそかに対立もしていた。

「あんたは気楽よねー。いくら食べても太らないからって」

はあ、とひそかに体重の増えやすいことを悩みにしているかがみが、横から言う。

「うーん。かがみが言つと、実感があるねえ」

「…あんたは何回言つたら、そのネタで私をからかうのを、やめんのかしらね」

「けど、体重が増えやすいのつて、体質によるものだっていうのもよく言われるよね」

やや殺気だった眼差しを向けるかがみをなだめようと、峰岸が、困り笑いでフォローの言葉を口にする。

「親の遺伝とかも、関係あるらしいよ。いくら本人が気をつけてもそつなつちゃう場合もあるんだつて」

「へえ〜そなんだ」

横から呑気に同意したのは、つかさだった。が、かがみはというと、眉尻を下げて、微妙な表情で言う。

「それは私も聞いたことあるけどさ。でも、うちのお母さん見てると、そういうふうには思えないんだよね…。うちの姉さんたちは、けっこうアレなんだけども」

「あゝ、それ、なんとなく分かるかも…。お母さん、ほんとすごいもんねー。スタイルとか…」

なにかコンプレックスがあるのか、複雑な顔で、姉妹二人ともが言う。

「うーん。遺伝かあ。…そーいやすうだね。ウチのお母さんも、そーいえばかなりちっこかったっけ」

「え。」と、かがみが驚きの表情を返してくる。

「…ねえ、あんたんとこって、お母さんもそーなの？」

「うん。お父さんと結婚したくらいの時の写真あるんだけど。なんか今の私と身長とか体型とかあんま変わらないんだよね」

「そ、そーなんだ…」

なにかショックでも受けたような顔で、かがみは目をそらしたが、泉には特に心当たりもない。「泉司令が…そんな…」ぶつぶつと呟いているが、よく分からない内容なので氣にとめないことにした。そーいえばかがみは厳格な指揮官である泉の父をどこかあこがれの眼差しで見っていたようだったが、とくに関係もないだろう。

「へえー。あ。んじゃ、泉っていくら食っても大きくなるんじやね？ 便利じゃん、それ？」

空気を読まない日下部がまた話題を元に戻してきた。実はわざとやっているのではないかとも思えてくるが、生来のバカキャラであるこの娘にそんな嫌がらせ的発想が浮かぶはずもない。そう思っているところ「ふふん」と言う感じで、ほかにはわかりにくいように泉にだけ音のない笑いを返してくる。

なるほど。前言撤回だ。どうやらケンカを売られているらしい。

「…ちよつと日下部。あんた、あんまり人の気にしてることしつこく言ってるんじゃないの。キラわれるわよ。そーいうの」

それに気づいていたらしいかがみが、ちくりとげを刺す感じで日下部に言う。「む…」と言われた日下部も根は善人よりだから、表情に出して、わかりやすく不満げにうなった。

「ちえー」と子供っぽい仕草でそっぽを向き、やや口を尖らせて言う。

「なんだよー柊はさー。こういうときは、ちびっ子の味方すんだからなー」

「何よそれは…」

「はあーあ、まったく、冷てーよなー。あたしらのほうが、付き合い長いって言うのにさー。たまには優しくしてくれたって良いと思うよなー。なー、そうおもわねえ、あやの？」

「まあまあ、みさちゃん。いまのはね、みさちゃんも悪いところあったと思うよ」

振られた峰岸はニコニコと笑いながらも、さりげに言うことがきつい。いつも人の良さそうな顔をしている娘だが、言うときは言うようなどころがあり、なかなかあなどれないところがある。

「あやのまでそんなこと言うのかよー。あーあ、まったくどっから愛が欲しいよなー。柊はくれねーもんなー」

「…だからなんであたしなのかがわからんし。頭でも膿んでんのか？ あんた。いきなり何いってんのよ」

「っなー。これだぜー？」

手のひらでかがみを示してみせながら、横で曖昧に笑っている峰岸に同意を求めている。「まあまあ」とたしなめられている日下部の横面を見つつ、「ふふん」と泉は挑発的に笑い返した。

「まああれだよ。かがみの愛は、しょせんみさきちゃんには過ぎたものと言ったところだよ。正直な話」

「むう」と眉をつり上げて日下部は泉を睨んでくる。はあ？ とわけの分らない顔でかがみもこちらを見るが、泉は構わずその腕にがしつとひつついた。

「かがみの愛が向けられるのは、私一人で十分なのだよ。うーん、かがみイーン」

「おい。ちょ待て。何いってんのよ、あんたまでいきなり。離しなっつて」

「んふーん、見て見てこうやっていきなりぺたぺたひつついても手痛い打撃をこうむらない特権さ。どっかのバカッ娘にはけて分かりようもない感覚だよ。どーおーうらやましいでしょーお。ねーどーお」

抵抗する力が弱いことで調子にのった泉は、すりすりとマーキングのごとくすり寄って、自分の領有権を主張した。

「シワがつくつつの。いい加減離せ、コラ！」

たえかねて目をつり上げてわめくかがみに「ぐうぐう」とすさまじく悔しそうな目をむけて、日下部はたまらず卓を叩く。

「ちつくしょー、人前でいちゃいちゃやがって！　こうなったら勝負しろ、ちびっ子！　どっちが柊に相応しい器か今度こそはつきりさせてやるぜえ！」

「いーけどお、今度はなに賭けるのー？　まさかひたすら負け続けるみさきちゃんか、またワンパにジューズ一本ていつのはありえないよねーえ？」

「…あんたら一応言っとくけど小隊員同士で賭って規則違反だぞ」

執拗に張りつき頼ずりまでし続ける泉をひっpegがそうとしながらかがみは言うが、日下部の人の話を聞かないぶりはヒートアップしていくばかりだった。

「もちろんだぜ！」

と光る銀河のような両目に（ムダに）闘志を燃えたぎらせ、

「柊の愛をこの手に掴むべきこの戦いこそまさに聖戦…いまこそ私の魂の供給源ともいうべき、素晴らしき食材の極みをこの勝負のために賭けてやるぜ。ずばり！　ミートボー」

「いや。嬉しくないし」

「まだ言ってる途中だろ！？」「」

「なあ…あんたらしいから、飯喰ってもう寝ろよ」

二人の高いテンションにはもうついていかず、かがみはしまいは大人しくされるがままになっていた。

第十二回投稿分

なんやかやで騒がしくした後、泉はかがみからようやく引っぺがされてやり、大人しく朝食を食べ終えた。朝食を終えて、部屋に戻る通路を歩いていた泉は、ふとつき慣れないため息をついたことに気づき、ほんのすこし憂鬱になった。楽しい、と思える時間の後だったからだろう。陰うつな感情の元を思うと、ひどく心が重たくなる。かがみ達の前では絶対に見せない顔を、今の泉はしていた。一度つかさやかがみの前でうつかり見せてしまったことがあるが、手ひどく心配された。それ以来、つとめてしないようにはしている。一人の時だとそれも隠す必要はなかったが。

(……)

泉自身、今の自分自身には苛立っていた。本当ならこんなことで悩みたくない。自分が今やっていることを考えたら些細なことだろうし、ささいなことにするように望んでいるのは、たぶん泉自身だけではないと思う。くだらなくてつまらないことだなんて泉にはとても言えなかった。ただ悩むべきことでもないと思っている。

誰に聞いてもそう言うと思う。

だってこれは自分の我が儘だから。

子供の言うことだから。

(……)

食堂に向かう途中、偶然父と会った。小隊のミーティングがよく行われている区画は、作戦仕官級の間人が出入りするところに近い。だから珍しいことでもなかった。廊下を歩いていたときちょうど目の前の部屋から扉を開けて、父が出てくるところだった。

(あ……)

その姿に気づいて、泉は声をかけようかどうかためらった。少し離れて見る父の横顔は、少し暗く、同時に厳しい「上官」のものだったからだ。今の泉には遠くに感じる存在だ。そう思ったことが、声をかけるのをためらわせていた。声をかけずにいるうちに、先に父のほうに気づいた。ドアを閉める拍子にちらりと目がこちらに動き、どうやらそれで気づいたらしかった。

「こなた…。」

「あ、うん…」

泉は自分でも間の抜けた答えを返したと思った。しかし思わず言葉に詰まったのも本当だった。思えば、いつの頃からだろうか。自分は父の前にでると、こういう曖昧でぎくしゃくした態度を取りがちになる。

「こなた」

なにか言おうとしたちょうどそのときだった。父が口を開いてこ
う言った。

「基地の中では、上官には敬礼だ」

父はぴしゃりと言ったのけた。眼差しだけはいつもの父のものだったが、有無を言わせない響きがあった。

「――、」

泉はほんの一瞬だけ沈黙すると、

「はい、すみません、失礼しました。お疲れ様です。泉司令」

父は返礼を返して頷くと、急いでいるのだろう。きびきびとした足どりで泉のいるのは反対方向に歩いていった。

「……」

一人取り残されたような気持ちになり、泉は父の背中を見送っていた。…いつまでもこうしていても仕方ない。自然と止めていた足を動かし、心持ち重くなった足どりで食堂に向かう。歩きながら、ほんの心の片隅のほうに、消し去りたいような思いがうずく。たしかに組織の中では上司と部下だからわきまえなければいけないこともあると思う。そういうけじめはきっちりつけないと、結局お互いのためにはならないだろうから。…でも、せめてさつきみたいに人目のないところなら、そういうものは関係ないって言うて欲しかった。そう思った自分自身が、恥ずかしかった。

(……)

寝ころんだ枕に顔を埋めながら、泉はぼうつとして目の前を眺めた。こうなることは分かっていた。この道を選んだときから。あるいはとづくにわかっていなければならなかったし、その上で納得もしていなければならなかったと思う。

いまさらなんやかやと悩んでいるのはおかしい。それでも、父に拒まれたくない。

お父さんに娘だと言って欲しい。特別扱いにして欲しい。そんな思いが、頭から離れなかった。

母が亡くなつてから一時期、父は家にいる泉を気づかうことが多くなつていた気がする。まだ体が若いと言ふこともあつたのだろう。そう多く抜け出してこれるものでもないだろうに、それでも可能な限り、泉の顔を見に家に帰つて来るようにしていた。父のやつていう「おしごと」が、なにかとてもだいじなことで、それは誰か大勢の人のために役に立つ仕事なのだ、ということを経験しながらに理解はしていた。わがママをいつて困らせないことが父のためになることなのだと、素直に信じてもいた。

そんな泉を父がどう思つていたのかはよくわからない。
ひよつとすると氣に病んでいたのかもしれない。

内向的で、自分のやりたいことを自分で押さえがちにしようとするところがある。そんな娘を見て、もしかするとそうなのは自分のせいかもしれない、とそう思うことはなかつただろうか。

泉のそばで笑っている父の顔には、いつもそんな面影は感じられなかつた。

ただ、一人になつたときに難しい顔で考えこんでいることがある。泉はそれをなにかおしごとのことで悩んでいるのだとそう単純に考えていた。実際には違つていたのかもしれない。

聞いても父は答えてくれなかつただろうと思う。泉のほうも父からなにか聞かれたことはない。たとえ聞かれたにしても、おたがい妙な強がりをして本当の気持ちを述べ合うことはなかつたのではないか。そうなるまでに、おたがいの本当の気持ちをちゃんと述べ合う機会が得られなかつたのではないか。……なんにせよ、そうやって、泉と父の二人きりの暮らしは続いてきた。いまにいたるまでずっと。十数年間のあいだ、ずっと。

第十三回投稿分

…目が覚めると、ベッドの中にいた。

「…うつ」

ずり、とベッドの上を芋虫のように寝っ転がり、かすんだ目で時計の針を確認する。ちよつと寝坊気味だった。もう起きなければならぬ。そして、ついでに言うなら急がなければならない。眠りたがる半分眼を萎えかけた気合いで、3分の一ほどこじあける。徹夜明けのようなだるさを体の節々に感じつつ、泉はベッドから抜け出した。転げるようによろよると部屋を出る。

じーわじーわ、という早起きな蝉たちの声が耳にいたい。廊下に出ると、清浄な朝の空気がさっそく穢れめの身に染みわたってくる。

「うわ、あつつウ。…もー…」

クーラーのないダイレクトな暑さに軟弱な文句を漏らす。このくらい機体のコクピット内の暑さにくらべたら…とも思うが、だんだんとひ弱になってるんだろうか。とたとたとかるい足音を立てて、「はわっ」と、鉢合わせたゆたかが驚いた声を立てる。

「あ、おはよう。お姉ちゃん」

「あー。うん。おあよー」

「うわ、お姉ちゃん、どうしたの…。髪ボサボサだよ。顔もすごいし…」

ゆたかは自分もちよつと寝起きの抜けきらない様子で言った。

「うん…まあ、ちよつとね……」

しよぼしよぼと泉は答え、

「なかなか相手がはなしてくれなくてって言うか…やめるにやめられなくてっていうか…ネット同士の付き合いって言うか、そんなかんじかふあ」

語尾が欠伸に溶ける。

「よくわかんないけど…大変そうだね…」

居間に向かいながら、ゆたかが感心の入り交じった目を向けてくる。

「うん…ちよつと髪直してくる…」

言いつつ、洗面所に向かいかける。

居間からはいい匂いがしてきていて、テレビの音がこぼれてきていた。

料理当番の父が先に起きてきて、朝食を作っているらしい。

胃がかるく捻られる感触とともに、腹から健康体をしめす音が鳴った。

今日も快調そうだ。

「お、お姉ちゃん…そういうのはもうちよつとこつそりしたほうが…」と、横からゆたかのつつこみが入るが、生理現象は仕方がない。

「あ。お姉ちゃん」

「うん？」と泉はふりかえった。呼びかけたゆたかは、なにか言おうとしてそのまま首をかしげ、

「あ。ううん…」

「…なに？ ゆーちゃん」

泉は聞き返し、

「ううん。なんでもないの。ただね、なんていうか、…」と、ゆたかがそこでちよつと言いよどみ、

「元気になったかなって。なんとなく」

「うん？」と、泉は寝ぼけ眼でかしげつつ、

「えと、わたしのこと？」

「うん、」とゆたかは答え、

「えつとね…なんていうか…」

言いにくそうにしつつ、「あ、時間…」と途中で気づいたように言って、

「ごめん。あとでいいや。急がなきゃならなかったよね。うん、ごめんね」

そそくさ、とそう逃げるように引つ込まれるとそれ以上聞きづらかった。

小さい背中を見送りつつ、ふむ、と首をかしげて泉はちょっと考えこんだ。

実を言つと、ゆたかの言いたかったことがわからないでもなかったのだ。気づいてなかったわけではないが、あらためて人から言われてみれば、そうなのだろう、と思う。つい3日前の――あのことがあつて以来、あれから、なんとなく心が軽くなったような気はしていたのだ。

泉は洗面所に入って、いい加減に髪を直すと、居間で父に呆れられながら朝食をとり終えた。

それから歯磨きもそこそこに、服を寝間着から制服に着替えて、玄関を出る。

駅に着くと、いつもどおりつかさがいて、ふらふらと近寄ってきた。

「こなちゃん、おはよー……」

「おはようございます」

「おはよー……」と、さわやかに挨拶するゆたかの横から泉は返しつつ、ふと辺りを見て、

「あれ？　かがみは？」

「うん……ちよつと風邪引いちゃったみたいで……今日休むって……」

なんだか、一人で駅まで来たのが奇跡のように、頼りなくつかさは言う。大丈夫だろうか。

「あの、大丈夫ですか？　なんかすごいふらふらしてますけど…」

「ううん…なんかねー。寝不足で調子わるくってふえ」

ぶわ…と後半が欠伸に化ける。

「はあ…」と心配そうにゆたかは言うが、それだけ心が純粹なのであって、これがかがみなら、じろりと泉を見つつ「お前ら同類だな」くらいのことは言っていただろう。

（こっちでもこういうところは変わらずか）

ふむ、と顎に手を当てつつ、泉はあらためて納得していた。

どうも事態を冷静に見る余裕のようなものが備わった気がして、泉自身それを実感してもいた。

かがみが来ていないし、風邪だし、と言う理由で、行く途中、話題はそのことになった。

見舞いに行こうかどうしようか、という話になり、じゃあこの際だし、「ついでに一緒に来てみたらどうか」、と泉はゆたかに言うてみた。

「え？　わ、わたし？」

「うん。まだつかさたちの家に行ったことなかったよね」

「あ。それいいかも。」

ほんわり同意するつかさと、泉とをゆたかは交互に見て迷った様

子になり、

「あ…でも、迷惑にならないですか？ お姉さん、風邪で寝込んでるって言うし…」

「だいじょぶだいじょぶ。見舞いに行くのは多いほうがいいよ、賑やかで。ほら病は気からって言うじゃん？ 周りで元気よく騒ぎたててあげたほうがきつと治りも早くなるよ」

泉は無責任にのたまったが、一言多いのは言うまでもない。

ゆたかは泉よりはるかに常識的で頭も良い子なので、わかってはいたらしいが、そこは大人なので突っこまずに、「ええと…」と小さく言ってもじもじした。

「そ…それじゃあ…お邪魔しても、いいですか？」

「うん。大丈夫だよ。ゆたかちゃんなら、お姉ちゃんも喜ぶと思うし」

心は温まるがわりとあてにならない笑顔でつかさが言うのに、ゆたかは素直に笑い返した。

「じゃあ、ふ、ふつつか者ですけど…よろしくお願いします」

「ゆたかちゃんていい子だね」

その日の休み時間、つかさが言ってきた。やや怪訝そうな顔をする泉に、

「ほら。前にこなちゃん話してたでしょ。かわいい従妹の子がいるって。…あれってゆたかちゃんのことだよね」

「あ。うん」

泉は「向こう」の世界での話をしてるんだな、と気づいて頷いた。

「わたしまだ会ったことなかったもんね。…こんなふうに出会うことになるなんて、なんか不思議」

「そうだね」と、すこし複雑な顔で泉は返した。たとえ向こうの世界で会っていたにせよ、こっちの「ゆたか」とは違い、むこうのゆたかはああいう境遇だ。何も知らないとはいえ、こっちでの出会いのほうが一番幸せかも、とちらりと思ったことが、泉はすこし気に掛かった。…幸せも何もない。こっちの「ゆたか」はゆたかではないのだから。何も知らないゆたかと会ったとしても、それはつかさにとっても何もならない。

…ゆたかにとっても。

それは泉にもわかっていたのだが。

はあ、と昼休みに屋上で弁当を広げて、つかさがため息をついた。

「…私たち以外に、こっちに来てる人っていないのかな？」

「うん…」

手元のチョココロネをかじりつつ、泉はどこか気の抜けた返事を

返した。

今日は教室ではなく、かがみはもちろんみゆきもない。二人の前では出来ない話をしているのだし、当たり前と言えば当たり前だった。ひよい、ぱく、とまったり箸を進めながら、つかさはぼんやりと呟く。

「そもそも、どうしてこんなことになっちゃったんだろうね……」

「うん……」

もともとたいした方策があるわけでもない。あれから3日ばかり、いちおう話し合いや相談のようなことはしてみたのだが……思えば無謀だったことはいない。案の定お互いの話からは手がかりらしいものもつかめなかった、のはまだいいが、第一に泉たちは、まだこの状況がなんなのかすら理解できていないのだ。

もちろん、そんな様子では、話してみても結果は同じことだった。とにかくつかさも向こうの記憶はそのままそっくりあるらしいこと。泉のように、頭のなかで「声」のようなものが聞こえていたこと。そのせいで、この頃だいが不安定になっていたらしいこと。わかつたのはそのくらいだった。で、どうする？ どうする？ と、話しあっては見るのだが、当然らちがあかない——なにかはつきりした目標のようなものでもあれば、推測とはいえ動きようがあったのだが……その具体的に「どうしたい？」という希望が、二人からは欠けていた。……よって当然のごとく。

「……」

「は」

一時的な混乱と好奇心が去った後の倦怠感とでも言うのか、とも

かく今の二人からは気というものが抜けていた。だから、話に詰まり、こうしてぼんやりと空を眺めてみたりもするのだった。

「とにかく…これからどうしようかってことだよねー」

なぜか重たく感じる口を開き、泉は言った。

「つかささ、もしかして確かめてみたりとかしてみた？ この前言ってたアレ…」

「あ。うん」

つかさは頷きながら、

「一応はね。…なんか、よくわかんなかったうえに、お姉ちゃんやお父さんたちから、…ちょっとヘンな目で見られるようになったりしたけど…」

「だよねえ…フツーの人に言ったらまずそうなるよねえ…」

泉は言いながら、なにかむなしさを感じた。自分たちが「フツーでない」と認める発言は、なるべくなら口に出して言いたくなかったのだ。

「…でも、やっぱりお父さんたちは違うみたいだよ。それっぽい話振ってみても、誰も反応しないし」

しよげ気味に言つつかさ、泉もアンニユイなため息を返した。

「うちもお父さんもゆーちゃんも違うみたいだし…ゆい姉さんやき

い兄さんにもいちおう話してみたけどね……」

話をしたときのゆいの反応を思いだし、泉はなんとなく人徳、という言葉を思い浮かべた。変な目で見られることはないのだろうが、それがはたしていいことなのかどうかはなはだしく疑問だ。

「…だれか、いますぐここまで来て全部説明してくれる人がいればいいのにね」

「それも都合がいい話だけどねー。ほんとそうだよね」

結局、身にならない談義に終始して、この日の昼休みは終了した…いや、正確にはこの日も、だった。

なにせよ、今の状況では文字通り話にもならない。これから先の行動の指針が決まっていないようでは、「どうしようか」などとは、いくら言ってみてもしょうがない。…それは泉にも分かっていたのだが。（いや…）

いや…本当はつかさにもわかっていないのかもしれない、と泉は思っていた。

それと嫌な感情がするり、と頭に滑り込んでくるのも。

…そのことを考えることが、まるで「だめだ」と言っているように、誰かからいくいと腕を引つ張られているように。その考えは、うつすらじわじわと頭にしみこんでくる。（そんなこと、ない…）

少し頭痛がしてくる。

…泉はそれ以上、考えるのを止めた。そんなことはない。…そんなことは、考えていない。

「こなちゃん？」

考え事をしていて、周りに気がつかなかったらしい。

「え？」

気がつく、すぐ目の前につかさがいて、自分の顔をのぞきこんでいた。

「あ、なに…？」

泉の言葉に、つかさはきよんとした。

「え、…なにって？」

「え？ だから…話？ なんだっけ？」

「話つて言つか…普通に声かけただけだけど…そしたらこなちゃんぼーっとしてて…」

「あ…そ、そだっけ。ごめん」

泉の様子に煮え切らないものを感じるようなそぶりながらも、つかさは言ってきた。

「…今日の帰りのことだけど。ゆたかちゃん誘っていくんだよね。こっちから迎えに行くの？」

「ああ。ええと、どだっけ…」

と、思わず言いかけて、泉は軽い苛立ちを感じた。なぜかはわからない。

「…うん、そうそう。迎え行くんだったよね…」

がた、と立ち上がろうとして、泉はカバンを忘れていることに気づいた。持ち上げようとして、ふと異様な重たさが感じられることに気づく。

（あれ…）

カバンの中身を確認めて、泉は「う」と固まった。どうして気づかなかったのか分からないが、いつのまにか、教科書やノートがぎゅうぎゅうに詰め込まれている。

（あちゃ…）

自分でやつという気がつかなかった。

こんなに持ち帰ってなにをどうするというのだろうか。

普段の自分は家で勉強なんてしないし、よほどせっぱ詰まらないとしようなんてことを考えもしない。…受験生という身分でありながらそれもどうかと思うが、いまはそんな冷静なツツコミを入れているときでもない。泉はだまってせつせと中身を取り出し始めた。

「あれ？ こなちゃん？」

眉をひそめてつかさがつ。

「あ、うん…」と、泉はややあわてて答えつつ、

「ごめん。ちょっと間違えたみたい…ん、ちょっと待ってて」

あわただしく重箱みたいになった教科書を机に戻しつつ、視界のはしでつかさが心配そうに見ている顔が映る。…さすがに、妙に思われたらどうか。

後ろめたさのせい、か、こころなしか少し怒っているようにも見える。

気のせいだろう。そうは分かっていたが、泉は自分がひどくテンパッているを感じた。…嫌な汗が、腋の下に噴き出してくるのがわかる。暑さのせいだけではない…そのときなんとなく、つかさが何かを怒鳴り出しそうな錯覚にとらわれて、泉は強い焦りを感じた。

（なんでそんなこと思っただろう…）

「あ、泉さん、つかさん」

横からやってきたみゆきが、ちょうどよく声をかけてきた。おっとりとしながらもどこか慌てた様子でやってくる。泉は内心でほっとしながら、そのために不自然に早い応対をした。

「—うん？ なに？ みゆきさん」

「—すみません。お借りしていたノートのことなんです…」

特に気にせずみゆきは言う、二枚のノートを差し出してきた。あ、と泉は思いつつ、同時に今日のことも思いだした。そうだった今日はこなたとつかさのノートは、ずっとみゆきに貸しっきりだったのだ。それというのも、今日のみゆきには眼鏡がなく、そのためにこんなことを二人に頼んでいたのだ。…思えば無謀と言わざるを

得ないが、みゆきも交友関係の狭いほうなので、仕方ないと言えは仕方ない。

「どうもありがとうございます。おかげで助かりました」

「—あ、うん」

と、横のつかさがノートを受け取って笑う。さっきまでの不安げな面持ちはどこにもない、こういうところが嘘くさくならないのは、つかさの長所かもと泉は思った。

第十四回投稿分

じいーん、じいーんとアブラゼミが奏でる不協和音の輪を抜けきって、

「はー、ようやくついたねー」

と、ゆいの呑気な声が上がる。

休暇が取れたのは八月も半ば、夏のまっさかりの頃だった。

ちょうど休暇の時期があったということで、それぞれに声を掛け合った結果行くメンバーが決められ、つい数時間ばかり、車での道程を仲良く揺すられ、いまはそれを終えてきたところである。

山道に林はとぎれ、閑静な市街地をめぐり、海に着いたのは午前十一時を半分ほど過ぎた頃。

今はさびれた旅館街とホテル街を望む、ちょっと黄ばんだ砂浜が、真白に輝く空と太陽をバックに、佇む一行を手招きしている。…それはいいのだが。

「まあ、こうなるとは思ってたんだけどね…」

ちろりと横手で青い顔しつつぜーぜー息をつく友人たちに目をむけ、泉はしみじみと顎に手を当てた。元気全快ですこしも疲れた様子のないゆいに反比例して、元気がないのは日下部と柊かがみである。

「…おい、柊。いまあいつ、なんて言った…？」

「さあ。…なにかすんげえ聞き捨てならないこと言われた気がするけど…」

怨みがましくつぶやく日下部と、殺気をこめてそれに同調するかがみ。

気持ちは分かる。泉はむしろ同情すらした。このような突発的災難とも呼べる事態に遭えば、誰であろうと恨み言のひとつも吐きたくなると言つものだ。

…問題は、なぜその殺気が自分に向けられているのかということだつたが。

「…起こるべき災厄を未然に防いだというのに。これはいつたいなぜだろうか…」

むう、とうなる泉に、地獄の底の亡者もかくやという声で、

「…なにが、なぜだろうかなのよ…」

こちらをふりむいたかがみが言ってきた。泉はしかたなく、ちよつどそちらを向いて説明することにした。

「いや。だつてさー。つかさとか峰岸さんとかみゆきさんとか、気の毒で乗せらんないじゃん？ あんなの。着いたとたんに倒れられたりしたら、せつかくの楽しい旅行が——」

泉としては、正当かつ説得力のある内容の確信があつた。だが、言つた瞬間に、

「あんのなあ！！」

と、かがみは聞く耳もたずにぶちぎれ返してきた。

「なに？　かがみ…」

「なにじゃねえ！　てかなにあたりまえみたいな顔してんのよ、あんた！　そういうことならなんでわたしがあんたと一緒に乗ってんだ！？」

「やだなあ、順、序。そんなの優先順位に決まってるじゃん。黒井先生の車、三人までしか乗れないしさあ。それにだいたいわたしたちのなかでだれが一番こういうのに強くてしぶとそうかなーって考えたら、こう自然と…」

「その差別順位はいつたいなんなのよ！？　あんたら機体乗りの連中と私が肉体的に同列か！？」

泉はきりつと真面目な顔になって、否定するべきところを言った。

「んーん。もちろん同列なんかじゃないよ。かがみはちゃんと私よりも格上としてね」

「お・の・れ・はああああ」

がしよつ、と両脇から泉の頭をつかんでめきめきと音を立てはじめるかがみと、真面目に指を立てたままの姿勢で、「お、お、お」となされっぱなしの泉。その後ろからげんなりと日下部が言う。

「でもさあ、中尉の運転本当やばすぎだつて。もう平衡訓練シミュとかぜんぜんめじゃねーつて。あれほんとに自動車だよな？」

言いつつ、日下部が指を差すほうには、ごく普通の軍用ジープがある。市街地への買い出し等、ちよつとした所用をこなすため外装

は一般よりに近づけてあるものだ。性能にもいたって問題はないはずだが、それがいったんゆいの手にかかる、暴走すること狩るべき獲物を得たヒヨウのごとしだった。

「うーん。たしかにみさきちゃんでもこうなるってことは、機体乗りだとうとかってあんまり関係なかったかもね。慣れの問題なのかな、やっぱ!？」

かがみの攻めがアイアンクローもどきから変則ヘッドロックに代わり、受けの苦しさが泉の語尾に表れる。それを気にしない様子で日下部は続け、

「ほんと信じらんねーよな。なおかつそれで、本人は全っぜんぴんぴんしてるってのがまた。そういや成実隊長の奥さんって話してたけど、あれまじなのか？」

「うん。そうだよ。配属基地を越えて新婚ほやほやハネムーン中。向こうの基地ではよく飲んだくれて荒れてるんだって同じ隊の人が言ってたのはっ!？」

と、かがみの攻めがヘッドロックからさらにこめかみごりごり責めを加えたものになり、泉が苦悶の声をあげる。性格的なものがあるかわれるのか、かがみのとがった拳は的確に急所を射抜き、貫いて逃さない。あえてそちらは見ようとせずに、腕組みしてしみじみと日下部が言ってくる。

「…隊長みたいな堅物がああいう人をな!。ほんとと男と女ってわっかんねーよな!」

「うーん。案外あれじゃない。ゆい姉さんの果敢な攻めについ兄さ

んのほうがコロっといっちゃったとか。ほら、姉さん一度獲物と定めたら絶対逃さないタチっばいし」

ようやく解放されてふらふらとよろけつつ、泉は応答した。

「まあ、そういうのは人それぞれなんだろうけど…」

ようやく満足しつつも、かがみは半眼で言いつつ、それからふと気づいたように言った。

「にしても黒井先生たち来ないわね。ちょっと遅くない？」

「あれだけぶっ飛ばしてきたら普通についてこれねーんじゃねーの」

うんざりした様子で日下部が返す。さっき体感した未体験空間の恐怖がまたぶりかえしたのかもしれない。

「うーん。みんな揃わないと遊びにも行きにくいしねー」

と言っていると、ふと、

「…ていうかさ。そーいや男と女って言えば、峰岸さんて彼氏いるんじゃないかったっけ？」

と、泉が唐突に割りこんで聞いた。

空気を読まない発言に横のかがみが白い目をむけたが、むろん泉には伝わるはずもない。

「あー」と、日下部は複雑にうなりつつ、頬をかいた。

「今回たまたま予定が合わなかったらしくてさ。それでまー。」

気の毒そうに眉をひそめつつ言う。

「あやのもけっこう乗り気だったらしくてさー。うきうきして水着新しいやつまでわざわざ買ったり準備したりしてたんだけど……はー。兄貴のやつもなー。ほんと空気読めってカンジだよなー。声かけるこっちが氣い遣うってのにさー。体よく私に押しつけやがって」

「はー」と、泉は生温い同情を返しつつ、

「……彼氏がいたらいたで、いろいろ大変なんだねー。」

日下部はその泉に少し身をかがめて、耳打ちするように言う。

「……あやのあれでもけっこう気にしてっからな。お前、絶対目の前で言ったりすんじゃないぞ」

「やだなあ。そんなの、あたりまえじゃん。だいたいほんとに言う気なら朝会ったときにもう言ってるよー。わたしだってそのくらい配慮くめるしー」

「……でもいま、なんか話の流れでふと思いついたように言ってなかった？ あんた」

泉は黙って答えなかったが、さりげにふい、とかがみからは目をそらした。

「まあ。あれだよな。姉さんもきい兄さんとかと予定あわなかったんだろうし……」

話をそらすなよ、と言いたげに見たかがみも、なにか通じるものを感じたらしく、ふう、とためいきをついた。

「まあ、そうね。男と女っていうのも大変よね。けっこう」

乾いた口調で言うのに、日下部が頷いて言う。

「やっぱり女同士が気楽で良いよな」

「そだねー」

と、泉が同調し、

「あ、…あはははは」

と、三人揃って不自然に明るく笑い声を上げる。

ふん？ と、ついていけないゆいがそれを後ろから不思議そうに眺めたが、既婚者にはしょせんわかるはずもないことだ。

「夏に一人」という青春の闇を自覚してしまった少女たちの哀しき笑い声は、わりと長い間続いたのだった。

第十五回投稿分

…とはいえ、夏は短く、休暇はさらに短い。いつまでもそうしてもいられないので、四人は準備をすませるべく、さっそく場所を移動した。あらかじめ宿には予約を入れてあるので、まずは荷物を置きに行き、それから昼食をとりに出る。外はうだるような日差しに負けることなく、道行く人でにぎわっている。

この辺りの街並みは、シーズンに大きな収入源を頼る典型例のようで、人手のにぎわう中にも、さびれきってうらぶれた姿がそこかしこに見てとれるようだった。適当な食堂を見つけて、満員のざわめきの中をかきわけるように席に着く。

「うわーさすがに人が多いねー」

「ちょうど昼時だからね。にしても、黒井先生たちほんと遅いわね。お昼ご飯よ、もう」

「どっかで食べてくんじゃねー？ いいから私らは私らで食べとこうぜ。もうお腹ペッコペコ」

日下部の言葉にかがみは笑って同意して、

「そうねー。まあ、実は私もそうなんだけどさ。ええと。うーん、なにしようかな…」

一緒にメニューをためつすがめつしていた泉だったが、その二人の様子を見ていて、つい思ったことが口に出ていた。

「二人ともあれだけひどい目にあっただのに、よくすぐに入るねえ」

呑気に言った泉に向かい、かがみはぽつり、と、

「黙れ。あんたあとで覚えとけよ」

静かにそう言った。泉はなにか背筋が凍り付くような悪寒を感じつつ、

「え、ちょ…や、やだなあ、かがみんたらもう。目が本気すぎ。そんなんじゃ冗談だってわからないよ？」

と、自分でフォローをしたが、

「ねえ、日下部。」

にっこりとそれを無視して、かがみは日下部に向かって、

「バットってどこで売ってたかしら。あと西瓜も必要なんだけど」

いっぽう、いわれたほうも心得たもののようで、

「んー。西瓜はともかく、バットは厳しいかもなー。あ、木刀でいいんじゃない？ さっきその土産物で売ってたし」

と、さらりと日下部が応答する。普段とまったく変わらない笑顔だったのがな。泉の恐怖感を刺激したが。あ、あは、と泉はひきつった笑いを浮かべつつ、冷たい汗が背中を伝うのを感じ、

「…や、やぶ蛇だったみたいだね…完全に…」

やっとそれだけを言ったが、むろん後の祭り、ただの悪あがきであることは言うまでもない。

昼食を食べ終わって、宿に戻ってはみたものの、あいかわらず黒井たちが到着した気配はない。

部屋の中の荷物はそのまんま。4人は遊びに行くのもなんとなく気が引けるということで、しばらくだらだらとだべっていたが、そのうち待ちくたびれた。

「来ないわねー」

「道、間違ったんじゃね？」

「電話してみたら？」

「無理よ。ここ電波規制がかつてるし、つながないわ。」

「あ。そっか。通信区域だもんね」

「でもこうやって待ってんのもヒマだよなー」

「ねー……」

同意して、ふう、と各々の口からため息がもれる。

「……さき行っちゃおっか？」

ちよつとの沈黙を挟んでかがみが言った言葉に、誰も異論をはさまなかった。現在時刻は二時をちよつと回ったところで、昼食を終えてからかれこれ一時間以上は立つ。そうと決まれば、と、四人はいそいそと着替えだした。

「いやゝ水着なんて着るのひっさしぶりだよー」

「ひさしぶりってか、わたし中等のとき、親と海行ってから着たことねーや」

「うーん。わたしも海行ったのなんて小等の時以来かなー」

「…ていうか、あんたまさかスクール水着とか持ってきてないわよね。小等のときがそのまま着られるからーとか言って」

「しっつれいなこというなー。ちゃんとしたの持ってきてるよ。そういうかがみこそどうなの？ 中等の時のがそのまま着られるからーとか言って、持ってきたりしてるんじゃないの？」

「あんと一緒にすんな。私はちゃんと成長してるし」

背中を向けて言ってくるかがみの言葉に、泉は肩越しにニヤリと笑った。

「ふ…。もう言葉にキレがない」

「うっさいわね。だいたいあんに堂々とさげすまれるほど…」

言いかけてふり向いたかがみの顔が、ぴたりと強ばる。

「おい、ちょ、待てあんだ。それ、ビキニ？」

「うん。そっだよ？」

「そうじゃないわよ！ 私でさえワンピースなのに！ あんたがビキニタイプってどういうことよ！？ 自重しろっての！」

「いいじゃん、べつに。水着のチョイスは人の自由だもん」

「限度つてものがあるでしょ！？ だいたいあんたのどこのあたりに強調してまで見せるべきものがあるっていうのよ！？ いいからとっとと脱げ！ そこでレンタル用の子供水着借りてきてやるから！」

「やーだー！ 高かったんだからコレ！」

部屋の一方では、すでに着替えを終えた二人がぎゃあぎゃあ言い合う二人を所在なげに眺めている。

「…おい。柊ーいかなーのかー」

「先行つてよつかー？ なんか長引きそうだし…」

「によ…柊がチビッ子とばかり仲良くしてやがるっ…」

しょぼんと肩を落とす日下部とゆいは、一足先に部屋を出た。ほどなくしてかがみと泉もそれなりにに決着をつけて、あとに続いた。

砂浜に出ると、焼けるような気温にもめげず、遊ぶ人でにぎわっていた。パラソルとビニールシートを持ちこんで、適当な場所に陣取ると、泉達はさっそく海に出た。

「はー」

真夏の午後にさしかかり、日差しは強烈で、海面がするどく輝く。
冷たい海水が肌を洗う感触がたまらなく爽快に感じられる。

…が。

「…ねえ」

「…ん？ なに？」

もの問いたげな泉の声に腕をおろしつつ、かがみが視線を足もとに落とした。

「…なんでわたしってこの扱い？」

砂浜に首まで埋まりつつ、泉は呟いた。ちなみに顔には目隠しが巻かれている。すぐ横にはぱっくりと割られた西瓜が無惨な死骸をさらしている。

それを撲殺してのけた当人のかがみは、片手に持った木刀を肩でかつぎつつ、額の汗をぬぐっているところだった。

「おーうめえなー柊」

「かがみちゃんおっしいー」

ぱちぱちとはやしたてるゆいと日下部の声を尻目にしつつ、泉は哀れっぽく同情を誘うような声をあげた。

「ねー、なんで？ なんでこのあつかい？ ひどすぎないっていうかいじめ？ だしてよーかがみーん。わたしなんにも悪いことしてないし」

「…あんだ、自業自得って言葉の意味、もう一回勉強してきた方がいいわよ」

と、かがみは顔半分に不吉な影を落としつつ、殺気をこめた目でにらんでくるだけだった。

いかん、逆らうとマジ殺されるよこれ、と泉は見えずとも持ち前の直感で判断しつつ、「ですよー」と、明るく返しておいた。空は明るく晴れわたり、（泉の目には何も見えないが）髪の毛越しに直接頭皮を刺激するほどの日光を泉の脳天に投げかけてきている。

「…というかそろそろ限界ばいよ？ 脱水症状とか熱中症って言葉知ってる？ かがみ。てか、なんでわたし、こんな耐熱訓練みたいなこと海まで来てやってんの？」

「そんだけ口が達者ならもうすこし大丈夫でしょ」

ぼんぽんと木刀で肩をたたきながらかがみは言う。

「だいたいそう言うと思ったから、あんだのぶんのジュースさっき買ってきてあげたじゃない。」

「うん…ところでこの状態でプルタブも開けずに頭の後ろの缶ジュース飲む方法って、わたし知らないんだけど…」

「そんなの私だって知らないわよ。それは不可能って言うんだな、とは思っけど」

かがみはあくまでさらりと答えた。その足もとから泉はかがみがいるほうを見上げ、

「かがみー。あーん」

大口開けたアクションつきで言うのをさらりと流して、かがみは言った。

「あーあ。にしても、もう一個終わったか……。ちゃんと黒井先生たちまでまわるかしらねー」

時刻はすでに午後の三時半を回っていたが、依然、黒井たちの姿はない。そのままだは暮れ、夕方も間近になるころになっても、やはり黒井たちはやってはこなかった。すでに浜辺は閑散として、人氣もなくなるころになり、ついに泉達も宿に戻った。このまま待っていててもムダだろう、ということがなんとなく感じられたからだっ

第十六回投稿分

その予想は的中して、後の四人が到着したのは、完全に日も沈みかけて夜になってからのことだった。

「ふわー…」

はてしなくたびれた表情で、つかさが泉達の部屋にやってきたのは、虫の音の響くようになった午後の七時ごろだった。

「おつ。」

「おー。おつかれさーん。なに、どうしたの？」

ちょうど部屋にいた日下部とかがみに聞かれ、つかさは「ふえー……」といいながら、目を棒線にして、ちゃぶ台のそばに座り込んだ。

「もー、大変だったよー……。こっち着くの、十時すぎくらいになるかと思っちゃったあ……」

そうして説明することには、何かと思えば、何のことはなかった。たんに道を間違えたのだそうだ。それも、立てつづけに。

今の今にいたるまで、黒井たち4人の乗る車はこの海岸にたどりつくことなく、千葉県内中をさまよっていたらしい。

「なんか、うすぐらーい森の中の道通ったりい、途中で舗装が切れてたり、フェンスとかゲートが張られてあって、立ち入り禁止区域って書いてあったり…隣の県まで行っちゃったことも一回あったっ

け……」

もはや頭のうえのリボンごとしおれながら、つかさはあうあうと説明した。

「……運転してたのって、黒井先生よね？」

どこことなくおそろおそろといった調子で、かがみは聞いた。話の内容はわかったのだが、正直理解しがたいところがある。なんというかまあ、そんな様子で目を半分皿のようにしていた。

「最初、私が助手席座って地図見てただけとお、それじゃ、ダメそうだからって……ゆきちゃんが途中から代わってナビゲーションしてくれたんだけどね、それでも全然だめ……」

辺りは暗くなるし、お腹は減ってきちゃうし、……ほんと、いつになつたら着くんだろうって思ったよお……」

横の目下部も、おおむねそれと似たような様子で、ようは作戦中や普段の基地内での黒井の様子を見知っているからだっただろう。たしかにおおざっぱなところこそあれ、締めるところはきっちり締めるタチなのが黒井という女性であって、このような、言ってみれば一般の女性らしい地味でうかつな欠点をかかえているとは、まさに意外中の意外だった。

「うーん。これはさすがに計算外だったね……」

部屋のすみで転がされていた泉が、横から言う。

「……あんた知らなかったの？」

「知るわけないじゃん。ていうかそんなこと思いもよらないし。
…うーん。天国と地獄の二者択一と見せかけて、実は地獄まっし
ぐらの一択。問題は人選の段階からしてのものだったとは、それな
んで予想外…」

つかさがその様子を見ながら、

「ねえ。そういえば…こなちゃん、さっきから何してるの？」

あるいは聞きそびれていたのかもしれないが、だいぶ遅れたタイ
ミングで、つかさは泉を指さして言った。

さっきから平然と喋ってはいるものの、その実、泉のちっこい体
はフトンと帯で恵方巻きのように巻かれて転がされていた。んしょ、
んしょ、と芋虫さながらに床をずりずり移動する泉を目で追うつか
さに、かがみは平然と、

「ああ。まあ、なんていうかべつに気にしないでいいわよ」

「え…と」

と、？、？、と迷ったあげく、結局つかさが突っこまないことに
決めたらしいことが、その目からは見てとれた。

天然というかこの娘、ときおりヘタレで本気で薄情なときがある。

ともかく、その日は全員が全員、いろいろな意味で疲れていたの
で、それぞれの部屋に戻ってお開きという流れになるはずだった。
が、自重しない黒井は、どこからか缶ビールを取りだすと、ゆい
を誘って飲み始めた。浜辺の小さな旅館であるから、夜遅くに騒ぐ

場所となればだいたいが各自の泊まっている部屋になる。というわけで、一部屋が丸々、大人げない2人組の手によって占拠された。結果として、自分たちだけ元気な大人二人（ことの元凶である、ちなみに。）に占領された自分たちの部屋から、峰岸とみゆきが合流して、ひとつの部屋で雑魚寝という流れになった。

そうして翌朝が訪れ、予定の一日目があっさりと終了した。

翌日になると、朝早くから総出で起き出し、朝食をとると泉達はさっそく海へ出た。

この日も空は嫌になるほどの快晴で、浜辺に出た面々は、海に入って泳ぎに浮き輪に水のかけあいっこにビーチボールと、さっそくとことんはしゃいで遊び倒した。

砂浜が上がってきてても、寝そべってごろ寝にふたたび西瓜割り、砂遊びに海の家とそれぞれはしゃぎたおすのに余念がない。

うっかり自分の年も忘れたかのようなあそびっぷりで、その日一日中を費やしていった。

休暇の時間が短いことは誰もが知っているし、基地での生活は、日常がこれ任務であるから抑圧や制限も非常に多い。貴重な時間をわざわざムダにするという考えもない、誰しもがそういうきらきらした輝きをはなっており、「若さっていいなあ」と見ている側には、思わずそんな感想を抱かせるようだった。

日も暮れて、あっという間に時間が終わり、閑散としたビーチを後にして、一行は宿に戻った。

夕食を終えて、浴衣に着替えると、今度は浜辺に戻ってきての花火大会である。

晴天の星空に舞う光の花はきれいに光り、しゅう、と空気を焼いてほとばしり、その場にいた全員の笑顔を誘った。

「あははははっ！」

「うわわっ！ こなちゃんあぶなっ！」

「うあちっ、てめえ、泉い！」

「泉さんっ、花火は人に向けては……」

「――うわっ、こっちくんな、バカ！」

「あれー？　なんでみんなにげんのー、キレーっしょー？」

「おーい。誰かバケツに水ー。目えさまさんとあかんぞこいつ」

やがて、1時間ばかりもそうしていると花火の備蓄も尽きて、手元に残るのはミミズ様のアレと線香花火ぐらいになる。

がやがやと騒ぎたてつつ、花火の残骸を片づけて、旅館から借りてきた青バケツを片手に、一行は帰路をたどった。

旅館に帰ると、浜辺の宿にしては珍しく、遊戯スペースがあるのに目をつけて、「卓球やろう、卓球」という声が誰からとなく上がる。

昼間のはしゃぎぶりですれぞれ疲れているだろうに、風呂をすませると、牛乳と団扇を片手に、ほとんどの面子が卓球台の前に集まってきた。風呂に入る順を4人4人で区切ったので、全員が揃うのには少し時間があった。休憩を挟んでようやく顔をあわせ終わると、小卓球大会の始まりである。

最初、トーナメント戦でやるような話の流れになったのが、「それじゃ面白くない」「すぐ終わるじゃん」等の意見によってねじまがり、最終的には六人（年長二人は不参加）での総当たり戦が行われることに決まった。

第十七回投稿分

「高良主任？」

まだ明かりのもれている部屋を覗くと、見覚えのある姿を見かけ、柊みきは声をかけた。

「―ああ、柊博士？ 遅くまでご苦労様」

研究室主任の高良ゆかりは、返事を返すと重たげに体を伸ばした。ぼんやりと光るディスプレイの画像を見ると、おそらくはまた数時間以上も座りっぱなしだったことがうかがえる。

「まだ残ってらしたんですか？ ああ、よろしければコーヒーでもいかがですか？」

「あら。じゃあ、お願いするわ」

そう返して、ゆかりはふあ、と欠伸を漏らした。

「なかなかひと心地つかなくてね。仕事がかどるのも考え物だわ。時間はほっといても過ぎてくっっていくのに、やることだけはどんどん増えていくんだからね」

「根をつめすぎると毒になるのでは？ もう若くはないんですから」

「言ってくれるわねえ。みきさんだって同じような年じゃない」

くすくすと笑って返すみきに、ゆかりは笑みを返した。

いつも閉じられたように細い目が、笑うとほとんど一本の毛糸のようになる。

ゆかりは伸ばしていた指先をキーボードに戻すと、するすると画面をスクロールさせた。

何の気なしに向けているような瞳に、膨大な数のデータが映って照り返されていく。

「―お体の具合でも？」

「え？ どうして？」

「顔色が優れないように見えたので。違ってたらすみません」

「べつに謝ることないわよ。正解だから。―でも参ったわねえ。人にわかるほど、深刻な顔してるかしら？ 私」

白磁のような肌をなでてみせるゆかりに、みきは困ったような曖昧な笑みを浮かべた。

「どうでしょうね。私にはわかりかねますけど…なにか問題でも？」

首をかしげるみきに、ゆかりは椅子を鳴らし、いつもどおりの気楽な笑顔を向けた。

「何かあったと思う？」

「そうですね…。」と、みきはおっとりとした仕草で少し考えこむそぶりを見せ、

「…あまり考えたくない可能性が多いですから、口にしたいくはない

ですけど」

「ええ、どうぞ？」

頬杖をついてうながすゆかりに、みきは苦笑を浮かべつつ、穏やかな口調で答えた。

「なにかの事由で、また『完成』時期が早まった、ということではないでしょうか？ 軍部の方で意見の変動が起きたという話は伝わっていませんが…」

「たしかに、それはあまり考えたくないわねえ」

ゆかりの思わせぶりな返答のしかたで、みきにはそれが当たりりだと伝わったようだった。

「…中央総部に、なにか？」

「今日、軍部の元帥閣下直々にね。今回の開戦をこり押しすることが決定したそうよ。正式な命令として総部にも伝えられたみたい」

「それじゃあ—」

「武蔵野侵攻はめでたく本決まりってところかしら。もちろんもう期限どころの話じゃないのは言うまでもないわね。なにしろ、公式にはもう「かぐつち」は『完成』しているんだからね」

他人事のように気楽そうな表情で言うが、この女性がこっぴどく笑みを崩さないときには逆に事態を重く見ている、ということのみきは知っていた。

つとめて平静を保とうとしているような口調で、みきは尋ねた。

「…期日は、いつに？」

「三週間後には本作戦の決行だそうよ。いちおう、問題の解明は可能だつて答えておいたけど。まあ、実際私がちよつと本気になればそのくらい可能だろうしねえ」

「三週間、ですか…」

「そのくらいだとはぼ調整に使うのが精一杯になるでしょうね。どうやら休養に充てる時間どころか、下手すると眠る時間もうくに取れないわねえ、これじゃ。―みきさんにも、また苦勞かけちゃうわねえ」

「いえ、…事が国事ですから。苦には思いません」

しつとりとしたほほ笑みを浮かべて、みきは続けて言った。

「それに、主任にそれを言われては立場がありませんよ。それを言われてるご本人が一番働いていらっしやるんですから」

「あら、私はべつにいいのよお。だつて天才だもの？」

頬に手をあてて、冗談のような口調で言うが、ゆかりはいつもこのセリフを本気でしか言わない。

慣れているのでみきもただ黙つて笑い返した。

とはいえ、その言葉を否定できる材料というのもなく、おそらくこの高良ゆかりという女性以外に天才を豪語できる人間も希だろう。現在はこの「かぐづち」の開発を主体とする「あまわ」計画にか

かりきりになっていたが、そうでなければ、この女性の頭脳ほど人類の科学水準の発展に貢献するものはないと言われている。

「は」とその人類の誇る頭脳の権威は、短くため息を吐くと、

「…とはいえ、これだけ悪条件が重なると弱音のひとつも吐きたくなるわねえ。まったく。総部のミエの張りすぎにも困ったものだわ」

「どうしてそこまで急ぐんでしょう」

「それほど戦況がにっちもさっちもいなくなってるってことでしようね。まあ、総部の意思としてははいとこ「かぐづち」の有用性を示したかったんじゃないかしら」

とん、とん、とゆっくり細い指をふりながら、ゆかりは言った。

「もともとそのために手間をかけてまで軍部に取り入っていたわけだし。」

今度のことは、きつとそれが裏目に出たこともあるんでしょうね。軍部の強硬派は、基本的に早急なOG弾の投入を推奨してるんだし。そういう人間を納得させるためには「あまわ」計画擁護の人間は、より性急に、より大きな成果を上げざるを得ないわけ」

面白くもなさそうな顔でゆかりは言い、紙コップに口をつけた。

「長期的な戦略なんかよりも、いま目の前にある驚異を取り除きたいっていうのが本音だろうから。まあ、あれだけ現実の脅威を見せつけられつづけてれば、無理もないことだけだね」

みきは黙って聞いていたが、ふいにふっと口元を緩めた。眉をか

げらせて言う。

「…今の段階で、かぐづちは十分な性能が発揮できるでしょうか」

「さあねえ。それは私たちが一番よくわかっていることじゃない？」

ゆかりはあくまで軽い口調で答えた。無理をしているのかどうかは、いまいち推し量れないほど自然な笑みを見せる。

「あとは神様にでもお祈りしてみるしかないわね。——そういえば、柊博士は家柄が神道だったかしら？」

「ええ。家は主人の方ですが…」

「なにかいいまじないでもないものかしら。願い事をかなえてくれそうな神様の話とかね」

「…高良主任は、神道にはあまりお詳しくないんですか？」

みきの口調になにか感じるものがあつたのか、ゆかりはきょとんとした顔を返した。

「あら、…なにか違ってた？」

「ええ、まあ…。でも、違いと言うほどのことではないので。」

みきは小首をかしげて笑い返すと、説明を始めた。

「基本的に、神々というのは人々の願いや祈りを叶える、といったことはないんです。そういった概念が生まれたのは、民間や土着の

信仰が織り交ぜられた結果、ということでしょう」

「ふうん？」と、関心ありげに聞いてくるが、内心はそれほどでもないのだろう。ただ、どんな天才であっても、退屈には勝てないということではあるのだろう。

みきは少しばかりゆかりとの世間話に付き合うことにした。

残る時間は少ないが、こういう無駄な時間も、ときには必要になってしまうのだから仕方がない。

第十八回投稿分

狭い遊戯スペースの中が白球の飛び交う激戦地となつて、40分ぐらい後、勝負は大詰めを迎えていた。

荒い息をつき、卓球台に向かつているのは二人、高良みゆきと、そしてもう一人は柊かがみだった。

はあ、はあ、と肩で息をしつつ、互いをにらみ合う顔は真剣そのもの。

「……」 「……」

心なしか、殺気のようなものがほとばしっているようにも見える。小さな白球を乗せたみゆきの手がぶれ、「ふっ！」という呼気とともに鋭いサーブが走る。

かこ！ とそれを打ち返すかがみは、「――！」きゅ！ と裸足のつま先を捻り、すでに次の返球を迎え撃つ体勢になっている。

「――！」

強力なはずのサーブが打ち返されてライン際を弾いても、みゆきは動じることなく、足を踏みこみ、伸ばした腕にひねりを加え、それを打ち返す。

絶妙な弧を描いて奔る返球をかがみが読んでいたかのような速度で打ち、また二度、三度とラリーが続く。先ほどからこの繰り返しだった。

スコアは一点差でかがみがリードしているが、それもいつ覆るか分からない。なにしろさつきからずっと一点差のまま、シーソーゲームが続けているのだ。

「―あ！」

と、小さく声をあげたのは、観戦しているつかさである。

二人の苛烈なデッドヒートは、見るものに圧迫感すら与え、簡単につばを飲みこむのもままならなかった。かがみの返球がみゆきのラケットをすり抜け、床を叩いたことに声を発したのだろう。審判を務めるゆいの手がばっ！と上がる。

「カウント、サーブ終！」

ほおお…と見守る一同に思わず感嘆のざわめきが走る。かがみとみゆきは言葉さえかわすことなく、また淡々と配置についた。コンセントレーションの浮いた表情を、浴衣が激しく損なっていたが。

「すごい…」

緊迫感の張りついた声で峰岸がこぼす。

「柊ちゃんと高良ちゃん、どっちも一步も譲らないわ…」

思わず、脇で立っていたつかさからも当惑めいた声が上がる。

「…お姉ちゃんもゆきちゃんも、すごい…」

その横にいた日下部も、眉をとがらせて、ひとり言のように言う。

「なんて熱い勝負なんだ…なんていうか――ありえねー」

その横でばし、じー、ばし、とシャッターを切りながら、泉も息を

呑んだ面持ちで告げる。

「たしかに… なんといいえない乳…」

一人だけデジカメを片手に咥いその頭に、ご、と黒井の拳が落ちる。

「どこ見とんのや、お前は」

しかし泉は動じず、マイペースに撮影を続けた。二人には悪いが、こういうのはあとでいろいろと有効価値があるのだ。この機をのぐすにはいかない。

リーグ戦も終盤を迎え、これが事実上の決勝戦だった。当初、スタミナと瞬発力ではアドバンテージのある泉と日下部が有力株にも思われたが、一試合の時間が限られている中では、それもあまり有利には働かなかった。

そこへ輪をかけて、完璧超人のみゆきと万能さには定評のあるかがみが張り合う相手である。泉と日下部はそれぞれがあえなく二敗を喫し、あつさりと優勝候補から転げおちた。

「なつ、なぜ…」

「ち、ちくつしょ。柊への愛のくちづけがあゝ」

「どうもすみません…」

とみゆきは申し訳なさそうに言ったが、かがみは逆に冷たく眺めつつ、

「いや。ていうか自業自得だろ。リーグ戦でペース配分考えないで

燃えつきててどうすんのよ。…しかもまたなんか勝手にかけてるし」

そういうことで、その前の試合で、勝手に張り合って燃えつきて
る馬鹿二人を捨て置き、かがみとみゆきは決勝戦に望んだ。

「おねーちゃん、がんばってー」

「高良ちゃん、ファイトー」

すでに早々と優勝争いからは蚊帳の外の峰岸とつかさの声援をあ
びつつも、試合が始まる前までのかがみは、それほど乗り気ではな
かったと言える。

「みゆきと私が…ま、あんまり面白くはなりそうにないけど…」

何気なく呟いたのはあながち慢心でもなく、事実を言っただけだ
った。ここまでの試合の経過を見ると、実力が上なのは数分の差で
かがみのほうだった。

皆には内緒だったが、実はひそかに初級程度の経験者なのである。
たしかに身体能力ではみゆきには及ばないところがあるが、実戦
経験の差では分があるので、他の面子からくらべると有利をとって
いた。

そのための呟きだったのだが、それは聞こえていたらしい。

みゆきから返ってきたのは意外な一言だった。

「あら…それはどうでしょうか？」

「…へ？」

かがみはなんとなく聞きかえしたが、その言葉の意味を、試合開始からわずか数秒で思い知ることになった。

「はい。それではこれより試合開始します。サーブ権はみゆきちゃんからでいいねー」

締まりのないゆいの声がそう告げ、「では、始め！」と言った瞬間、かがみは構え、みゆきのサーブを待ち受ける体勢になった。

すでにみゆきのサーブは威力を計っている。十分に反応できる速度だ。みゆきの手のひらが消え、ふっ！とその上に乗った白球が弾かれる。

そして鋭い速度で奔った白球は身構えたかがみの横を抜き、放物線をえがいて床を叩いた。かがみは反応すら出来ずに、一瞬、呆然として床を顧み、立ちつくしていた。

「ーへ？」

「カウント、1 - 0。サーブ高良！」

快活なゆいの声がやけに非情に響いて聞こえ、かがみは理解の追いつかない状況にぼんやりと思考を巡らせた。速い。明らかに速すぎる。

今のは、今までのみゆきの球足から見て、間違いなくありえない速度と球筋だった。いったいどうなっているのだろっ、夢でも見ているのか？ と一瞬かがみは本気で思った。

「あらーかがみさん、どうされました？」

につこりと笑ってみゆきは言い、その言葉の端になにか含むものを感じて、かがみは聞きかえした。

「ええと、みゆき…？」

「サーブスエース、って言うんですよね。こういうの。では、もう一度私のサーブからですね」

わざわざ繰り返して言うと、みゆきはゆいから受け取った球を手に加え、また同じように鋭いサーブを放った。

結果はまた同じだった。かがみは反応こそしたものの、打ち返すまでには至らなかった。床をはね返った小さな白球を見つつ、まだ驚きのやまないかがみの顔を見ながら、みゆきはふ、とまっげの長い目を細め、余裕を持って、小さい息までついた。

「―ひよっとして、速すぎる、などとお考えですか？」

くすりと笑い、言ったみゆきを見て、なにかいつもの天然ぶりはまるで違う、―そう、言うなれば黒さだろうか。そう言うものを見てとって、かがみは妙にいらつと来るものを感じとっていた。

（…この子…）

性格的なものだろうか。もちろんそんなふうには「挑発」されて大人しくしてられるほど、かがみは穏やかな気性をしていない。目のはしに力をこめると、みゆきを見返した。ただ感情のないように言っただけのける。

「…まさか、わざと手加減してた、って事かしら？」

含みを持たせたかがみの口調に、みゆきはふ、と笑い返した。

「まあ、さすがはかがみさんですね。すぐに全部分かっていただけ
たようで、何よりです」

「…ねえ、こなちゃん。ゆきちゃんとお姉ちゃん、何はなしてるの
かな？」

空気を読まないつかさがこそつと脇の泉に言った。が、泉は「う
ーん」と首をかしげたただだった。もともと頭のなかが常人より適
当なので、無理もないといえない。

その横で、日下部がふと思いついたように言う。

「ひょっとして、高良のやつ…」

神妙に眉をひそめた日下部の横から、峰岸が口を開く。

「…ひょっとしたら、高良ちゃん、いままで手加減しながら試合し
てたって事かしら。わざと本当の実力を隠してたって事じゃないか
な」

完全にセリフを取られた日下部の横で、

「…え？ それってどういうこと？」

とつかさがいぶかしげに聞きかえす。

「たぶん、最後の最後に勝つために、わざと力を温存してたのよ。手の内を見せないように、サーブやスマッシュの時の力の入れ方を調節したりして…」

「そんな…そんなことって、でも、できるの？」

つかさが若干たじろいだ表情で言う。

「並みの事じゃないけど…高良ちゃんになら、あるいは…」

峰岸は顎に手を添え、じっと床を見すえて厳しい表情で告げた。

「峰岸さんて意外と卓球のことくわしいんだねえ」

へー、とあまり空気を読まない泉は、横から呑気な声を挟んだ。
峰岸は困ったような照れ笑いをし、

「実は昔なんだけど、ちょっとやってたの。下手の横好きで、腕の方とかは全然だったんだけど…」

「まあ、あやのはそういうのとか昔から不器用だもんな。」

と、さらに横から日下部が気楽に口を挟んだ。

「ちょっと運動神経のいい奴とか相手だと、わたしとか泉みたいにガチの初心者でも負けちまう感じ？ ま、あんま気にすんなくて。人には向き不向きとかあるんだしさ。な、あやの」

「…そういえば、さっきのみさちゃんのサーブ、おでこに当たって痛かったな」

ぼつり、と峰岸は日下部のほうを見ず、完全に笑顔のままで呟いた。びき、とそういう音を立てて、日下部が笑顔のまま固まるのが聞こえた気がした。さ、と目に見えてその顔が青ざめる。

「みさちゃんてば、私の実力知ってるのに、さっきは全然手加減とかしてくれなかったよね。ひょっとして、ちょっと楽しんでたのかな？ …かな？」

ふふ、と笑って峰岸は言うが、その笑顔は能面のごとく完全な笑顔だった。むしろ不自然なほどに。

「い、いや…あやの…？　そういうのは、ほら…勝負だしさ…？」

「うん。わかってるよ？　勝負だもんね？　みさちゃん。どうしたの？　そんなに青い顔して？　私、そんなことで怒ってなんかいいよ？　うん、もう、全然ね？」

「う…あ、う……」

峰岸はニコニコと笑っているだけだったが、向かいあっている日下部は滂沱と汗し、顔をひきつらせて見る間に弱っていく。まるでなにかを峰岸に吸収されているようだったが、はためから見てもそれがなんだかは分からない。分からないので、他の面子は全てを見てみないふりをすることに決めた。

かがみは目の前の背の高い友人を、じっとりとした眼差しで見返した。

「みゆき」

「みさちゃん、あとでちよっとお話ししようね?」「ふひいっ…」
というほほえましいやり取りを右から左に聞きながしつつ、ぽつり
と言う。

「わたしがそう言う真似されるの嫌いだって事、あんた、よく分か
ってるはずよね?」

「よく分かっているなどというのはおこがましいと思いますが、人
並みにはそうですね」

斬りつけるようなかがみの言葉をさらりと流すように、みゆきは
言った。

「なるほど…わかってるわけね。てっきり、なんにも知らないでや
ってるのかと思ったわ」

やや切れ長ぎみの目を細め、苛立ちを示しつつ、かがみは言った。

「ええ…そうですね。かがみさんのよくお知りになっている私なら
そういうこともやりかねないでしょうし…」

かるく皮肉めいた言葉にも、みゆきは余裕の笑みを返す。

両者は表情こそまだ穏やかなほうだったが、徐々に尋常でなさげ
な雰囲気とその顔の奥からじつくりとにじみ出ていく…なにか、
すぐくまずい雰囲気だった。あきらかに卓球台以外のところで、な
にかうつ積したものが、はき出されているような。

「なに？ なにか私に言いたいことでもあるわけ？」

「言いたいこと、と言われますと、心当たりがないでもないですが……」

「ならはつきりと言いなさい。私がそういうの嫌いだって言うことも分かってるでしょ？」

「嫌い、と言われますと……さて、それは、どうでしょうね？」

みゆきはわざとらしく小首をかしげて言った。

「逆に、むしろそういったことは言わないほうが、かがみさんにとってはお気に召すのかと、私はてつきりそのように思っていたんですけど」

ぴくり、とかがみの表情が動いたのを、泉やつかさは見たときに「あ」と思ったことだろう。

見なれないと違いが分からないが、かがみの表情は怒ったときと本気で怒っているときとは、全然違う。今のは間違いなく、その本気で怒っているときの顔だった。

心の底から怒りを感じている。相手をゆるさんと少しでも思ったときや、制御しきる自信のないほどに感情がわき上がったとき、かがみの顔は逆に血の気が引いて、硬くこわばっていくほうなのだ。

「……意味分らないわね。遠回しすぎるんじゃないの？ どういう意味だか、もっと伝わりやすいように言っただけいいわ」

「さて……かがみさんには十分理解できるように言っただけなんです
が。」

みゆきはあくまで穏やかに言った。なぜだかすこし余裕が感じられないようにも思われるのは、気のせいなのだろうか。

なににせよ、次に言った言葉は致命的だった。

「『かがみさんには、相手に言うべきことも言わせず、適度に正論でねじ伏せて満足する癖があるから言いたいことを言ってもムダだろう』と申し上げました。韜晦趣味でもおありなんですか？ そういったことは初耳ですけど…」

かがみは大げさなりアクションを見せずに、一瞬だけ押し黙った。ぎゅ、と唇が引き結ばれるのが目に見えて分かる。なにか言おうとしながら、結局何も言わないような、そんな様子を見せながら、「あうあう…」とうつろたえて様子を見守るつかさたちを横目に、思いきり手のひらを叩きつけると、かがみは卓球台をはたいた。

「ああ、そう。」

と言う。

「そういうことをいうわけね。よくわかったわ。―みゆき。あんたのことだから、自分でなに言ったのか分からないって事はないと思うけど」

みゆきは答えず、笑ったままわずかに首を傾けた。かがみはびつとその顔目がけてラケットを指した。

「本っ気でやってやるわよ。それでいいんでしょ」

第十九回投稿分

「ん……」

軽くうめいて、目を覚ます。

うつすらと開いた目から、薄く明るい部屋の様子が映し出されてくる。

「……」

泉はもそもそと起き出した。

寢床にしていた布団には、青い月明かりが差している。開いた窓を通して虫の音が響くのが聞こえていた。

軽くうめいて、生暖かくぬくもった床のうえから、立ち上がる。頭が酩酊でくらくらしている。

酔いが抜けきっていないのだろう。ただ幸いにも不快さはほとんどなかった。意識と無意識のあいだ、夢うつつのあたりをさまよっている感じだろうか。

人の声も物音も絶えた部屋は、嘘のように静まりかえっている。腕や足が好き勝手に投げ出されて、昨日以上に混沌とした床の上を危なっかしい足どりでまたいでいく。

みんな一様にぐったりと寝込んでおり、実際ちよつと踏んだとしても誰一人としてぴくりとも動きだしそうにない。

泉はそろそろとふすまを開いて、ひっそりと便所に向かった。

さっきまでの狂乱が夢であつたかのようだ。飲みだしてから、騒ぎ、歌い、あげくに転げ回り、誰一人として正気でなかった。制止をかけるものもなく、実際さっきの様子をなんかの記録映像として残されていたら、ほぼ全員が恥じらって目をそらしただろう。

この「新千葉」で、旅館を経営している人といったら、大半が泉

たちより一回りか二回りは上の世代になる。さぞかし若い連中のバカ騒ぎには眉がひそまっていたことだろうと思う。泉は心の中で両手を合わせて詫びた。

きしきしとなる床に、もれてくる部屋の明かりはない。ちっ、こっ、ちっ、こっ、と今時秒針の音が聞こえる壁時計が遊戲室のほうで鳴っていた。ちよろちよると遠くで音のもれてくる便器に用を足して、泉はそろそろと来た道を引き返した。

部屋に戻ってくると、寢床に着こうとして、ふと窓辺に人影があるのに気づいた。

「…みゆきさん？」

「…ああ、泉さん」

窓の月明かりを浴びながら、みゆきは少しおさえた調子の返事を返した。床まで届くような長い髪が、不思議な輝きとつやを帯びて、淡く光っているように見える。

「…もしかして、起こしちゃった？」

「…いえ…」

みゆきはふんわりと笑い、ひそめた声を返してきた。

「…実をいうと、少し前から起きていまして。ちょうどさっき、布団から出たところだったんです」

すらりときれいに伸びた足をそろえ、そう言ってみゆきは窓の外を見た。窓のそばにもたれかかり、楽な姿勢で座っている姿は、なにかのできすぎた写真のようだった。

「ふうん…」と、泉は床についてごろりと寝ころびながら、ちらりとその姿を見上げた。

自分と同年である、というのはわかってはいるが、どこか釈然とはしなかった。夢心地のようでありながら物憂げでもある。

自分が同じことやっただって、まずこうはならないだろう。

情緒とか風情とか、そういう言葉が泉の頭でも思い浮かぶようだった。

「…眠れないの？」

「え？」と、ちらりと眼鏡のない視線を返しながら、みゆきは少しはにかむように答えた。

「ええ…お酒のせいかもしれませんね。あまり慣れていないものでしばらくこうしていますから、どうぞお構いなく」

やんわりと気を遣った声が、いつものみゆきらしかった。

「うん…」と、短く答えると、泉はまた天井を見て黙りこんだ。とはいえ、すでに目は冴えていて眠れそうにない。

「…みゆきさんさ」

ぼつりと呟くように切り出すと、「え？」という、いつもどおりの返答が返ってくる。みゆきにはこうして人の話は聞いているけれど、そうしながらにかほかのことを考えてるような、そういう妙なところがあると泉は思った。

「…さつき、すごかったよね。みゆきさん。かがみとの試合さ。どっちも惜しかったけど」

「ああ…、…ええ。少々、お恥ずかしいところをお見せしましたけれど…」

頬に手を当てて微笑みながら、みゆきは言った。

結局、ついさきほどの試合、決勝を制したのは、ほんのわずかの差でかがみだった。最後の最後まで二人は競り合いを続けたあげく、マッチポイントの取り合いを決したのは、なんのことはなく、みゆきの他愛のないミスだった。

決着となったラリーの最中、あと一步で及ぼう、というところだったが、みゆきのラケットが突如としてすっぱぬけ、そばで見っていた峰岸やつかさらの頭のうえを派手にはね回ったのだ。

顔をひきつらせて硬直した面々の前で、みゆきは恥じらいつつ頭を下げる―ようなことはせず、かがみを見すえて、残念そうに笑った。

「手が…滑ってしまいました。汗で…」

汗で光る顔にはすがすがしい悔しさが滲んでいた。かがみがほつとした顔で見返す横で、ずっと間を置いて、ゆいの手が上がり、かがみを差した。

「カウント22-21、―勝者、柊！」

「…でも、みゆきさんらしいっちゃ、らしかったけどね。最後の最後でちよつとしまらないところとか」

なにげに無神経な泉の台詞にも、みゆきは目を細めた顔で笑って

返すだけだった。いつもと変わらないみゆきの仕草だったが、泉は少し違和感のある感触を味わっていた。

みゆきから目をそらして天井を仰ぎ、ふと思いついたように聞いてみる。

「でも…みゆきさんさ、さっきちょっとおかしかったよね？」

「はい？」

急な言葉に、みゆきのほうは少し意表を突かれたように見えた。本心からのものかどうかは知らない。

ただ、みゆきの反応は見ていて分かりやすいのだが、それが逆に、ふと微妙な予感を抱かせることがあった。

「…うん、なんかさ。ちょっと変な感じっていうか。

いつものみゆきさんらしくないっていうか、なんかさー。ほら、こう言っちゃアレだけでも。ヨユーっぽくないっていうかさ。いつもはあんなこと言わないんじゃないかなーっていう…」

「そう…でしたか？」

きよとん、というか、そういうなんとも曖昧な表情で呟く。その顔を逆さに覗き込むような感じで泉は続けて聞いた。

「ていうか、自分で気づいてなかった？ ひょっとして」

みゆきはすこし考えこむような素振りで、泉の顔の辺りをさまよったあと、ふっと口元にすこし寂しげに見える笑みを浮かべた。

「いえ…そうですね。泉さんにお隠ししても、仕方がないですよ

…」

やや後悔するような口調でみゆきは言った。

「ええ、正直に言えば、あれはわざとでした。かがみさんを挑発するような発言をしたのも、そのまえにわざとそうするような行動を取っていたのも、全部最初から思っていたとおりのことです。…」

みゆきの声の調子が少し変わったことに気づいていたが、泉は黙って聞いていた。

「かがみさんに本気になっていただきたかったので。

…ああいう方ですから、そういうことを直接に言っても、おそろくのりきれないで実際に本気を出してはいただけないと思いましたので…」

「…それであんな言い方したの？」

「少々言いすぎた、とは思いました。私の本音に近いことでしたし…許してはいただけないかもしれませんがね。」

「うん…」と泉は曖昧に頷きながら、そんなことはないと思う、とも思っていた。試合のあと、かがみはああしてみゆきの手を握っていた。もうとがめるつもりなんてないのだろう。

決勝を制した後、かがみはすぐにみゆきに手を差し出していた。みゆきも自然にそれに応じて、かがみの手を握りかえしていた。

「私の勝ちよね。文句ないでしょ？」

「ええ。…悔しいですけど、完敗です。」

そう言って笑う。みゆきのそういう笑顔を、泉は初めて見る気がしていた。

ついでにそのあとで、みゆきの顔がわずかにしかめられたのも泉は見ていた。そのときはなんのことだか分からなかったが、あとで考えてみると、どうもかがみの手がぎつと強くみゆきの手を握ったらしかった。

ほんの一瞬のことで、かがみは手を離したが、にこりともせず、だが冗談めかして言った。

「さっきのお返しよ」

その件はそれで終わりになったのだと思う。

「…かがみさんは、泉さんたちの前では、私と話するときより自然に振る舞っていると思います。」

とみゆきは言った。

「それが寂しいと思うのは、私のわがままなんでしょうね。わたしはわたしで、泉さんたちは泉さんたちであることに、なにも不自然なことはないんですから」

みゆきは訥々と語った。語りながら、どこか他人事のような目をしているようにも思えた。

「…ただ、最近、私も思うところがありました。そのせいなんだろうと思います。こんなことになったのも、たぶんですけど」

途中から窓の外を見て、みゆきの表情は泉から見えなくなった。泉は死角になって隠れるその顔を、じっと見つめながら、ふと自然に口から言葉がのぼるのに気づいていた。

「みゆきさんさ。転属するって話…」

「ええ…」と、答えながら、みゆきは指を顔に押しあてるような仕草をした。目のはしをぬぐったのだということに、泉はすぐに気がついてしたが、じつとその様子を黙って見ていた。

「九月付で、熊本基地の方に…今月の末には辞令が降りていると思います」

泉はあまり驚かずに聞いていた。

実をいうと、噂には上っていたので、すでに耳にはしていたのだ。ただ、みゆきの口から聞いたのはこれが初めてで、正確な時期を知ったのもこれが初めてだった。

泉は天井に目を戻して、ぽつり、と短く息をついた。

「今月かあ。…早いね」

みゆきは何も言わなかった。窓の外の方を見ているように、目を夜の空にむけている。

泉も同じように、黙っていた。言うべきことが思い浮かばなかったわけではないが、どれもなにか白々しい。そう思えてきて、口に出ることが出来ないでいた。

「…今まで言わなかったこと、怒られるでしょうか。」

泉は呟いたみゆきのほうを見上げた。みゆきのうつむいた横顔が

目にうつる。逆さまに見えた視線は、こちらを向いていなかった。泉はしばしの間、その姿勢でみゆきを見ていた。

誰が、と言ったわけではないが、泉はなんとなくその意味をくみとっていた。

みゆきの言わんとしていることは伝わりにくかったが、たぶん、間が持たないので、ふと口にしただけでも思った。そんなに深い意味はない。…意味は、これから返す言葉のほうにあるんだろう、とも思う。

「みゆきさんさ。向こうに行ったら、どんなこと任せられるの？」

唐突に聞くと、案の定みゆきは「え？」と、また素に近い反応を返してきた。小さく目を瞬き、ちよつとの間を置いて口を開く。

「ああ…そうですね。」

作戦仕官候補ということなので…まずは基地仕官の補佐として、いろいろと勉強することになると思います。先日、その上司になる方との面談もすませまして…桜庭中佐、という方ですね。熊本の副司令をつとめていらっしゃる方です」

「うわ、副司令って…すごいね。さすがはみゆきさん…」

「補佐ですから。なにかの権限があるわけではありませんし、正式な意味での補佐を務められる方は、当然ほかにいらっしゃいますし。それに今は、人材確保の解消が一番の急務ですので…」

なにかと謙遜してみせるみゆきに、泉はそれを聞かないように言った。

「それでも十分すごいよ。…それってみゆきさんの実力とかが見込

まれてて、そこに必要とされてるって事じゃん。それって自慢して
もいいことだよ」

「そう…でしょうか」

みゆきは困ったように目をふせがちにした。一瞬どこを見たもの
かと迷ったように、その視線が揺れる。

泉は気にせず、その顔だけをまっすぐに見つめて言った。

「そうだよ。私もさ。そういうのって嬉しいと思うよ。友達だから。
みゆきさんがそうやって、誰かの役に立って、必要とされてるのを
見てるとすごく嬉しい」

泉は笑ってみゆきを見つめた。みゆきはどうしたらいいのかわか
らないような顔で、困ったように、戸惑ったような顔のままで泉を
見ている。

「だからさ、そんな風に、なんかすまなそうな顔なんかしないでさ。
もっと胸張ってよ。みゆきさんは私たちの中でも、とっても立派で、
すごくて、よくできる自慢の友達なんだからさ」

みゆきの人より大きな目を見つめて、泉は言った。

「泉さん…それは…」

「おめでとぅって言うていいよね。…そう言わせてよ。みゆきさん」

みゆきがなにか言いかけるのをさえぎって、泉は言う。

「みゆきさんがそんな顔してたら、言いにくいよ。…つかさやかが

みも、きつとそう思うと思う。きつとみんな、みゆきさんのこと、お祝いして送り出したいと思ってるはずだからさ。…いや。たぶん、だけど」

泉は少し語気を弱めて言った。自分の言ったことがだんだんと照れくさくなってくる。ひよっとするとともに、だいぶえらそんなことを言ってしまった。

人のことをどうこう言う前に、そもそも泉は泉自身のことがよくできていない。にもかかわらず、ずいぶんと上から目線のようなことを言ってしまった。

感情にまかせて、素直なありのままの気持ちを言ったのだが、ともすれば、いろいろとバカにしたようにも取られかねない言葉だったと思う。

さっきまでの浮ついた気分が急に覚めていくのを感じて、泉はそろそろ気まずげに、みゆきの顔をうかがった。

「…ありがとうございます。泉さん」

みゆきは気にした様子もなく、微笑んで言った。

ほんとに泉の胸中や、その口にした矛盾する言葉や、その何もかもに気づいていなかったのかは、わからないが。

第二十回投稿分

明けて、翌朝。

目を覚ますと、泉たち3人は、ほかの面々よりも、一足早く宿を出た。

三人、というのは、日下部、かがみ、そして泉の三人である。ほかの面々はどうしていたかというと、それを説明するには、まず、前夜のらんちき騒ぎに、すこし話を戻さなければならぬ。

「カンパニー!!」

という、すべてはこの忌まわしい一言から始まった。

「んぐんぐんぐ、ぷっはー!」

さっそく景気よく、黒井が一杯目を空け、ほかの大勢の面々は、ジューズを手にはしていた。

思えば、ここまではよかったのだろう。

「くっはー、一汗掻いたあとのビールはたまらんなあ。最高のゼータクやでホンマ」

「先生、べつに何もしてないじゃないですか」

「こまいこと言っな。ほれ、それより泉。年長者のコップがあいとなら何かすることがあるやろーが」

「ええー……」

と、嫌そうに顔をしかめる泉の横から、ビール瓶を手にしたみゆきが進み出る。

「先生。お酌しましょうか？」

「お。さすが高良は気が利くなあ。ほーれ泉。お前もこういつとこ見習ったらなあかんで。おう、ねえちゃんきれーやなあ、トシいくつ？」

「あの…17ですけど…」

「んー。さあすがみゆきさん。ボケにボケで返すか」

「いや。べつにボケにもなつてないけどな…」

「もー。かがみい。ダメだよ年長者の理不尽なボケに突っこむようじゃ。この先出世できないね」

「あんたにはそれ言われたかないわ」

言うかがみの横で、泉は、ジュースを飲み干した紙コップに、ビールを注ぎはじめた。

「ちよつ、何やってんのよ！」

あまりに自然な動作だったので、かがみは突っこむのが遅れた。

「あ。ちよつと。揺らさないでよ。こぼれるじゃん」

「こぼれるじゃんじゃないわよ！ 素知らぬ顔してなにやってんの、

「この未成年！」

「えー？ なにかたい事いつてんの？ あ、かがみってもしかして飲んだことないの？」

「あるわけないでしょ」

「うつそーん」

やたらむかつく顔で言われ、かがみは青筋を立てた。

「だいたい軍紀違反でしょ？ 未成年者の飲酒は身体の生育に悪影響をおよぼすからってね——」

「うつわー。かがみ、それ本気？ 頭ガツチガチ。そんなんでよく疲れないね」

「あんたの頭が疲れなさすぎるのよ！ スポンジでできてんじやないんだから、もうちょっとくらい硬くなりなさいよ」

「うん。もう。脳細胞、戦術機の装甲並みなんだから。そんなだから寄りつく男もいないんだよね」

「……なにか言ったか」

「べつつにい？」

泉の言葉に神経を逆なでされ、かがみはさらに意固地になった。

「あんたに言われたかないわ！ とにかく、今すぐ大人しくそれを

渡しなさい。いくら任務中じゃないからって気のゆるみすぎ！」

「えー。いいじゃん。かがみも一緒に飲もうよー。お酒は大勢で飲むのが楽しいんだってばー」

「だから、さりげなく飲むなっつてんだろ！」

「まーまーそうカタイこというなよー柊い。いっしょにたのしもうぜー」

「ってうつわ、酒くっさ！　ちょ、あんたまでなにやってんのよ！？」

急に後ろからぐにやぐにやとからみついた日下部に酒くさい息を吐かれ、かがみは、いっそう騒ぎたてる。

「まあまあ柊ちゃん。今日は無礼講なんだし。たまにはいいじゃないの」

「ってあんたもか！　峰岸！　あんたら二人とも何やってんのよ！？」

「もうう。いいじゃんかがみーい。そんな意地はんないでさー。ほんとは飲んでみたいくせにーい」

「なにげなく本心わかってるような言い方すんな！　飲みたいわけないでしょ！？」

「またまたあ。素直じゃないんだからあ。そういうとこ、かわいいー」

「だー！ 飲まないつつってんでしょ！ ひつついてくんな！ 暑
つくるしいつつのー！」

もがくかがみの横に、す、とそのときみゆきがやってきた。

「まあまあ、かがみさん。いいじゃありませんか。一口くらい。」

「みゆき…あんたまで…あのねえ」

「こついう経験も必要だと思いますよ。かがみさんのおっしゃること
ともわかりますけど。ーあ。それじゃあ、こついうのはどうでしょ
う。これは私からの戦勝祝い、ということ。どうですか？ 一口
だけでも飲んでいただけませんか？」

みゆきの言い分に、ぐ、とかがみはつまった様子を見せた。

「…あんたもいつになく言うわね…もう…そんなこと言われたら断
れないじゃないの…」

困ったような顔を浮かべると、仕方なしに、と言った具合に紙のコ
ップを差し出す。

「おおー！ ついにかがみが折れたー！ どきどきの初・体
験！」

「よしやー、いつきだーひいらぎいー！」

「こなちゃーん。あんまりあおると、おねーちゃん、またへソ曲げ
ちゃうよー？」

ビールが注がれるのに合わせ、外野の騒ぎたてる声が響く。ちなみにいつのまにか一緒になってはやしたてている妹のつかさと言うと、とつくに顔が真っ赤である。誰が飲ませたかなどもはや考えたくもなかったが。

「…ちよつと黙ってろ、あんたら」

かがみはコップを口に運ぼうとしながらきつちりと釘を刺した。そして、ためらうようにコップの中の泡立つ液体を見て、おそろおそろ口に運んだ。

おおー…と、外野が息を呑む。こういうときは、見ている側も妙に緊張するものだ。

一瞬、表情を緊張させたかがみだが、意外にもいったん口をはなすと、そのまま、もう一回口をつけてんぐ、んぐ、と一気にいつてしまった。

おおっ…と面々が一心に見守る中、ぷはっとう口をはなすと、ほんのり紅くなった顔でためらいがちに言った。

「なかなか…おいしいじゃない…」

どつと外野が盛りあがった。

「おおお！　なんていいのみっぷり！」

「いいぞお、ひいらぎい！」

「おねーちゃんすごい！」

「おめでとーひいらぎちゃん！」

「おおーようやったどー終い！」

「かがみちゃんすてきー！」

外野からは、感動の拍手が巻き起こった。

そして、これをきっかけに、場の理性は完全に崩壊を遂げた。

もともと、小宴会場（食堂を兼ねる畳部屋）が解放されている時間ではなく、面々が集まっているのは、二つの4人部屋のうちの一つだった。そこにつまみやら酒やら持ちこんで、8人全員が輪を描くような形で集まっていたのだ。

壁の薄い宿は、ちよつとどんちゃん騒ぎに至ろうものなら、すぐにも下の階に響きわたるような造りである。

そのために最初はそれなりに遠慮していた面々も、しかし、なにかが壊れ始めるに従って、徐々にそれを無くしていった。

「一番！ 日下部みさお！ 埼玉連隊第17軍歌いきますー！！」

「いよっ！ まってましたー！」

ついに歌まで歌い出した。

「くるよー、みさきっちゃんの十八番くるよー！」

「みさちゃんがんばってー」

ぐあつと後ろ手に手を組んで、“全体休め”の姿勢を取ると、日下部はたからかに歌い出した。

「おーれっときさーまっはおとーこーとともーでえっ ♪ はーなも

ちらーずつみいのおちーをかけーるう！」

「うおーええぞー！ この帝国軍人がー！」

「きゃーみさきつちゃーん、こつちこつちい！」

ろろろとした歌声は、ややしたたらずなうえに調子っぱずれだったが、もはや気にする者はここにはいなかった。

「もーやつせ、もやーせえぞ、いのーちをもやーせー！ わーればうこーくつのごこーろーざしー！」

「よっしやー！ 2番泉軍曹！ 平野綾子で“さよならミッドウエー”いきまーす！」

「こらーまだ歌の途中やぞー！ この軟弱もんがー！」

「こなちゃーんがんばれー！」

腕を振って歌う日下部の横で、泉は構わず歌い出した。

「ズッキン ドッキン みなみのしまで、ズッキン ドッキン あなたとわたし♪ さーよーなーらミッドウエー！」

「ひとたびちよーくのくだあらずばー！ てっけーつひのーたーまとーんぼーやりい！ わーれかーんるーいにみをーそーめてえ、きよーうくのせんちーへおもーむつかんー♪」

「ったくう。だから、ハメ外しすぎだったの」

「まあまあ」

部屋のすみで、やさぐれてコップをあおるかがみの横では、みゆきが酌をしていた。

「いーっしょけーんめい、ばんりをかけーるーっ、かあーかるほう
ーしーんほねーみをくだーけー」

「あ・あー、あのひとおはー、いーってしまあつたのー、と・お・
いーと・お・いーみなみのーしまあにー」

のりのりで振り付けをする泉と、手をふって歌う日下部の前では、
肩を組んで合唱したり、手拍子したり、声援を上げたりと、やや意
味不明になった光景ができあがっていた。というか、全員とつくに
できあがっているのだが。

「おっしゃー！ つぎ、だれやー次ー！ はよーやれー」

「それではー3番、峰岸軍曹。えー、相沢 舞波で“二人傘”歌い
ます」

おおー、ええどー、と例によつてはやしたてる面々の前で、今度は
峰岸が歌い出すのは演歌である。

「時う雨、降られてえ ♪ 軒端の宿へエ ♪ しのぶう二人のオ雨傘
ふたつつ ♪ 知イってちぎれぬう、浮きイ世の定めえ ♪ さけてえ
渡れぬウ茨あ道い ♪」

「おお…なんというしづい歌声…」

「すげえぜあやの…なんて哀切ただよう歌声なんだ…！」

「う、うち、うち、なんかなけてきてもうたわ」

「ふひいん、き、きよたかさああん」

情念のこもった峰岸の歌声に、その場が一転して感動と泣き上戸の嵐に包まれる。

「泣いてエ、泣いて・泣いて・泣いてもおゝ ああ、あの人才の、背中は去ってエゝ」

「ええい、やめえエ！ 辛気くさくなるわ！」

ぼそつと、黒井の投げた枕が命中し、峰岸は強制退場となった。

「ええい、仕切り直しや。誰か派手なのいかんかい！」

「あつ！ じゃあ私、広橋涼子の“もってけ パールハーバー”いきまーす！」

「あー！ じゃあ私西原沙織の“結婚なんて”歌うー！」

「ええとゝじゃあわたしはゝ福原力オリでゝえつとねー…“寝逃げで…あれ？ 曲名何だっけ”

と、とろんとした顔でぼけたおすつかさをさしおいて、黒井が口を開く。

「しゃあないなあ、ここは大御所登場ちゅうことで、うちがー」

立ちかける黒井の横をすり抜けて、そのとき、ゆらりと立った人影があった。
かがみである。

「えー…歌います…」

「おお、ついに御大の登場だー！」

「待ってましたー柊い！」

「がんばってーおねえちゃん！」

「いやー。すごかったねーあのときのかがみの歌いっぷりときたら
もー」

その後も延々とカラオケ大会は続き、そのどさくさに紛れ、さらに酒の入った面々は、さらに意図不明の狂乱騒ぎにおちいつていった。くわしい内容に触れるのは、各人の名誉を傷つけるため、割愛するが。

実をいうと、泉自身にも、そこから先の正確な記憶がない。
気がつく、なぜかちゃんと布団は敷かれており、その上で泉は寝ていたし、しかも、とくに疑問に思わなかった。
たぶん、敷いたこと自体は、身体が覚えていたのだろう。

「ちえー、いいなー。私なんか、あやのが歌ってたあたりから記憶

ねーぜ。せっかく冬の歌が聞けるいいチャンスだったのにー」

「…いい加減にしろよ、お前ら…」

かがみは、羞恥と怒りで真っ赤になった顔でうめいた。

「なんでー？ うまかったじゃん。本物そっくりだったよー？ あ
の加藤エミリの“百%…”」

「恥ずかしいからもう言うなっつってんでしょ！？」

人の少ない車内に、かがみの怒声がとどろく。

とはいえ、時刻は朝をすこし過ぎたあたりで、ちょっとくらい騒いでも気がねする目はなかった。

窓から走る夏の白い光が、かわるがわる車内を行きかっている。

泉たち三人は、千葉県内から東京へと続く、新千葉線の車内にいた。本当なら、車で移動するはずだったのだが、目当てのドライバー二人は前日の騒ぎから察するとおり、

二日酔いでダウンしていた。

ちなみに、この場にいる三人以外のメンバーも、ことごとく同様である。

実は、この場にはいなかったが、みゆきも無事だった。

が、「さすがに放っていつてしまうのは…」などと言い出して、うんうんうなって苦しむ面々の看護を買って出ていた。

「いや、しかし。まさかあそこまでひどいことになるとはねえ」

「無理ないわよ、私だってちょっと頭痛いような気がするもの。だからお酒なんてやめとけばよかったのに…」

「うん。もう、そう言つといてー。かなーりノリノリでのもんだじやん。もう、かがみったら好きなんだから」

ぐぎ、と齒ぎしりして、かがみは舌打ちのような声をもらした。また、からかわれるネタが増えたのが、よほど気に入らないのだから。

『えー、次は、海浜東口。海浜東口…』

と、車内アナウンスが流れる。

さらにかがみをからかおうとしていた泉が、「あ」と声をあげる。

「ーごめん。わたし、次で降りる」

「ん？ なに？ 用事？ こんなところで？」

「うん。ちょっとね。知り合いが入院してるんだけど。親戚の子。従妹なんだけどね。」

「ああ、そういえば、病院近いんだっけ。ここらへん…」

泉に言われて、ようやく気がついたようにかがみがつう。

「ちょっと会つてこようと思って。かがみは家に帰るんだよね？」

「ああ、うん。姉さんたちが帰ってるって言う話だし。顔出してくるわ。あんたは？」 日下部

「んー」と、日下部はやや齒切れ悪く言った。

「ま、ちょっと家帰ってくるわ。用足してきたいこともあるし」

「あ、そ。…それじゃあ、次会うのは明日の夕方ごろってことになるか」

「ーねえねえ、その前に一回集まって、ちょっと街寄ってかない？
三人で」

「え？」と泉の唐突な提案に言って、かがみは考えこむ顔になった。

「ーいい、とは、思うけど…時間合うの？ 17時には向こうに着くようにしないといけないのよ？」

「いいんじゃないね？ ちょっと早めに家出てさ。昼飯くってくついでって事で」

日下部が、横から賛同するのに、迷っていたかがみも、「うーん」と言いつつ、ようやくうなずいた。

「んー…まあ、ね。じゃあ、集合どうする？」

「そつだなーえつとー…あ、じゃあ、新千葉西駅さ。わかるでしょ？ あそこの正面で。それだと、移動とかしやすいからさ」

泉が言うのに、「あーそつだなー」と、日下部がうなずいた。

日下部はもともと地元の人間なので、この中では、近辺のことに一番詳しいのである。

「ま、とりあえず場所はそれでいいんじゃないの？ じゃ、時間とかどうする？」

日下部が言うのに、かがみが「んー」と、ちょっと考えこむ素振りを見せる。

「まだわかんない。あとで連絡するわ。こなた、今日家いるの？」

「うん。夜には帰ってると思うけど」

「あ、そ。日下部は？」

「あたしも夜ならいると思うけどーていうか、今日一日中ヒマっばいけどなー。兄貴も帰ってないし、家の掃除でもしとくかー」

日下部は、新千葉に、兄と二人暮らしで住んでいた。

両親はすでに他界していて、いない身の上である。

「じゃあ、時間とかはその時に電話して決めるって事で…」

かがみが言いかけたとき、電車のスピードが落ちた。

『間もなく、海浜東口、海浜東口でございます。お出口、左側となっておりますので…』

アナウンスが流れる。

ほどなくして、電車が停車して、泉は、二人と別れ、駅に降り立った。

第二十一回投稿分

電車を降りると、泉は、人の少ない改札を抜けた。

このあたりは、駅の周辺近くの、見るべきところもなにもないところだった。

すこしふるびた感じの住宅街を抜けると、新しく舗装された路面に出る。

泉はいつもの道をたどって、病院ちかくの、背の高い建物が確認できる辺りまでやってきた。

ときおり車とすれ違う。

搬入のトラックや病院関係者の車で、わりかし、この道路は交通量が多い。

千葉帝立軍海浜病院は、おもに、後期治療者や末期病患者の受け入れを多くやっていることで、ひと昔まえから知られている。

そのため、設備、技術ともに、最先端ものが揃えられていることでも知られ、その世界では、国際的にも有名をはせている場所だった。が、場所柄の関係上、実は相当に悪名高くもあった。

四年前の異種知性体本土上陸の際、日本海沿岸地域に張られた大防衛線は、そのことごとくが壊滅し、四国、中国、九州を含む埼玉以北地内は、またたくまに奪取された。

軍属外の人々を含む、多くの人命が一方的な虐殺の憂き目にあい、当時の犠牲者は死者・行方不明者を換算しても、三千二百万人をくだらない。

戦術核の集中運用により、元来の陸地の数%（山岳の標高部等を含む）を消失させ、ようやく侵攻の停止にこぎ着けたが、旧埼玉北部に形成された異種知性体の戦略拠点（HIVE）、通称・武蔵野HIVEは、そのままに残された。

現在の埼玉―東京間の移動ルートに制限がされているのもこのためだった。

壊滅した、埼玉地域のあおりを受けて、現在の千葉県は、おもに南部を中心に軍事境界が敷かれ、元来の3分の2に、その敷地面積を減らしていた。

千葉県の現在の定住人口は、25〜6万人でいどで、そのほとんどが古くからの地元民であり、現在の中・高齢層で占められている。当初、現存する関東圏内では、ほぼ全域で軍令により退去勧告が為されたが、当時の千葉の人々は頑としてそれを拒み、元の自分の住居へ居座りを決めこんだ。

現在では、その居座り組が、千葉県沿岸地域を中心に、通称・新千葉コミュニティといわれる自治体を築き、埼玉戦線の一般兵士等軍属人達の、おもに生活面での支援に当たっている。

千葉の海浜地帯も、もっとも身近な保養の場として親しまれており、泉たちが、休暇の折りにここに立ち寄って過ごしていたのも、その関係だった。

どっちみち、軍事目的以外で軍事境界内を通行することは原則で禁止され、東京に向かうには、陸路で千葉を抜けるしかない。

泉達は、ほぼ全員が（日下部は、生家である千葉に兄と二人暮らし）東京に住居を置く面々で、千葉は寄り道するのには、格好の場所といえた。

玄関を過ぎて、受付に面会のことを伝えたと、ほどなくして通された。

事前に確認の連絡は入っていたのだが、容態が変わるのは、いつも知れないものだから、実はあまり変わりもない。

一階を抜けて、入院棟のある二階へ向かう。

時折、入院患者や、付き添いの看護人が着ている、薄いブルーや白のめだつ格好とすれ違いながら、静まりかえった廊下を歩く。

窓からは夏の日中の明るさがさしこんでいた。

漂う濃い薬品や消毒液の匂いを吸いこむと、泉はちよっと胸が苦しくなる感覚を覚えた。

昔は泉の母もここに入院していたことがある（入院生活を終えたの

も、ここだったか)。小さいころに慣れ親しんだ匂いが、記憶を思い起こさせることがある。

そもそも、最先端の設備・治療技術が揃っているとはいえ、どうして、より手の施しようのない患者をこの場所が受けいれているのか。それが、この病院が、周囲に悪い印象を与えている理由でもあった。通りを挟んですぐ向かい側には、軍立の療養所が建っており、地元の人間の、少々口さがない意見を言うならば、もっと直接的に「姥捨て山」と称されることも少なくない。

ようは、前線に立つ兵士達について、体のいい厄介払いしているのではないか――もちろんこれは、ほとんど根拠のない言いがかりである。

本土防衛作戦の大敗以前から、この病院の体制は変わっていないのだから、このことは、たんに軍部の体制に対する根深い不信感の現れであるとも言えた。

最終的には身を守るすべのない軍属外の人々は、身の安全を得るためには、軍の庇護を求めなければならない――が、本土防衛戦での決定的な結果は、誰の記憶にも新しい。

また、現在の戦況の悪さを知らない者も誰一人としていなかった。だからこう思うのだろう。本当に任せておいて大丈夫なのだろうか。無理もないことではあった。

根本的なところでは、現在の軍部を支持する人間は数少ないのである。ましてや、それに加えてラグランジュ・ポイントにおいて、現在行われている宙間移民船の建造のこともある。

いざとなったら自分たちを差し置いて逃げ出すのかも知れないという、そういう相手を信頼を寄せる先にすることは、なかなか難しいことではあった。

無意識に病室の番号を数え、従妹の病室の近くまでやってくる、と、まっすぐな廊下の先で、病室の扉が開くのを見かけて、泉はそちらに目をこらした。

（お…）

と、なんとなく泉は目を引かれた。こちらに向かつて歩いてくるのは、泉より二つばかり年上そうな娘だった。

背が高く、すらりとした体つきで、身ごなしも大人しそうだが、だいぶ均整の取れたものだった。

（なんか訓練とかやってんのかな）

と、泉は反射的に思った。

こういう身のこなしをする場合は、だいたいが軍属関係の人間である場合が多い。

階級など明らかに泉よりもいつこ程上そうだった。

とはいえ、今は泉も私服だ。

挨拶なんか交わすのも不自然なので、そのまま気づかないふりで、通りすぎてすれ違った。

短い髪を揺らしながら、静かに遠ざかっていく後ろ姿をちらりとだけ眺める。

（うわー…なんか落ち着きあっていいなあ。私と年近いくらいなのに）

思わず、そんなことを心の中でばやく。

おっと、とやがて、我に返ると、泉は、従妹の病室の前に立った。

「…あれ？」

ふとそこまで来て、ようやく気づく。

さっきの娘は、たしかこの病室から出てきたはずだったが。

いぶかしみながら、泉はドアをノックした。
すぐに従妹の声で、返答が返ってくる。

「そつえばゆーちゃん、さっきの人って知り合い？」

「え？」

きこ、きい、と車いすの音に混じって、ゆたかの声が聞こえる。

「ここに来るときにさ、ちょうどそこで見かけたんだよね。何か背が高く、えーと髪はこんぐらいかな？　ちよつと目つきするどくて、綺麗な顔した子」

「…あ、もしかして、岩崎さんのこと？」

ゆたかはやや親しげな様子で答えた。

「岩崎さん？」

「うん。岩崎みなみさん。最近、ようやく下の名前教えてもらったんだ」

へへ、とゆたかは嬉しそうに言った。

「もしかして、よく来てるの？」

「うん。あ…そんなによくってわけでもないんだけど。けっこう。私の着替え届けてくれたりとか、兄さんやお姉ちゃんからのお見舞

いの品持つてきてくれたりとかするんだけどね」

こう言うゆたかによると、さっきの、岩崎みなみ、という子は、だいたい半年ほど前に病室にやってきたのだという。

それから二週間に一、二回ほどのペースでやってくるようになり、言葉を交わすうちに、少しずつ会話らしい会話をするようになっていった、ということらしい。

「きよたか兄さんの受け持ってる、訓練学科ってところのの生徒さんなんだって。お母さんがここに
つとめてて、家がこの近くらしいの。それで、よく兄さんに頼みごとされるらしくって」

ふうん、と泉は相づちを打った。

「けっこう仲良いの？」

「うーん…どうかな？ 岩崎さんってあんまり喋らないほうだから」

ゆたかは少し考えこんでから、泉を振り仰いで言った。

「でも、とっても優しい人だよ。私は好き」

そっか、と泉は笑って返した。

ゆたかの笑顔は心底嬉しそうなので、つられて自分まで嬉しくなってしまうようだ。

「あれ…でも、待って。訓練学科、てことは…訓練生…え」

泉はふと今ごろ気がついて、愕然として言った。

「あれで私より年下、って…うつそ。ちょっと待って。なに？あの落ち着きの違い？ 遺伝子レベル級？ 私、全然立場ないんだけど…」

「…お姉ちゃん？ どうかしたの？」

「あ、う、ううん。なんでもない…」

泉は適当にごまかして言った。

「でも、よかったね。そういう人ができて。友達にはなれそう？」

「ん…よくわかんない。けど、そうなれたらいいなっていうふうには思う…かな。うん。私、こういうの慣れてないし…ほんと、よくわかんないんだけど…」

もじもじと、じれったくなるような歯切れの悪さで、ゆたかは答えた。

「優しい人なんですよ？ その岩崎さん」

「うん…」

「ゆーちゃんが仲良くなりたいうって思うんなら、大丈夫だよ。ゆーちゃんはいいい子だからね。べつに無理しなくたって、なれるよ。そのうち」

泉は、車いすを押しながら言ってやった。

小さなころから身体が弱く、長い入院生活を送る境遇のゆたかには、

昔から友達も出来にくかった。

小児病棟のころには、よく話す子もいたらしいが、ゆたかの周りにいるそういう子たちは、だいたいが先に退院するか、なかには早くに亡くなってしまった子もいた。

治っていった子たちにしても、その後も見舞いにくるようなことは、希だったそうだ。

ゆたかのような子と友達として付き合いを続けるのは、年頃の子供にはなかなか難しいことだったろうから、無理もないが。

「うん。……そうかな」

ゆたかはうつむいて、自信なさげに言った。

あまり小さなころから病院生活を送り続けているせいか、ゆたかには、すこし甘えん坊の気がある。

ただ、賢い子なので、自分でそれをわかっているらしく、周囲には、逆にそれと知らせないよう、気を遣ってふるまうふしがある。

かわりに、身内相手には遠慮がなかった。

こうして煮え切らない態度を見せるのも、実はそのあらわれだった。

面会を終えて病院を出ると、時刻は中途半端なところだった。

そろそろ、本格的に上がりはじめた気温に、クーラー漬けになった肌が辛い。

これからどうしようか、と泉は考えた。とりあえず、家に帰ってから昼ご飯作って食べてー。

午後からは、母の墓参りに行くつもりだった。

時期はすこし過ぎいていたが、こういうときでもないといけないのもたしかだった。

例年どおりなら、父が先に行っているところだったが、今年はそうも行かなかつたらしいので、かわりに、花を持っていくように頼ま

れていた。

手持ちが乏しいので、泉は、まず最寄りのATMに寄ることにした。

第二十二回投稿分

学校はもう夏休みに入っていた。

「……」

泉は何をやるでもなく、ただただ漫然と過ごしていた。

今年から受験生である。

将来のことも考えなければならない。

就職するか、大学に進学するか…。

そうは言われても、というのが本音ではあった。

わかってはいる。

それがどう考えてもまともな考えであるのは。

ただ、いまいちしくりこなかった。

いきなり投げ出された平和な・というか、とにかく今まで泉が過ごしてきたのとは、「違う」世界。

ともかく、ここで過ごしかないのなら、それなりに考えなければならぬこともある。

(ここで過ごす…？)

ごろり、と畳の上で寝返りをうちながら、泉は自分に嫌気が差すのを感じていた。

いったい何を考えているのだろうか。

自分は戻るのだ。元の世界に。

ここは違う世界だ。

ふと、電話の鳴る音が聞こえてきた。

泉はだるさを感じつつ、顔を持ち上げると、起き上がって、取りに出た。

「はい。もしもし。泉です」

受話器を取り上げると、なじみのある柔らかい声が丁寧な口調を返す。

みゆきだった。

「ああ、みゆきさん？　なに？　…え？　え。ああ、うん。うん？　…べつにいいけど？　うん」

泉は受話器越しにうなずきながら、返事を返した。

「わかった。午後からね。ああ。うん。はい。…はい」

ひととおり話を終えると、泉は電話を切った。

電話はみゆきからのお誘いだった。

今日の午後、泉の家に来ると言うことらしい。

『宿題の片付けをかねて、勉強会などを、と思つて…』

ということだったが、みゆきからそういう誘いがあるのは、珍しいことだった。

普段なら、（これまでのこちら側の泉の記憶によると）、そういうことは、頼りがいのあるかがみの

家で、それもぎりぎりになってからやるところのはずだ。

まあそういうこともあるかもしれない。

泉は深く考えずに畳の部屋に戻ると、手元にあったノートを引きよせて、寝ころんだままめくり読んだ。ぱらぱらとみみずがひっからびたような泉の文字が、素早く通りすぎていく。

（ん？）

と、そのときふと気づいて、泉はページの隅に目をとめた。
そこに書かれてある数字の羅列に目をこらす。
なんだろう。

文字は、丁寧な書体で、しかもわかりやすく、きっちりと書かれて
あった。

よく見ると数字ばかりでなく、アルファベットも間に挟まれてある。
羅列だけ見ると、まったくでたらめな文字の塊だった。

どこことなく、というかはつきりと意味不明だ。

もちろん、泉はそんなものを自分で書いた覚えがなかった。

というより、これは明らかに自分の字体ではない。

泉の悪筆ぶりと来たらとくに前述してあるほどだが、それにくら
べてその文字列はいえ、そこだけ浮き上がっているようにさえ
見えるほど整っている。

（あれ？ これ……）

泉は思った。

その文字には見覚えがあった。

というか、自分がよく宿題写すときににらめっこしている字ではな
いか。

みゆきのだ。

ぼんやりと泉は考え、そういえば、とふと思いだした。

夏休み前に一度だけみゆきにノートを貸した覚えがある。

とすると、これはみゆきが書いたのだろうか。

（端書きかな？ でもこれ現文だよな）

なんだろう、と泉は首をかしげた。いや。待てよ。たしかこれは非常
事態時における危機管理用無線連――。

「いつつ、」

泉は頭を押さえた。なにか急に頭痛がした。

「なんだろ…あーもう」

泉はノートを畳んで、適当に投げ出した。
まあいい。

たいしたものじゃないだろう。

泉はベッドから起きて、立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7726f/>

らき すた オルタネイティブ ~ 震える時空

2010年10月8日12時33分発行